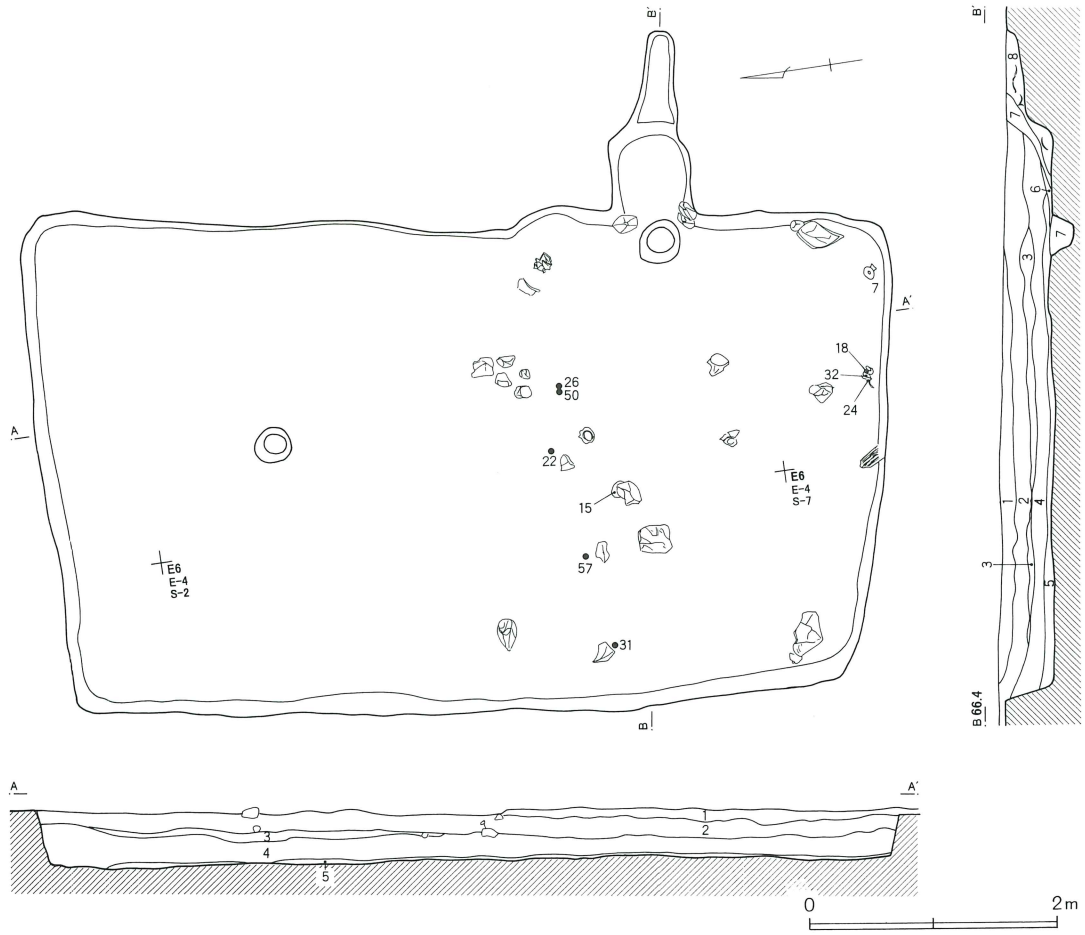
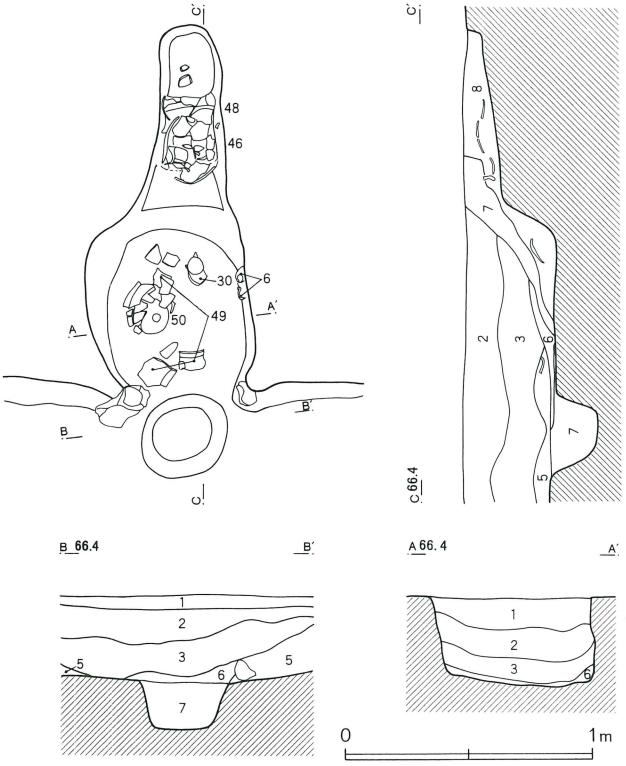
第79図　第31号住居跡

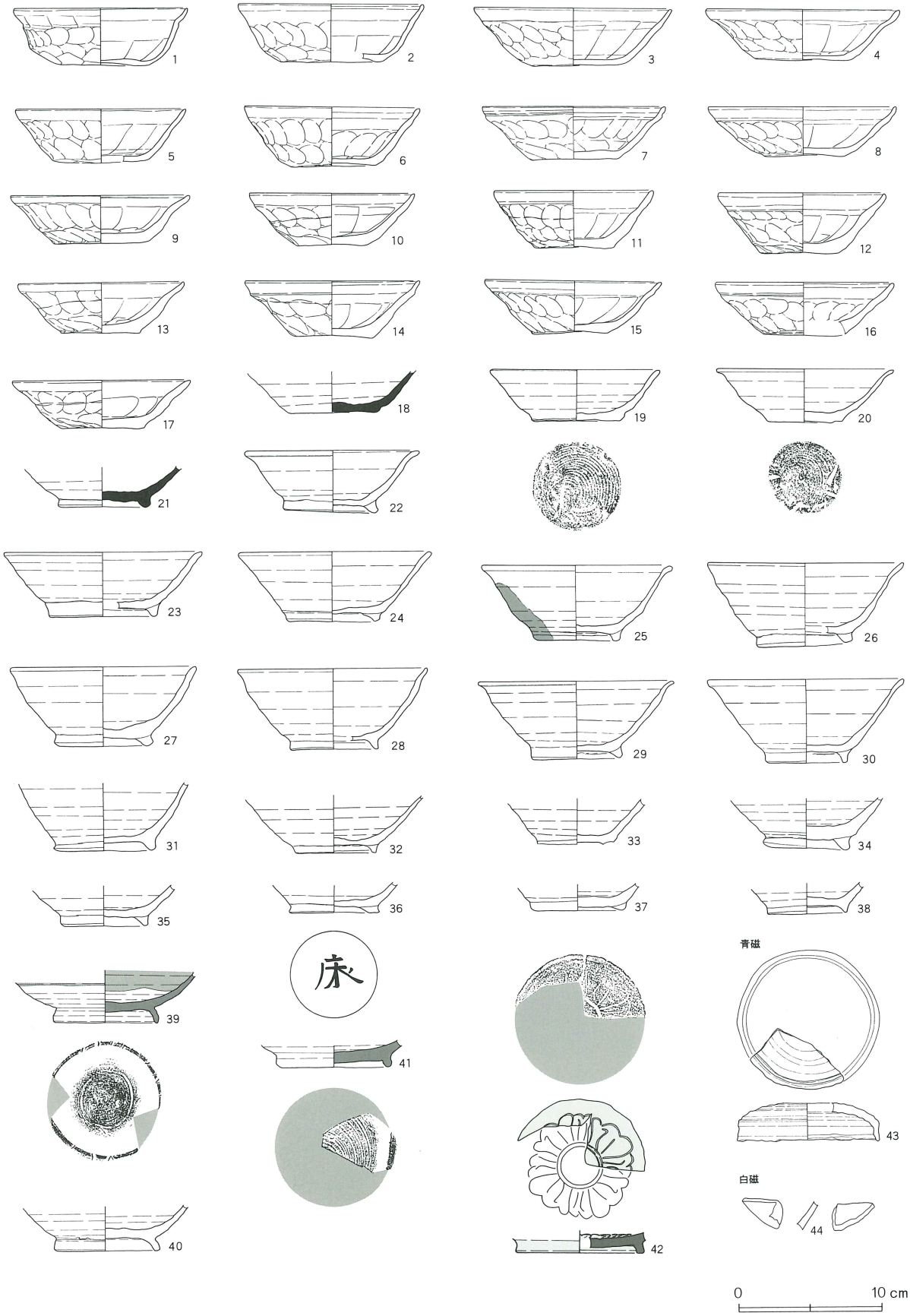




第３１号住居跡

1　こげ茶色土　Ｂ軽石混じり焼土、炭化物を多量に含み、Ｂ軽石を少量含む 粘性あり
2　こげ茶色土　焼土粒子、炭化物を多量に含み、Ｂ軽石を微量含む
3　淡黄褐色土　粘性あり（貼り床）
4　褐色土　焼土、炭化物を少量含む 遺物を多量に含む
5　暗黒色土　暗褐色土を少量含む 炭化物層
6　赤褐色土　焼土ブロック主体粘性あり（天井部崩落土）
7　黒色土　炭化物層
8　黒褐色土　焼土、炭化物を多量に含む

第80図　第31号住居跡出土遺物（１）



3は坏AⅥ、他は坏BⅤである。18から20は、椀である。2・5は底部、18は口縁部が欠損している。

18は須恵器（S）、他は須恵器（NS）である。21から38・40は、高台付椀である。24・27から29・31・32・36・38は、須恵器（NS）であり、他は、須恵器（HS）である。36は、底部外面に墨書「床」がみられる。39は、灰釉陶器の高台付椀である。41は、灰釉陶器の長頸壺の底部である。42は、緑釉陶器の陰刻花文高台付椀の底部である。43は、中国産の青磁で、六角合子の蓋である。44は、中国産の白磁で、高台付椀の破片である。21・31・32・34から40は口縁部、23・28は底部が欠損している。25は、外面体部から高台にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

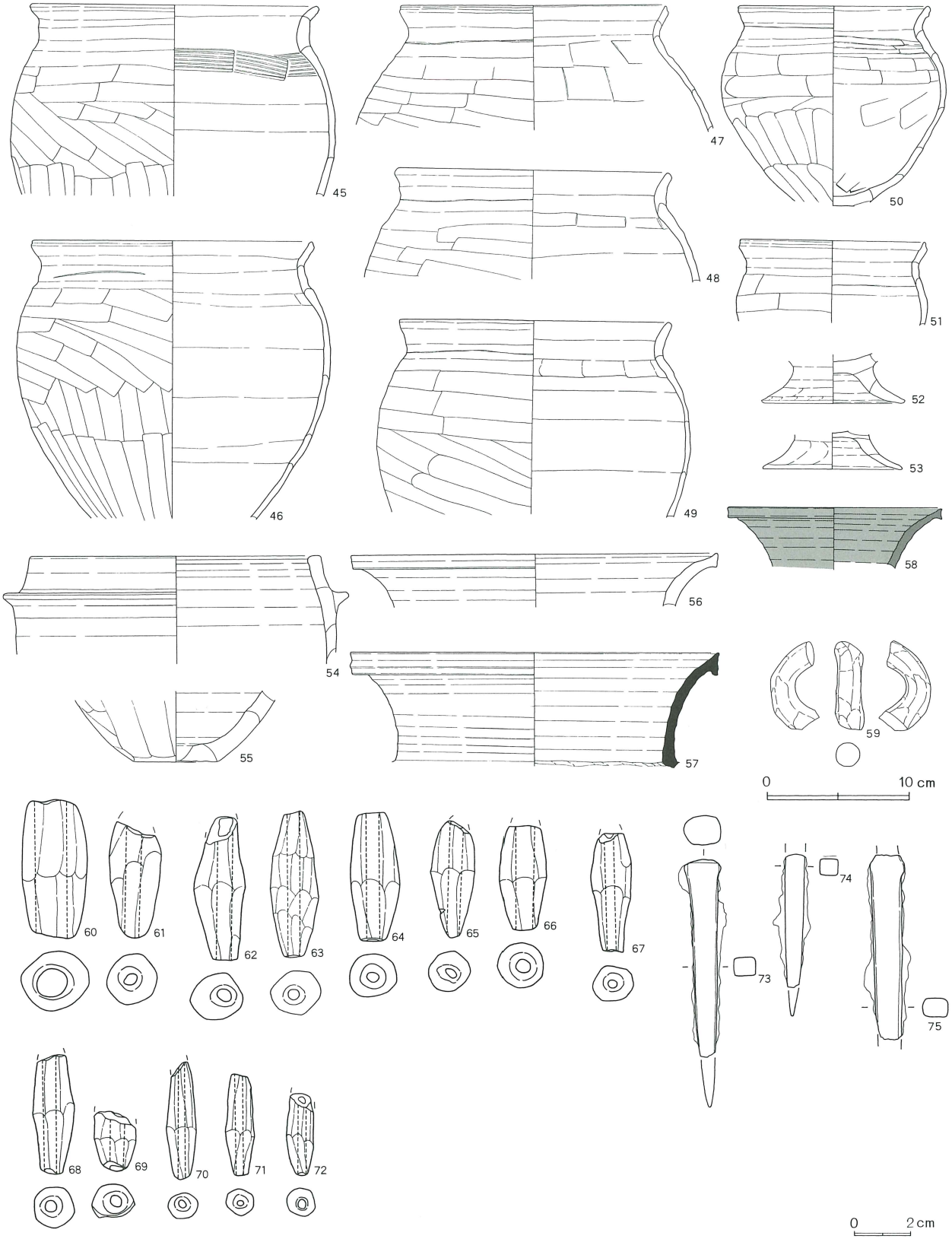
45から49は、土師器の甕である。50から53は、土師器の台付甕である。54・55は、土師器の羽釜である。56・57は、須恵器の大甕の口縁部である。56は須恵器（NS）、57は須恵器（S）である。58は、灰釉陶器の長頸壺である。59は、須恵器（NS）の把手である。46は底部、45・49・は胴部下位以下、47・48・51は胴部中位以下、54は胴部上位以下、58は頸部が欠損している。52・53・55は、底部のみである。

60から72・74は、土錘である。73から75は、鉄製品である。73は釘の破片、75は棒状鉄製品である。

第53表　第31号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏AⅤ	H	12.0	4.0		6.0	E, F	良好		黄橙	50	
2	坏AⅥ	H	12.8	4.1		6.7	B, E, H	不良		黄橙	40	
3	坏AⅥ	H	13.7	4.0		6.1	F, H	良好		赤褐	20	
4	坏BⅤ	H	13.4	3.6		6.5	F, H	普通		赤橙	50	
5	坏BⅤ	H	11.7	3.8		6.3	B, F, H	普通		やや暗い赤褐	20	
6	坏BⅤ	H	12.1	4.2		5.7	A, B, E, F	普通		赤褐	70	カマド
7	坏BⅤ	H	12.7	3.7		6.0	B, E	良好		赤褐	90	
8	坏BⅤ	H	12.9	3.5		5.4	B, E, I	普通		淡橙	30	
9	坏BⅤ	H	12.3	3.4		6.2	B, D, E	普通		淡黄橙	90	
10	坏BⅤ	H	11.4	3.7		4.4	B, E, F	不良		暗黄褐	30	
11	坏BⅤ	H	11.0	4.0		5.6	B, E, H	良好		淡橙	50	
12	坏BⅤ	H	11.5	4.2		5.3	B, E, H	不良		黄橙	20	
13	坏BⅤ	H	11.4	3.6		5.5	B, E, H	普通		淡橙	60	
14	坏BⅤ	H	12.1	4.0		5.3	B, D, E, H	普通		暗橙	90	
15	坏BⅤ	H	12.2	3.8		5.4	C, F, H	不良		暗黄橙	40	
16	坏BⅤ	H	12.2				B, E, H	不良		暗橙	30	
17	坏BⅤ	H	12.4	3.4		5.7	B, E, H	普通		黄橙	80	
18	椀	S				6.0	B, E	良好	R	灰	100	底部のみ
19	椀	NS	11.7	3.6		6.0	B, H	良好	R	灰白	30	
20	椀	NS	12.0	3.7		5.0	B, D, H	良好	R	灰褐	100	
21	高台付椀	S				5.9	B	良好	R	灰白	100	底部のみ
22	高台付椀	HS	12.0	4.3		6.4	B, E, I	普通	R	浅黄橙	75	
23	高台付椀	HS	13.6	4.6		7.3	C, E, H	普通	R	浅黄橙	40	
24	高台付椀	NS	13.2	4.8		6.0	E	普通	R	黄灰	60	
25	高台付椀	HS	13.0	5.2		5.2	B, E, I	良好	R	にぶい橙	40	
26	高台付椀	HS	13.5	5.9		5.7	B, E, I	普通	L	にぶい橙	30	
27	高台付椀	NS	12.8	5.5		6.1	B, E, H	良好	L	灰白	25	
28	高台付椀	NS	13.1	5.6		5.9	B, E, F	良好	L	灰	20	
29	高台付椀	NS	13.4	5.5		5.9	B, I	普通	R	灰黄	50	
30	高台付椀	HS	13.4	5.8		5.0	B, E, I	普通	R	灰黄	40	カマド
31	高台付椀	NS				6.1	B, E, I	普通	L	灰白	40	
32	高台付椀	NS				5.5	B, E, H, K	良好	R	灰褐	100	

第81図　第31号住居跡出土遺物（２）



第54表　第31号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
33	高台付椀	HS					B, E, I	普　通	L	にぶい橙	20	カマド
34	高台付椀	HS				4.9	B, E, I	良　好	R	にぶい橙	20	
35	高台付椀	HS				5.3	B, E, I	普　通	R	にぶい黄橙	20	
36	高台付椀	NS				6.1	B, D, H	良　好	R	灰　白	100	底部。墨書「床」
37	高台付椀	HS				5.8	B, E, I	普　通	R	にぶい黄橙	20	
38	高台付椀	NS				5.1	B, E, I	良　好	R	灰　白	20	
39	高台付椀	K				7.1	D	良　好		濃　灰	50	
40	高台付椀	HS				6.9	I	良　好	R	灰　白	40	
41	高台付椀	K				7.4	D	良　好		淡　灰	10	
42	高台付椀	M				8.7		良　好		淡黄緑	20	陰刻花文
43	六角合子蓋	青磁	9.8				D	良　好		濃　緑	30	
44	高台付椀	白磁						良　好		白	5	
45	甕BⅢb	H	19.8				B, E, I	良　好		明赤褐	25	
46	甕BⅢa	H	19.8				B, C, E, G	良　好		明赤褐	80	
47	甕AⅠc	H	18.4				B, E	良　好		暗赤褐	50	
48	甕AⅠC	H	18.9				B, E, I	良　好		暗　褐	40	カマド
49	甕AⅢC	H	18.7					良　好		暗　褐	50	カマド
50	台付甕	H	13.2				A, B, E, I	良　好		明赤褐	80	カマド
51	台付甕	H	12.6				B, E, G, I	良　好		暗　褐	40	
52	台付甕	H				9.6	B, C, E, I	良　好		明赤褐	40	
53	台付甕	H				9.6	C, E, I	良　好		明赤褐	40	
54	羽AⅡaロ	HS	20.2		2.9		B, D, E, H	良　好		淡　橙	20	
55	羽底部	HS				5.8	A, B, E, H	良　好		淡　橙	25	
56	甕	NS	25.6				A, B	良　好		白	20	
57	甕	S					B, G	良　好		灰	10	
58	長頸壺	K	14.8				D	良　好		濃緑灰	10	
59	把　手	NS					B, D	良　好		淡　灰	5	

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第31号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第32号住居跡（第82図・第83図）

D－6・7、E－7グリッドで確認した。周辺は、遺構が密集していたが、覆土の上面に多量の焼土がみられたため、比較的容易に確認できた。

第55表　第31号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
60	橙	100	5.0	2.4	1.1	25.4	AⅠ	Ⅰa	4	
61	にぶい黄橙	70		1.9	0.6	11.8	C1	Ⅰa	113	
62	褐　灰	90		1.8	0.6	11.6	C1	Ⅰb	114	
63	にぶい橙	100	5.3	1.8	0.4	13.6	C1	Ⅰa	115	
64	褐　灰	100	4.7	1.7	0.5	12.3	C1	Ⅰa	116	
65	にぶい橙	80		1.5	0.5	8.0	C1	Ⅱb	117	
66	にぶい黄橙	70		1.6	0.5	8.7	C1	Ⅰa	118	
67	浅黄橙	70		1.4	0.3	7.1	C1	Ⅱa	119	
68	浅黄橙	80		1.4	0.4	8.1	C1	Ⅰb	120	
69	褐　灰	20		1.5	0.4	3.2	C1	Ⅳa	121	
70	褐　灰	90		1.0	0.3	3.3	C2	Ⅰb	383	
71	浅黄橙	80	3.7	1.0	0.2	2.7	C2	Ⅰb	384	
72	にぶい橙			1.0	0.3	2.4	C2	Ⅲb	385	

住居跡の北東部は調査区外のため、全容は不明であった。住居跡の形状は、長方形であったと考えられる。規模は、長辺4.1ｍ・短辺2.98ｍ・深さ0.80ｍであった。

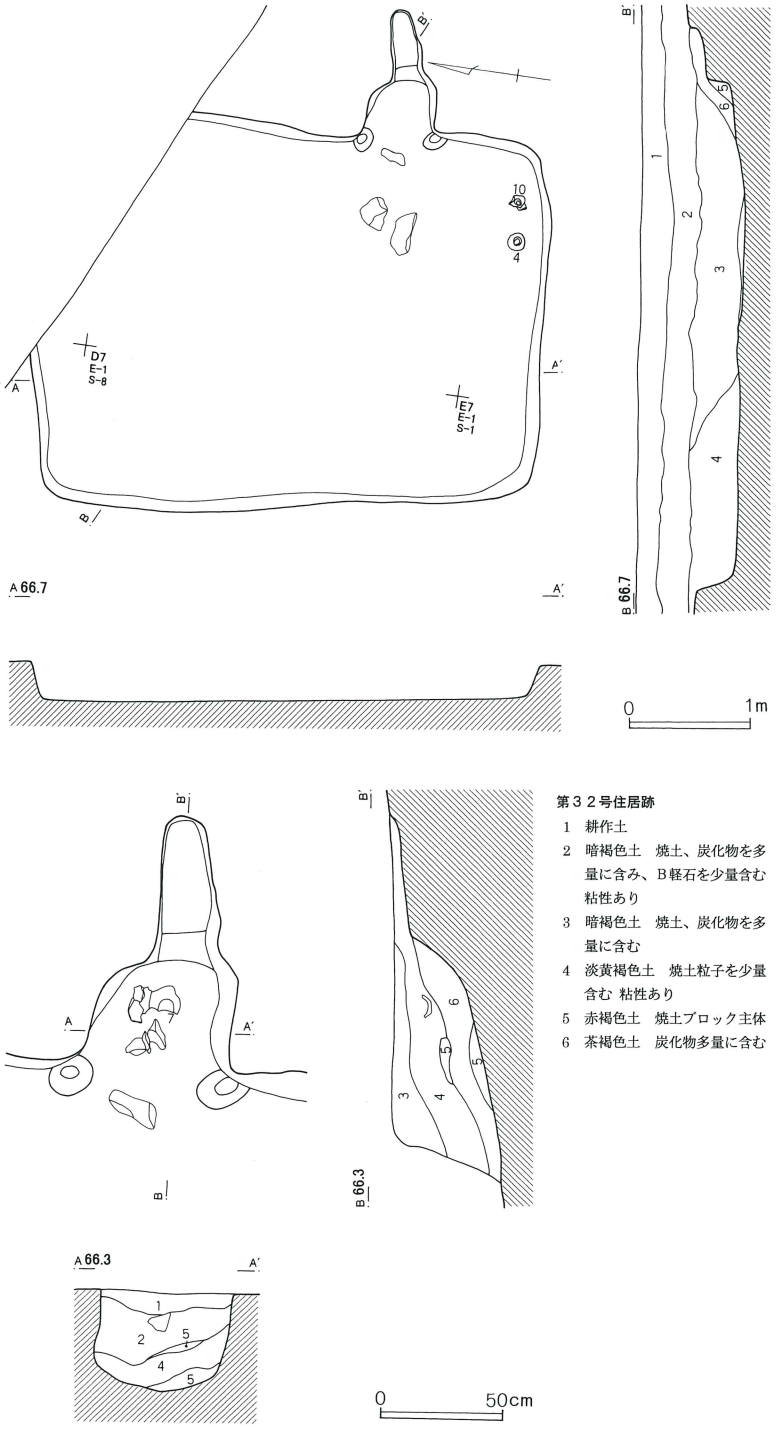
主軸方位は、Ｎ－84°－Ｅであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。焚き口部の両端に、補強材の石の抜取り痕跡を検出した。燃焼部には、掘り込みがみられなかった。燃焼部から煙道部にかけては、緩やかに傾斜し、段をもって細長い煙道部に移行していた。

遺構の切り合いは、みられなかった。

遺物は、住居跡の南東隅から須恵器の高台付椀（4・10）が出土した。

第82図　第32号住居跡



1・2は、土師器の坏ＡⅥである。3は、須恵器（ＨＳ）の椀である。4から11は、高台付椀である。6・9・10・11は須恵器（ＮＳ）、ほかは須恵器（ＨＳ）である。6は底部と高台、8は口縁部と底部、9は口縁部、11は口縁部と高台が欠損している。

12は、黒色土器の高台付椀である。13から15は、灰釉陶器である。13は高台付椀、14は皿、15は段皿である。12は口縁部、13・14は口縁部と底部、15は底部が欠損している。

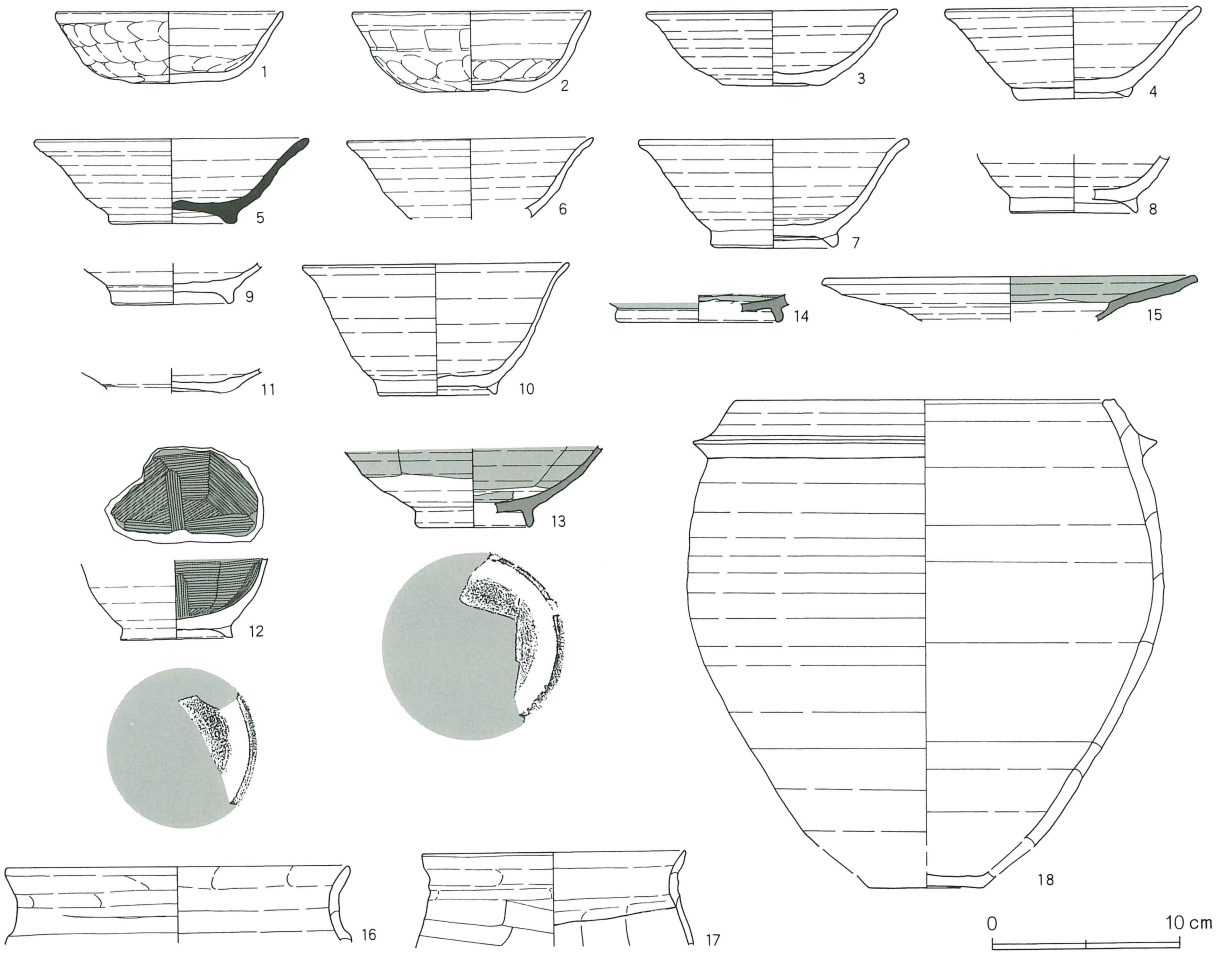
16・17は、土師器の甕である。18は、須恵器（ＮＳ）羽釜である。16は、口縁部のみである。17は、胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物から第32号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第33号住居跡（第84図・第85図・第86図）

Ｅ－７グリッドで確認した。当初、第35号住居跡のカマドと考え調査を行った。しかし第35号住居跡の東壁に切られた住居跡であることが判明し、１軒の住居跡とし調査した。遺構の重複が激しく、カマド燃焼部の一部と煙道部のみを検出した。残存部の深さは0.30ｍ

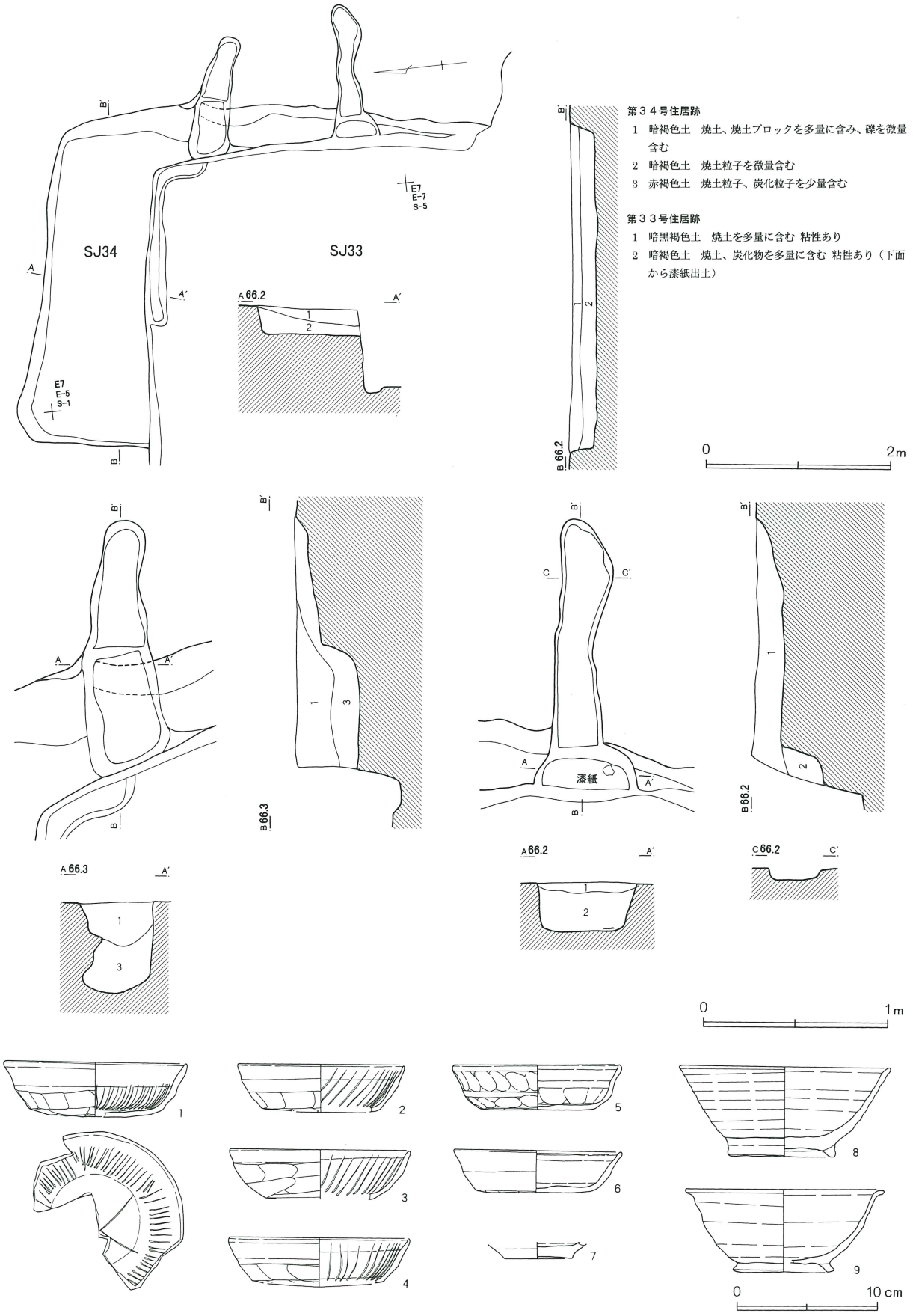
第83図　第32号住居跡出土遺物



第 56 表　第 32 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅵ	H	11.9	3.7		4.8	B, D, E	普　通		暗　褐	60	
2	坏 A Ⅵ	H	12.4	4.1		5.5	B, H			淡　黄　褐		貯蔵穴
3	椀	H S	13.1	3.8		5.2	B, C, E, K	良　好		淡　橙	60	
4	高台付椀	H S	13.1	4.7		5.8	B, E, G, H	良　好		淡　橙	80	
5	高台付椀	H S	14.2	4.3		6.3	B, E, H	良　好		外－灰褐。 内－灰白	25	
6	高台付椀	N S	12.9				B, E, I	普　通		灰　白	20	
7	高台付椀	H S	14.0	5.5		6.1	B, D, E	良　好		明　褐	40	カマド
8	高台付椀	H S				6.5	B, E, H	良　好		淡　赤　褐	25	貯穴
9	高台付椀	N S				6.0	B, E, I	普　通		灰　白	20	
10	高台付椀	N S	14.0	6.7		6.1	B, E, I	良　好			60	貯穴
11	高台付椀	N S					E, I	普　通		灰　白	10	
12	高台付椀	黒色				5.9	F, H	良　好		黒　褐	30	
13	高台付椀	K				5.8	B	良　好		淡　灰　白	30	カマド
14	高台付皿	K				8.3	B	良　好		暗　灰　褐	10	
15	段　皿	K	19.3				B, D	良　好		淡　灰　白	10	
16	甕　A	H	18.0				B, E, H	良　好		淡　橙	20	
17	甕　A	H	13.8				C, E, H, I	良　好		明　赤　褐	15	
18	羽 B Ⅰ	H S	20.3		2.2		B, C, D, G			明　赤　褐	70	カマド

第84図　第33・34号住居跡・出土遺物（1）



第３４号住居跡

1　暗褐色土　焼土、焼土ブロックを多量に含み、礫を微量含む

2　暗褐色土　焼土粒子を微量含む

3　赤褐色土　焼土粒子、炭化粒子を少量含む

第３３号住居跡

1　暗黒褐色土　焼土を多量に含む 粘性あり

2　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり（下面から漆紙出土）

第85図　第33号住居跡出土遺物（２）

であった。

主軸方位は、N－89°－Eであった。

カマドは、東壁で検出され、燃焼部から段をもって細長い煙道部に移行していた。

カマドの燃焼部の底面に接して、漆紙文書が出土した。釈文等については、別に詳述する。

遺構の重複関係は、第34・35号住居跡より古かった。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第33号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第34号住居跡（第84図・第85図）

E－７グリッドで確認した。遺構の重複が激しく、確認に手間取った。

第35号住居跡に大半を切られ、全容は明確にできなかったが、住居跡の形状は長方形であろう。規模は、短辺3.52ｍ・深さ0.18ｍであった。

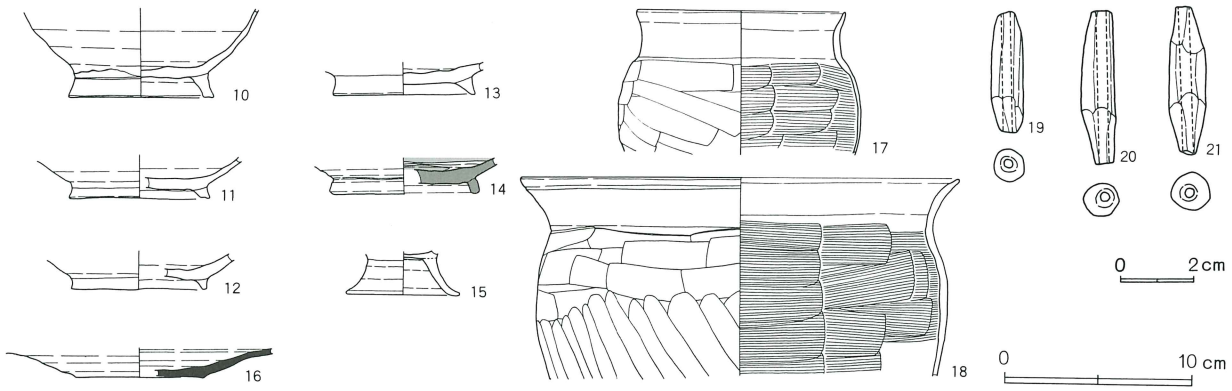
主軸方位は、N－108°－Eであった。

カマドは、東壁で検出した。袖部は、検出できなかった。不整楕円形に燃焼部は、浅く掘り込まれ、燃焼部から煙道部へ大きく段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第35号住居跡より古く、第33号住居跡より新しかった。

１は、土師器の坏AⅥ、２は、坏AⅣである。３は、須恵器（NS）の坏である。４から９は、高台付椀である。９は須恵器（NS）、他は須恵器（HS）である。10は、須恵器（S）の皿である。11は、灰釉陶器の高台付椀である。３・９は、底部のみである。５・10は底部、６は口縁部、７・８・11は口縁部と底部が欠損している。

第86図　第33・34号住居跡出土遺物（２）



12は、土師器の台付き甕である。13から15は、土錘である。12は、台部のみである。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第34号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第35号住居跡（第87図・第88図・第89図・第90図・第91図）

Ｅ－７グリッドで確認した。周辺には、住居跡や土壙が密集し、確認に手間取った。しかし、覆土上面の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は方形で、規模は長辺5.90ｍ・短辺

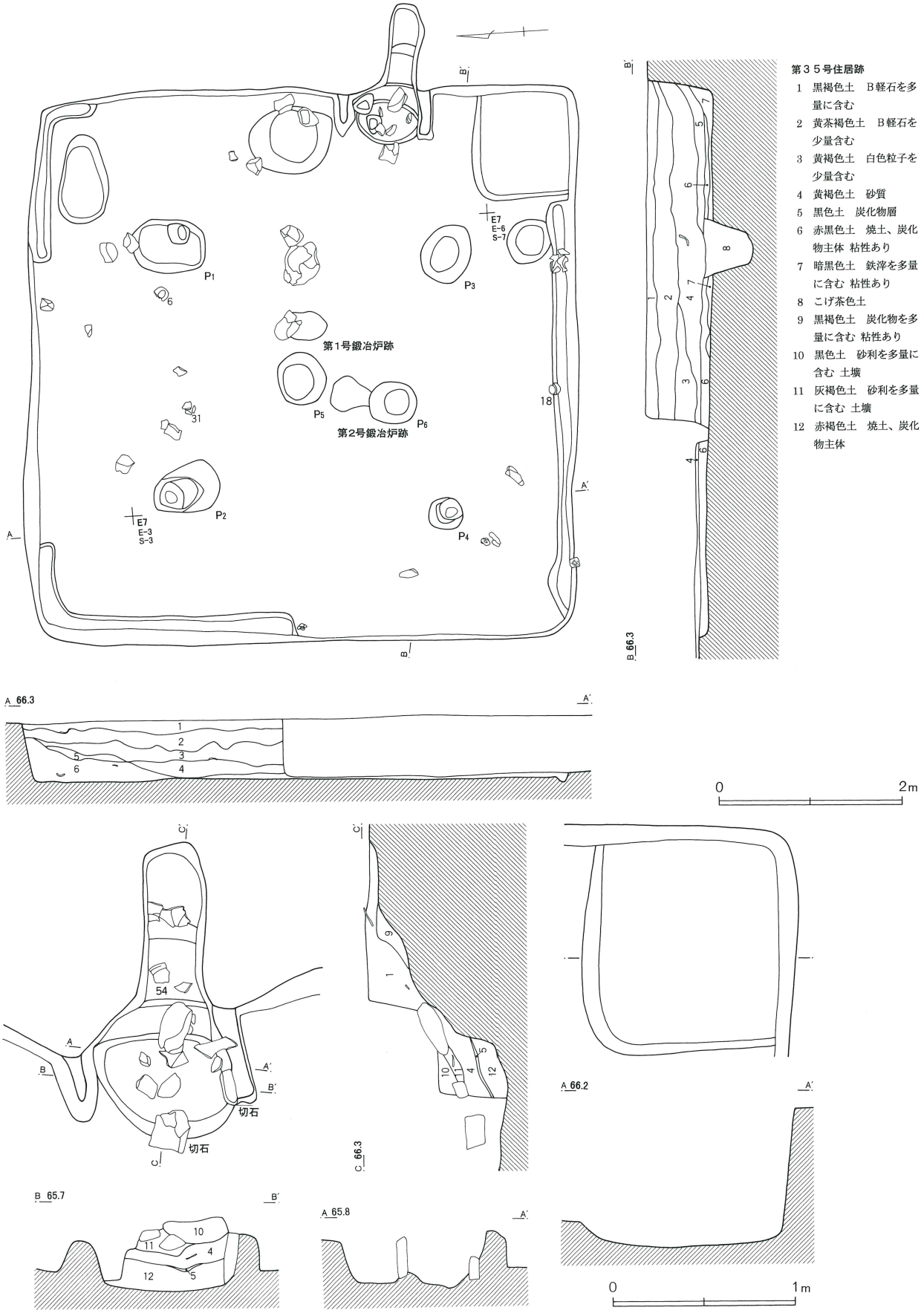
第57表　第34号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏（暗文）	H	12.8	3.9		9.4	B, E	良好		淡黄褐	50	
2	坏（暗文）	H					B, E, H	良好		黄褐	10	
3	坏（暗文）	H					B, E, H	普通		黄褐	20	
4	坏（暗文）	H					B, H	良好		暗橙	20	カマド
5	坏 A Ⅱ	H	11.7	3.2		8.0	B, D, E	普通		黄橙	100	
6	坏 A Ⅱ	H	11.9	3.0		8.3	B, E, H	普通		黄橙	100	
7	椀	NS				4.8	B, E, I	普通		灰白	10	
8	高台付椀	HS	14.7	6.9		7.3	B, E	良好		明褐	80	
9	高台付椀	HS	13.9	5.8		6.3	B, E, I	普通		淡黄	70	
10	高台付椀	HS				7.5	B, E, I	普通		浅黄	60	
11	高台付椀	HS				7.2	B, E, I	良好		にぶい黄橙	10	
12	高台付椀	HS				7.2	B, E, I	普通		にぶい黄橙	10	
13	高台付椀	NS				7.3	B, E, I	普通		灰白	10	
14	高台付椀	K				7.5	D	良好		灰	20	
15	台付甕脚	H				5.7	B, E, I	普通		橙	10	
16	須恵皿	S				6.8	B, I	良好		灰	10	
17	台付甕	H	11.0				B, C, E, H	普通		暗茶褐	30	胴上半以上
18	甕 A Ⅳ a	H	23.2				B, E, H	良好		やや暗い橙	20	口縁部のみ

第58表　第34号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
13	橙	100	4.1	1.0	0.3	2.8	C 2	Ⅰa	122	
14	橙	100	3.9	1.0	0.2	2.8	C 2	Ⅰa	391	
15	黄橙	100	3.2	0.8	0.2	2.1	C 2	Ⅰa	386	

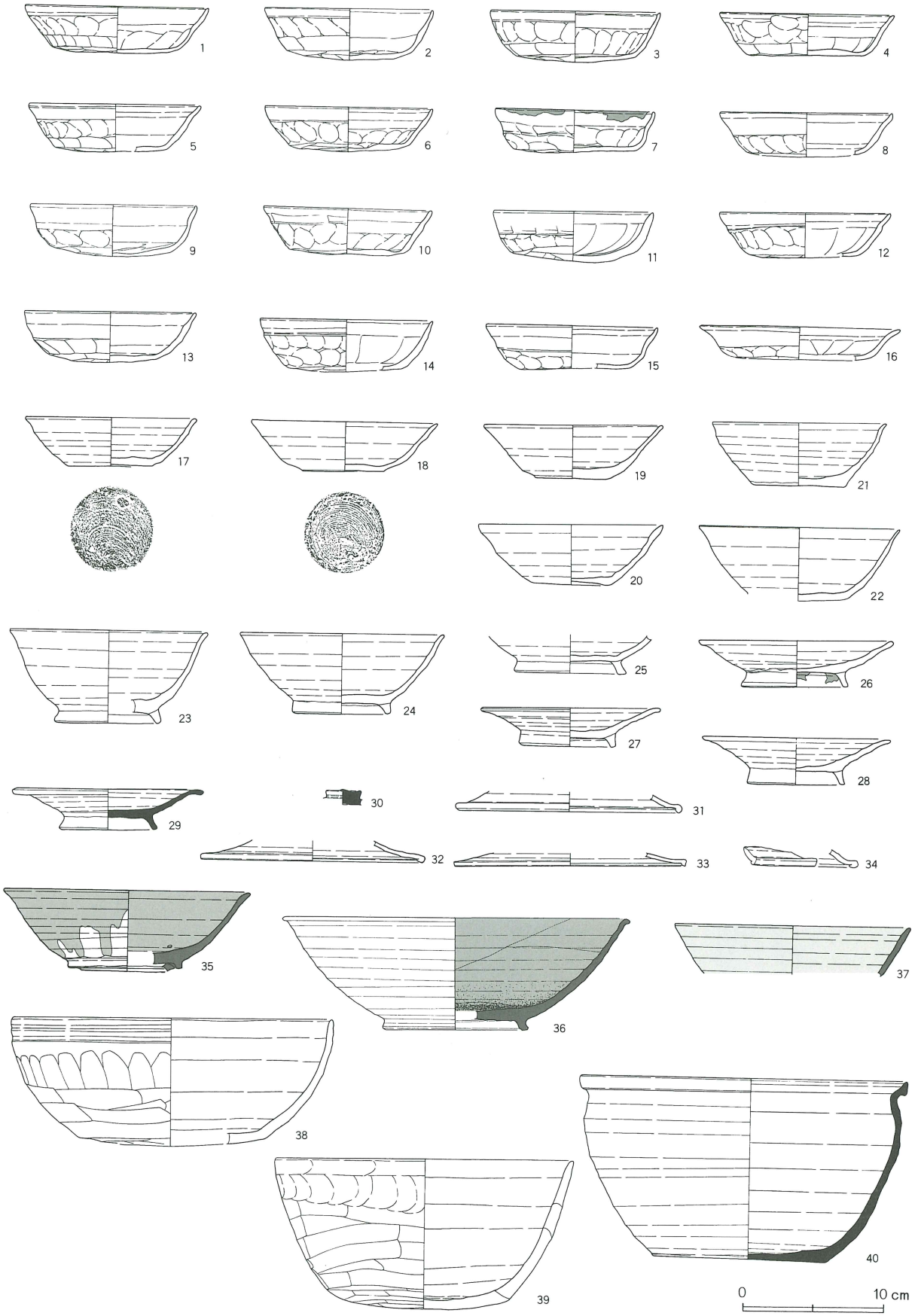
第87図　第35号住居跡



第３５号住居跡

1　黒褐色土　B軽石を多量に含む
2　黄茶褐色土　B軽石を少量含む
3　黄褐色土　白色粒子を少量含む
4　黄褐色土　砂質
5　黒色土　炭化物層
6　赤黒色土　焼土、炭化物主体 粘性あり
7　暗黒色土　鉄滓を多量に含む 粘性あり
8　こげ茶色土
9　黒褐色土　炭化物を多量に含む 粘性あり
10　黒色土　砂利を多量に含む 土壙
11　灰褐色土　砂利を多量に含む 土壙
12　赤褐色土　焼土、炭化物主体

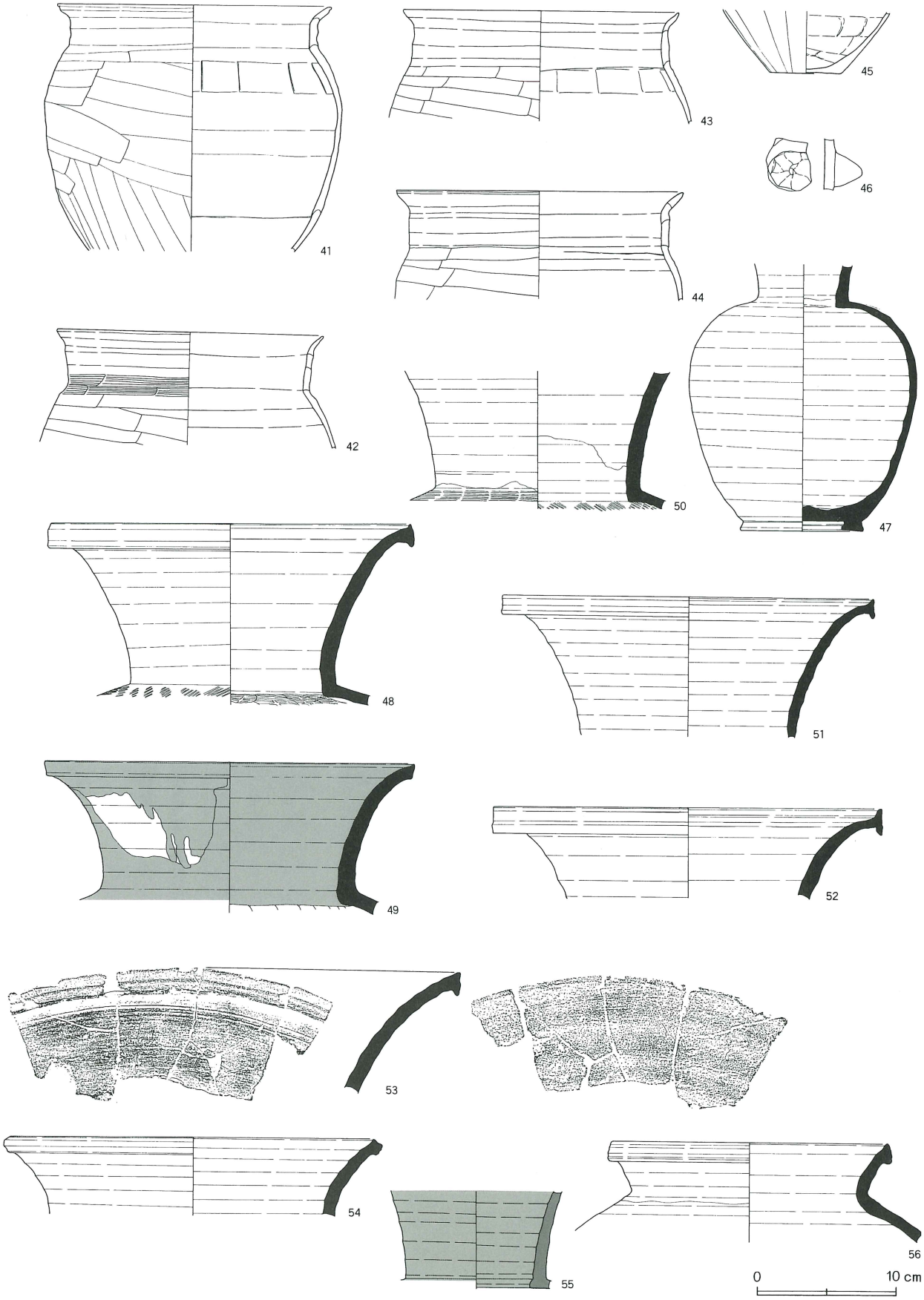
第88図　第35号住居跡・出土遺物（1）



第59表　第35号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅱ	H	12.9	3.3		7.0	B, D, E, H	良好		青橙	40	
2	坏 A Ⅱ	H	11.8	3.6		6.3	B, E, H	不良		淡白橙	80	
3	坏 A Ⅱ	H	11.9	3.5		8.3	B, E, H	不良		黄橙	70	
4	坏 A Ⅲ	H	12.2	3.0		8.3	B, E, H	不良		淡橙	60	
5	坏 A Ⅱ	H	11.9	3.3		7.9	B, E	良好		黄褐	60	
6	坏 A Ⅳ	H	11.7	3.1		6.8	B, E, H	不良		淡橙	70	
7	坏 A Ⅳ	H	11.1	3.1		8.3	B, D, E	普通		淡黄褐	90	
8	坏 A	H	12.0				B, E	普通		橙	30	
9	坏 A Ⅳ	H	11.6	3.6		8.1	B, E, F, H	不良		淡橙	80	
10	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.2		8.0	B, E	普通		茶色	70	
11	坏 A Ⅳ	H	11.1	3.6		6.3	B, E, H	普通		黄橙	100	
12	坏 A	H	11.9	3.1		6.5						
13	坏 B Ⅳ	H	12.0	3.6		6.0	A, B	不良		橙	50	
14	坏 B	H	12.0	3.7		6.5	B, E, H	不良		こげ茶	30	
15	坏 A Ⅳ	H	12.0	3.2		7.8	B, E, H	普通		淡黄橙	30	
16	皿	H	13.9	2.3			B, E, H	普通		黄褐	30	
17	椀	N S	11.9	3.4		5.9	B, E, I	良好		灰	60	
18	椀	H S	12.9	3.5			B, E, I	良好		にぶい橙	60	
19	椀	N S	12.6	4.0		5.1	B, E, I	普通		灰白	70	
20	椀	H S	12.9	4.3		5.2	B, E, G	普通		浅黄	70	
21	椀	N S	12.1	4.5		6.3	B, E, I	普通		黄灰	90	
22	高台付椀	H S	14.0				B, E, H	良好		浅橙	70	
23	高台付椀	N S	13.9	6.5		7.1	B, E	普通		灰白	50	
24	高台付椀	N S	14.3	5.6		6.4	B, E, I	普通		灰白	50	
25	高台付椀	H S				7.7	B, E, I	普通		浅黄	20	
26	高台付皿	H S	13.5	3.3		7.2	B, E, I	良好		灰黄	95	
27	高台付皿	N S	12.4	2.7		6.2	B, D, H	良好		灰白	80	
28	高台付皿	H S	13.1	3.3		6.7	B, E, I	良好		にぶい橙	50	
29	高台付皿	S	13.3	2.9		6.5	B, D	良好		灰	90	
30	蓋	S					B, C, D	不良		淡黄白色	10	紐のみ
31	蓋	N S				15.5	B, C, D	不良		暗黒褐色	10	
32	蓋	N S				15.6	D, F	普通		淡灰色	10	破片
33	蓋	H S				16.2	B, D	不良		淡橙色	10	破片
34	蓋	N S				7.1	D, F	普通		淡灰色	10	破片
35	高台付椀	K	17.2	5.4		7.6	D	良好		淡緑灰色	70	
36	高台付椀	K	23.9	7.8		9.5	D	良好		淡緑灰	40	金付着
37	高台付椀	M	11.5				B	良好		淡緑	10	
38	鉢	H	22.4	9.0		13.0	B, D, E	普通		橙	30	
39	鉢	H	21.0	10.5		11.3	B, E	良好		淡橙	60	
40	鉢	S	23.0	12.8		12.0	F, K	良好		灰	50	カマド
41	甕 B Ⅲ b	H	19.5				B, E	良好		明赤褐	20	貯蔵穴
42	甕 B Ⅲ c	H	18.9				B, E, H	良好		明赤褐	20	
43	甕 B Ⅲ b	H	19.6				B, E	良好		明赤褐	15	
44	甕 B Ⅲ a	H	20.4				B, C, E	良好		赤褐	50	カマド
45	甕底部	H				5.0	D, E	良好		外－淡黄褐 内－黒色	100	底部
46	つまみ	H					B, E	普通		淡橙		
47	長頸壺	S				8.7	B, D	良好		やや暗い灰	90	口縁部欠損
48	大甕	S	25.8				B, K	良好		黒灰	10	口縁のみ
49	大甕	S	26.6				B, G	良好		暗い小豆	10	口縁のみ
50	大甕	S					B, D	良好		灰	10	
51	大甕	S	26.3				B	良好		青灰	10	
52	大甕	S	27.5				B, I	良好		青灰	10	

第89図　第35号住居跡・出土遺物（２）



第60表　第35号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
53	大　甕	S					B, D	良　好		青　灰	10	
54	大　甕	S	26.0				B, D, G	良　好		青　灰	20	
55	長頸壺	K					D	良　好		淡　灰	5	破片
56	壺	S	19.5				B	良　好		青　灰	20	

第61表　第35号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
71	にぶい褐	100	5.2	3.5	0.8	34.7	B 1	Ⅰa	46	
72	褐　灰	90	5.6	1.7	0.5	14.1	C 1	Ⅰc	123	
73	褐　灰	100	5.1	1.7	0.6	10.8	C 1	Ⅰa	124	
74	にぶい黄橙	100	4.8	1.7	0.3	12.1	C 1	Ⅰa	125	
75	灰　黄	60		1.7	0.4	9.8	C 1	Ⅲb	126	
76	にぶい黄橙	40		1.4	0.4	3.3	C 1	Ⅷ	127	
77	浅黄橙	50		1.3	1.0	3.5	C 1	Ⅶ	128	
78	灰　黄	60		0.9	0.3	2.1	C 2	Ⅱa	387	
79	褐　灰	30		1.2	0.3	2.5	C 2	Ⅲa	388	

5.87m・深さ0.70mと大形である。壁溝は、北東隅、北西隅、南壁から幅約21cmに検出した。小穴は6基検出し、P1～P5が主柱穴と考えた。また北東隅とカマド左脇からは不整形の土壙を検出した。

主軸方位は、N－97°－Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残し構築し、やや長く住居跡内に伸びていた。右袖は、凝灰岩切石を補強材として使用していた。燃焼部は、不整楕円形に浅く窪まれ、中央に川原石を使用した支脚を検出した。一つ掛けカマドと考えられる。燃焼部から煙道部は、階段状に大きく段をもって移行していた。煙道部にも段を検出した。

貯蔵穴は、カマド右側南東隅で検出した。1辺1.15m、深さは0.18mの方形の貯蔵穴であった。

住居跡中央には、第1・2号鍛冶炉跡（第748図）があったことから、鍛冶工房と考えたい（鍛冶炉跡の章参照）。

遺構の切り合い関係は、第36号住居跡よりも古く、第33・34号住居跡よりも新しかった。

1から26は、土師器である。1から4は、内面に放射状暗文がみられる坏Aである。5から9は坏AⅡ、10・11・13から17・24は、坏AⅣである。12・18・19は、坏Aである。20は坏BⅡ、21は坏BⅠ、22は坏Bである。25は、土師器の皿である。26は、土師器の高台付椀である。1・2・3・4・9・12・18から20・23から26は、底部が欠損している。11は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

27から32は、椀である。29・30は、須恵器（HS）である。他は、須恵器（NS）である。

33は、須恵器（HS）の高台付大椀である。34は、須恵器（HS）の高脚高台付椀である。35から38は、高台付椀である。35・38は須恵器（HS）で、他は、須恵器（NS）である。36は底部、38は口縁部が欠損している。

39から42は、高台付皿である。39は、須恵器（NS）、40・41は、須恵器（HS）、42は、須恵器（S）である。

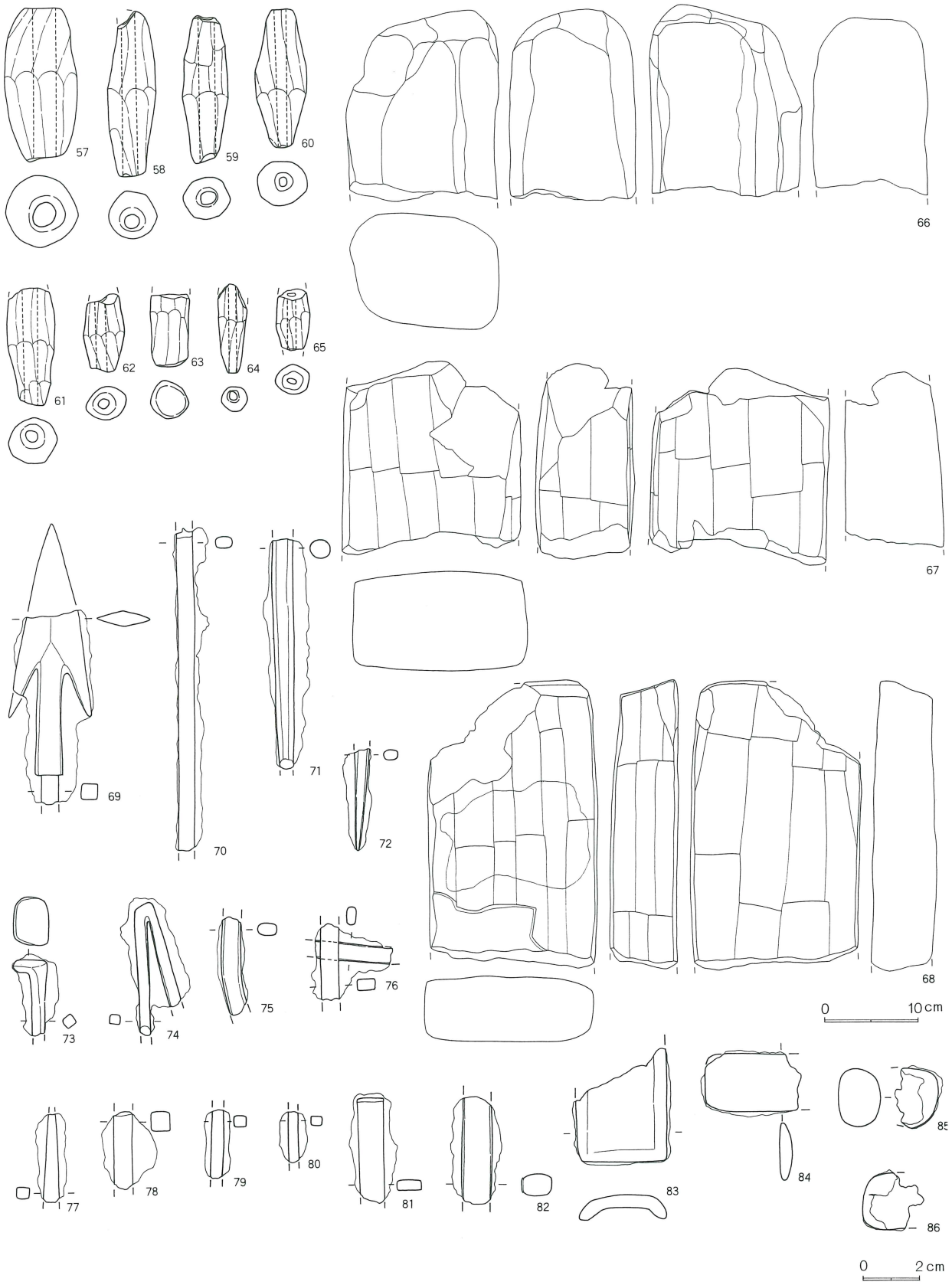
43から47は、蓋である。43は須恵器（S）、45は須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。43は紐のみ、44から47は口縁部破片である。

48・49は、灰釉陶器の高台付椀である。50は、緑釉陶器の高台付椀である。48は底部、49は口縁部、50は底部と高台が欠損している。

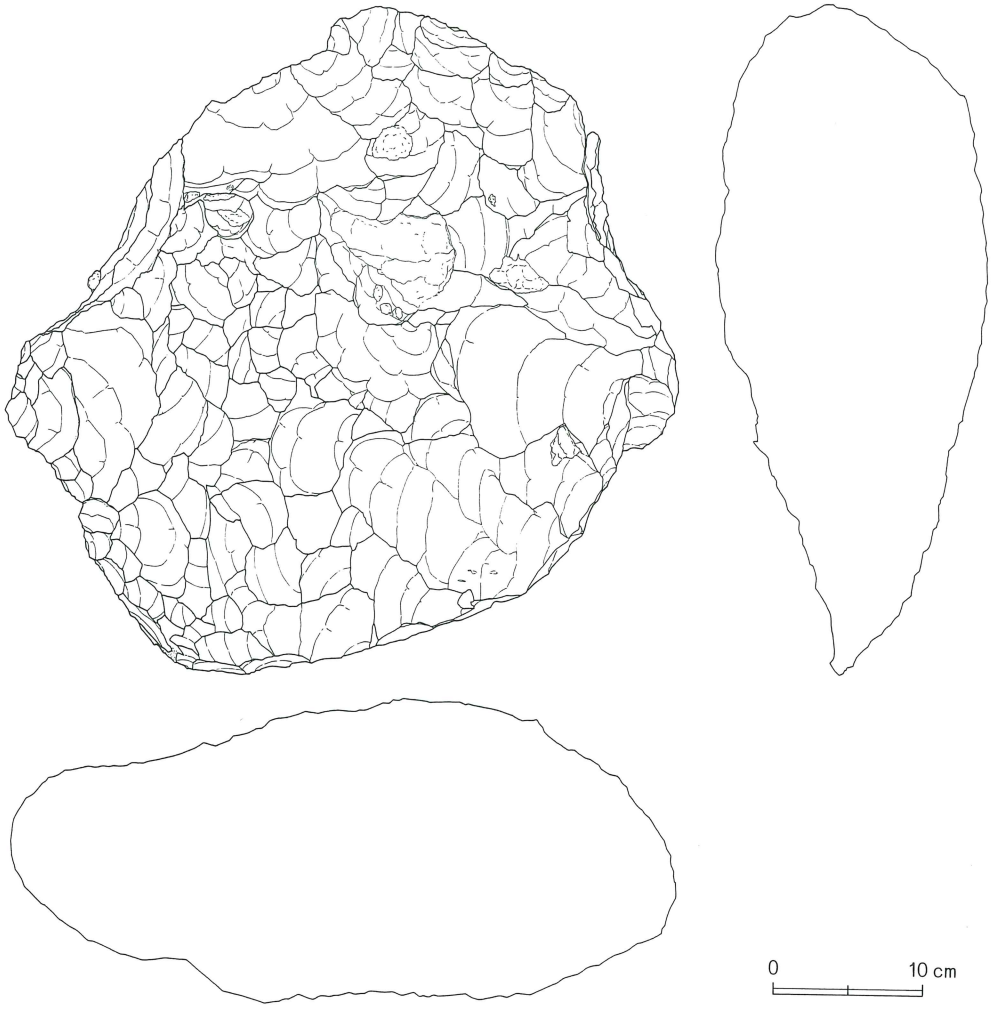
51・52は、土師器の鉢である。53は、須恵器（S）の鉢である。51は、底部が欠損している。

54から59は、土師器の甕である。60は、土師器の煮

第90図　第35号住居跡・出土遺物（3）



第91図　第35号住居跡・出土遺物（４）



沸具のつまみである。54から58は胴部中位以下、59は胴部中位以上が欠損している。

61は、須恵器（Ｓ）の長頸壺である。62から68は、須恵器（Ｓ）の大甕の口縁部である。69は、土師器の長頸壺である。70は、須恵器（Ｓ）の壺である。61は口縁部、70は胴部上位以下が欠損している。69は頸部破片である。

71から79は、土錘である。80は、砥石である。81・82は、凝灰岩の切石である。69から86は、鉄製品である。69は鉄鏃、72・73・77は釘と考えられる。70・71・74～76・78～82は棒状鉄製品、83は中央が凹む用途不明品、84は延板状鉄製品、85・86は鉄塊である。

101は、安山岩製の鉄床石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第35号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第36号住居跡（第92図・第93図・第94図・第95図）

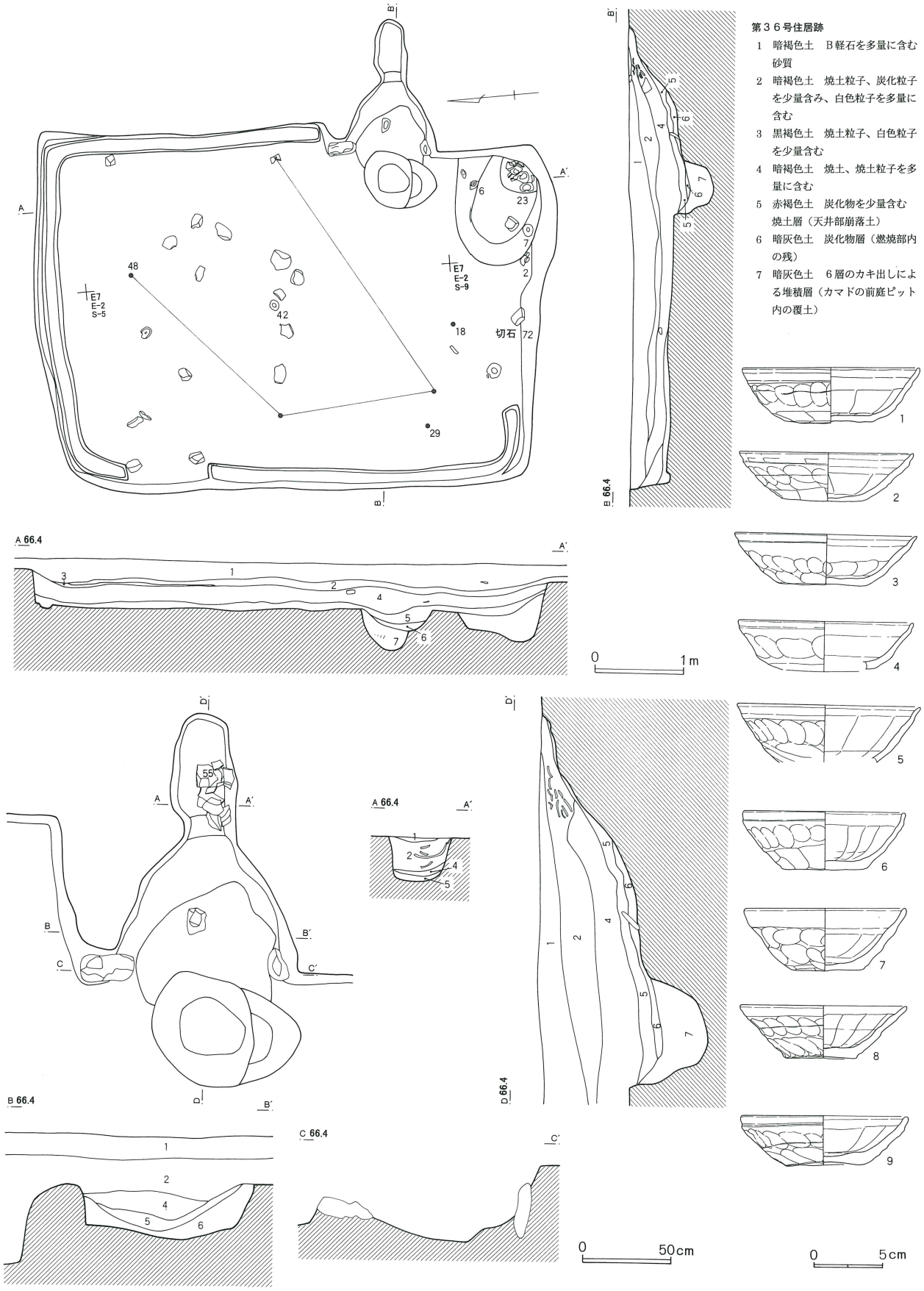
Ｅ－６・７、Ｆ－７グリッドで確認した。周辺には、住居跡や土壙が密集し、確認に手間取った。しかし、覆土上面に堆積した火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺5.45ｍ・短辺3.97ｍ・深さ0.50ｍであった。幅20cmの壁溝を、カマドと貯蔵穴部分を除き検出した。

主軸方位は、Ｎ－97°－Ｅであった。

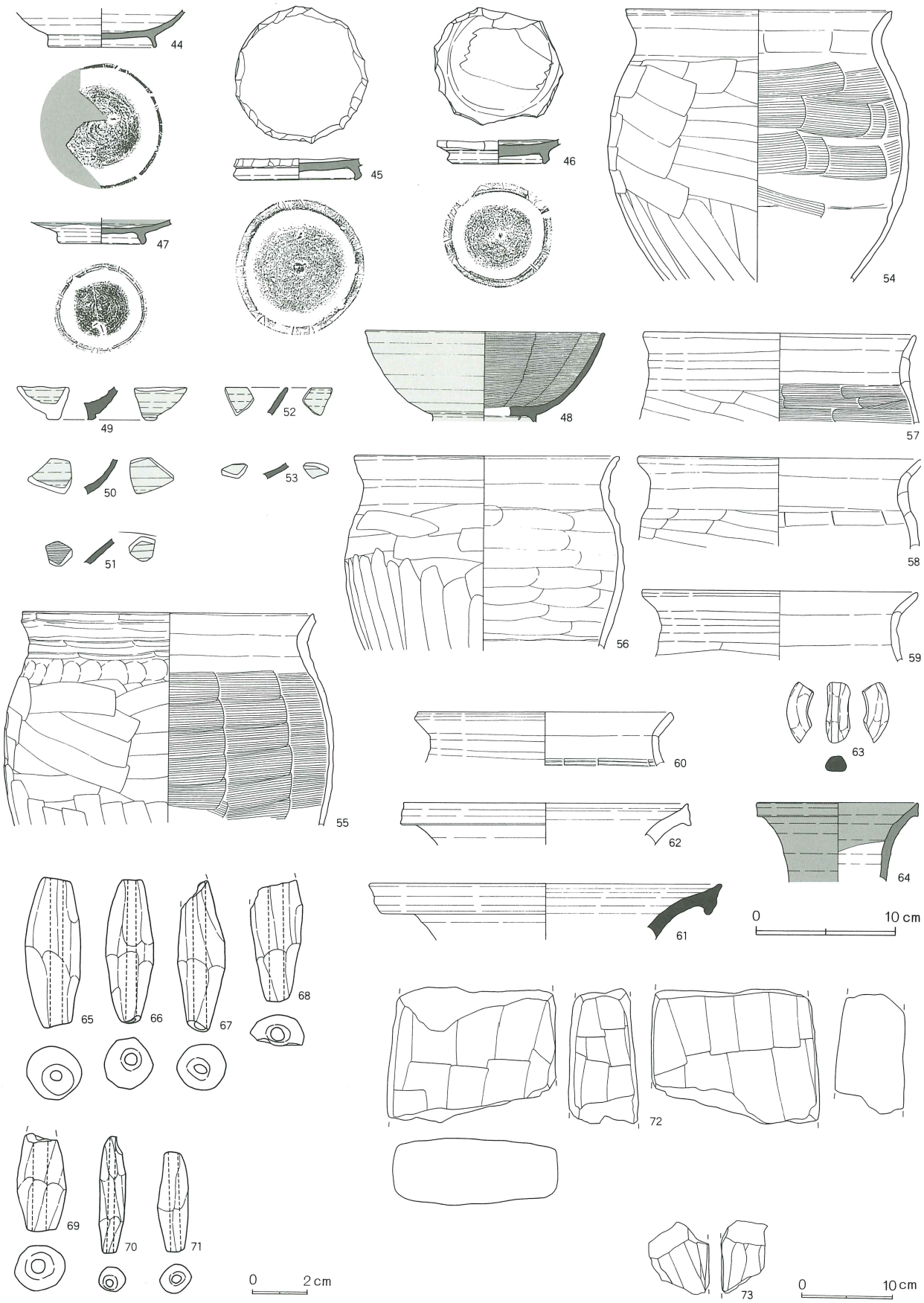
カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。左袖は短く、地山を掘り残し構築し、右袖は、住居の壁をそのまま利用していた「片袖型」である。両袖の先端には、川原石が補強材として使用されていた。燃焼部のほぼ

第92図　第36号住居跡出土遺物（１）

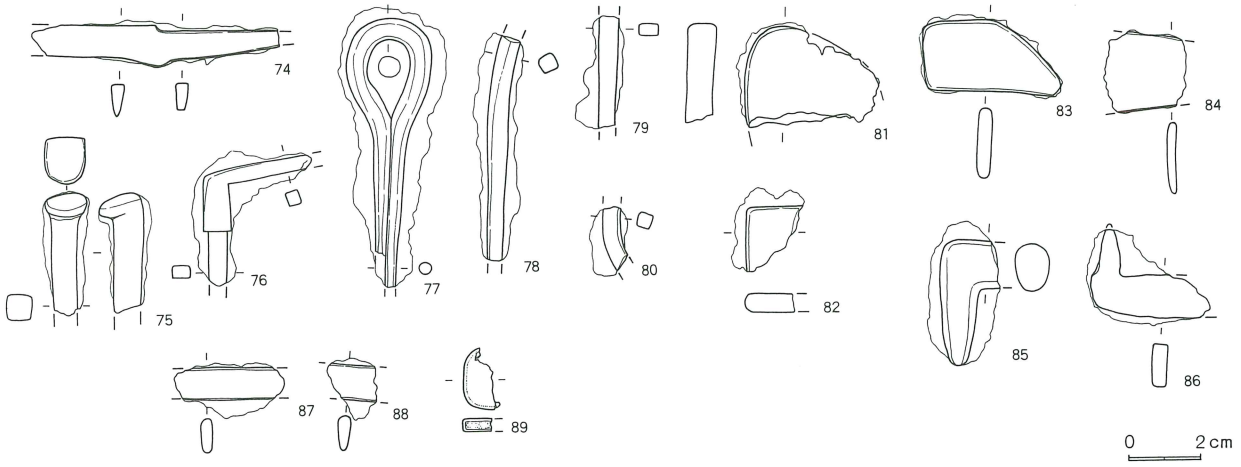


第93図　第36号住居跡貯蔵穴・出土遺物（2）

第94図　第36号住居跡出土遺物（3）



第95図　第36号住居跡出土遺物（4）



中央には、川原石を使用した支脚が出土した。一つ掛けカマドであろう。焚き口部から燃焼部にかけては、極く浅く不整形に窪んでいた。また焚き口部の前面には、径0.58m・深さ0.42mの小穴があった。炭化物が多量に出土した。燃焼部から煙道部は緩やかな傾斜をもって移行し、段はみられなかった。煙道部には、土師器甕（54）が補強材として使用されていた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。形状は不整楕円形で、長径1.2m・短径0.9m・深さ0.3mであった。隅の部分で一段深くなっていた。

遺構の切り合い関係は、第35・37号住居跡より新しかった。

遺物は、貯蔵穴内から土師器坏（2・6・7）・須恵器坏（11・18・20）・須恵器高台付椀（29・30）土師器甕（55）・把手（73）・鉄製品（76）が出土した。

1から9は、土師器の坏である。1は坏AⅤ、4・5は坏A、2・6は坏BⅠ、7は坏BⅡ、3・8・9は、坏BⅤである。4・5は、底部が欠損している。

10から22は、椀である。10は須恵器（S）、11・12・19は須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。23から36は、高台付椀である。29は須恵器（S）、26・30から32は須恵器（HS）、ほかは須恵器（NS）である。35は、底部外面に墨書「床」がみられる。12・13・15・23・26は底部、20・22・32から34は口縁部、28・29は高台、31は口縁部と底部が欠損している。35・36は底部のみである。12は、体部から底部にかけて黒

第62表　第36号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A V	H	12.6	4		6.2	B, E	普通		淡赤褐	30	掘り方中
2	坏 B I	H	12.4	3.5		6.1	B, E	普通		暗茶褐	60	
3	坏 B V	H	13	3.6		6.3	B, D, E	普通		黄橙	30	掘り方中
4	坏 A	H	12.5				B, D, E	普通		淡黄橙	20	
5	坏 A	H	13.2				B, E, H	不良		暗黄橙	30	掘り方中
6	坏 B I	H	11.5	4.2		6	B, E	普通		こげ茶	50	
7	坏 B Ⅱ	H	11.3	4.5		5	B, E, F	普通		暗橙	100	
8	坏 B V	H	11.8	3.8		5	B, E, F	普通		明橙	70	
9	坏 B V	H	11.9	3.6		5.5	B, E, F	普通		明橙	80	
10	坏 A V	H	11.7	3.3		5.8	B, E, F, H	普通		明橙	70	
11	坏 A V	H	11.9	3.4		5.9	F, H	普通		こげ茶	30	
12	坏 A	H	11.9	3.5		6.2	B, E, H	普通		こげ茶	20	
13	坏 B Ⅳ	H	11.8	3.3		5.1	B, E, H	普通		黄褐	20	

第63表　第36号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
14	坏 B Ⅲ	H	12.6	3.7		5.7	B, D, E, H	普通		橙	30	
15	椀	S	11.6	3.8		5.4	B, E, G	良好	R	灰褐	40	
16	椀	HS	12.9	4.3		5.0	B, E	普通	R	淡黄	70	貯蔵穴
17	椀	HS	12.7	4.4		6.1	B, E, G	普通	L	にぶい黄橙	20	
18	椀	NS	13.8				B, E	普通	R	黄灰	20	
19	椀	NS	12.7	4.4		5.5	B, E, I	普通	R	灰白	30	
20	椀	NS	12.8	4.0		6.4	B, I	普通	R	灰白	20	
21	椀	NS	11.8	4.2		6.0	B, G, I, K	良好	R	明灰褐	90	
22	椀	NS	11.9	3.8		5.0	B, E, G	良好	R	灰白	40	
23	椀	NS	11.6	4.3		6.0	B, C, D, I	良好	R	灰	80	
24	椀	HS	12.1	3.6		5.2	B, C, E, H	良好	R	外－淡橙。内－暗褐	70	
25	椀	NS				6.5	B, D, E, I	良好	R	灰	100	底部。貯蔵穴
26	椀	NS				5.3	B, E, I	良好	R	褐灰		掘り方中
27	椀	NS				5.0	E	普通	R	褐灰	20	
28	高台付椀	NS	13.8	5.1		6.3	B, E, I	普通	R	灰白	40	
29	高台付椀	NS	13.7	5.2		6.0	B, C, D, E, I	良好	R	灰	100	
30	高台付椀	NS	13.0	5.2		5.3	B, D, E, G	良好	R	灰褐	40	ヘラ書き「本」
31	高台付椀	HS	12.8	5.1		5.2	B, E, H, K	良好	R	外－明褐。内－黒	25	掘り方中
32	高台付椀	NS	12.9	5.0		5.9	B, E, I	普通	L	黄灰	60	
33	高台付椀	NS	12.7				B, E, G	普通	R	褐灰	30	
34	高台付椀	S	12.0				B, I	良好	R	灰	50	
35	高台付椀	HS	13.5	5.5		6.9	B, C, D, I	普通	R	灰白	90	
36	高台付椀	HS				6.9	B, E, I	良好	R	にぶい褐	20	
37	高台付椀	HS				5.6	B, E, I	普通	L	にぶい橙	40	カマド
38	高台付椀	NS				5.8	B, E, I	普通	R	灰白	30	
39	高台付椀	NS				6.4	B, E, I	普通	L	灰白	30	
40	高台付椀	NS				6.4	B, E, H	良好		灰白	100	底部。墨書「床」
41	高台付椀	NS				6.1	B, E	普通	R	橙	10	
42	高台付椀	K	14.1	4.9		6.6	B, D	良好		淡灰	20	
43	高台付椀	K				7.3	D	良好		淡灰	20	
44	高台付椀	K				7.5	B, D	良好		淡灰褐	30	
45	高台付椀	K				8.2	B, D	良好		淡灰褐	20	
46	高台付椀	K				6.6	B, D	良好		淡灰	20	掘り方中
47	高台付椀	K				5.9	B	良好		淡灰	20	掘り方中
48	高台付椀	M	11.8				B, D	良好		淡緑	5	
49	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
50	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
51	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
52	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
53	高台付椀	M					B	良好		淡緑	5	
54	甕 A Ⅲ b	H	18.8				B, E, K	普通		明橙	60	カマド
55	甕 B Ⅲ a	H	20.6				B, D, E, K	普通		橙	30	カマド
56	甕 A Ⅲ b	H	18.9				B, E, H	普通		暗黄橙	30	貯蔵穴
57	甕 A Ⅲ c	H	19.2				E, H, I	良好		明赤褐	20	掘り方中
58	甕 A Ⅲ c	H	20.2				D, E, H	良好		明褐	20	
59	甕 B	H	19.5				B, D, E	良好		淡橙	20	
60	甕 B	H	18.0				B, C, D, E, H	良好		明赤褐	20	
61	須恵甕口縁	S					B, H	良好		外－青灰褐。内－灰	5	掘り方中
62	須恵甕口縁	NS					B, C, E, G	良好		明褐	10	貯蔵穴
63	把手	S					B	良好		青灰褐		
64	長頸壷	K	11.4				D	良好		淡灰	10	掘り方中

第64表　第36号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
65	黄　橙	100	5.4	1.9	0.4	18.3	B 1	Ⅱ a	47	
66	にぶい黄橙	100	5.2	1.9	0.4	14.0	C 1	Ⅰ b	129	
67	にぶい黄橙	80		1.8	0.5	11.8	C 1	Ⅰ b	130	
68	にぶい橙	40			0.5	7.6	C 1	Ⅶ	131	
69	浅黄橙	70		1.8	0.5	9.7	C 1	Ⅰ c	132	
70	灰　白	100	4.2	1.0	0.3	2.5	C 2	Ⅰ b	389	
71	褐　灰	100	3.5	1.8	0.4	3.8	C 2	Ⅰ a	390	

色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

37から45は、灰釉陶器である。44・45は、高台付皿椀であり、ほかは高台付椀である。37は、金泥が内面に付着している。第112号住居跡の覆土中の破片と接合した。42・43は、転用硯である。37・38は底部、39から45は口縁部が欠損している。

46から51は、緑釉陶器の高台付椀である。46は、底部が欠損している。47から51は、体部破片である。

52から59は、土師器の甕である。60は、須恵器（ＨＳ）の羽釜である。61は、須恵器（Ｓ）の甕である。62は、須恵器（ＮＳ）の甕である。63は、把手である。64は、灰釉陶器の長頸壺である。52・53は胴部下位以下、54・55は胴部中位以下、56・57・60は胴部上位以下が欠損している。58・59・61・62・64は、口縁部のみである。

65から71は、土錘である。72・73は、凝灰岩の切石である。74から88は、鉄製品である。74は刀子、75は釘、76・77は用途不明の鉄製品、78・79・80は棒状鉄製品、81・82・83・84・87・88は板状及び延板状鉄製品、85は鋏の破片、86は麻皮剥ぎの破片と思われる。89は銅製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第36号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

第37号住居跡（第96図・第97図）

Ｅ・Ｆ－６・７グリッドで確認した。周辺は、住居跡や土壙が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺4.15ｍ・短辺4.30ｍ・深さ0.17ｍであった。

主軸方位は、Ｎ－35°－Ｗであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。燃焼部内からは、構築材に使用した川原石が、まとまって出土した。燃焼部の掘り込みはみられなかった。

遺構の切り合い関係は、第36号住居跡、第118・135・142・186・187号土壙よりも古かった。

遺物は、住居跡の東側から土師器坏（２・３・４・５・９・11・15・23・27）が出土し、また西壁の中央付近から土師器坏（24・26・28・31）がまとまって出土した。

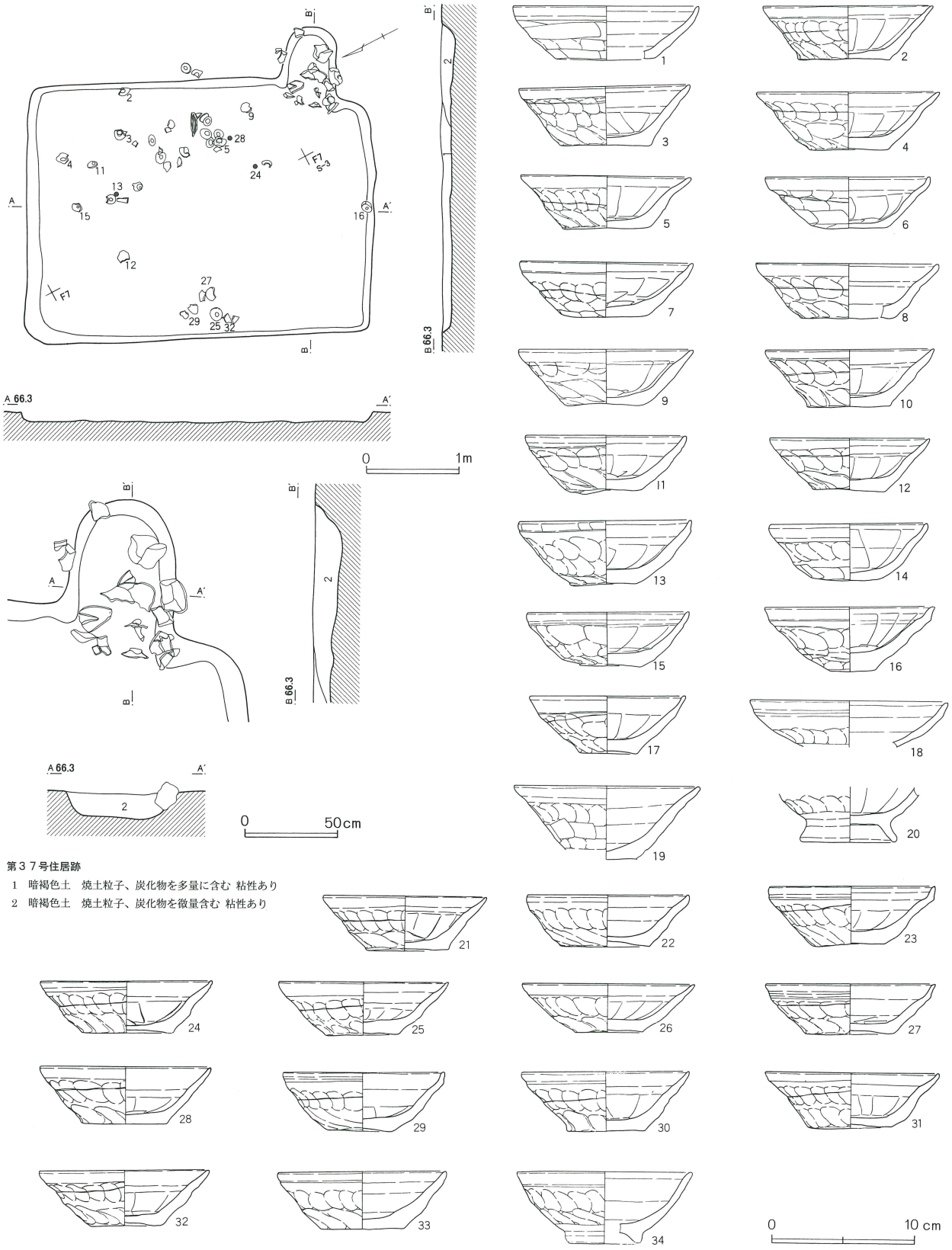
１から33は、土師器である。１から17、21から33は、坏Ｂである。そのうち６は坏ＢⅠ、７・14は坏ＢⅡである。そのほかは、坏ＢⅤである。また21から33は、地鎮に伴う一括埋納の可能性もある。18・20は、高台付の坏Ａ、19は、高脚高台付の坏Ｂであろう。１・８は底部、18は底部と高台、19は高台、20は口縁部が欠損している。

34から36は、椀である。36は須恵器（ＨＳ）、ほか

第65表　第37号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
51	浅黄橙	80		1.7	0.5	11.8	C 1	Ⅱ b	133	
52	浅　黄	70	5.0	1.9	0.4	12.0	C 1	Ⅴ a	134	
53	灰　黄	100	4.7	1.8	0.4	13.1	C 1	Ⅰ a	135	
54	浅黄橙	100	4.0	1.7	0.4	11.0	C 1	Ⅰ b	136	

第96図　第37号住居跡出土遺物（1）

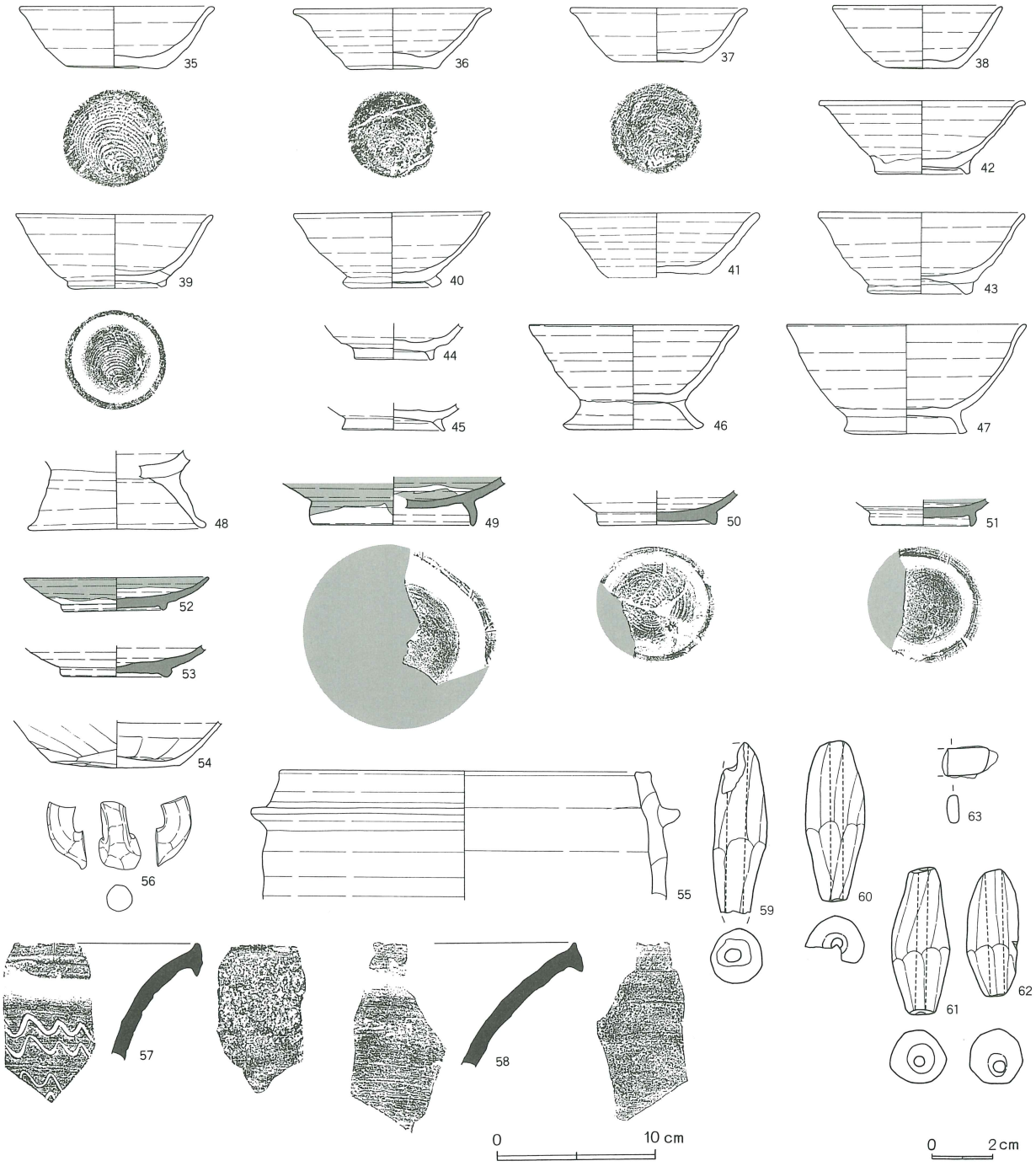


第３７号住居跡

1　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を多量に含む 粘性あり

2　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を微量含む 粘性あり

第97図　第37号住居跡出土遺物（２）



は須恵器（ＮＳ）である。37から43は、高台付椀である。39は須恵器（ＮＳ）、ほかは須恵器（ＨＳ）である。44は、須恵器（ＨＳ）の高脚高台付椀である。45・46は、灰釉陶器の高台付椀である。39は高台、42・43・46は口縁部、44・45は口縁部と底部が欠損している。

47は、土師器の壷である。48は、土師器の把手である。49・50は、須恵器（Ｓ）の大甕の口縁部である。47は、底部のみである。

51から54は、土錘である。55は、鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第37号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

第66表　第37号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏A	H	12.9	3.7		7.0	B, E	良好		暗赤褐	20	
2	坏B V	H	11.6	3.8		6.2	B, E, H	良好		淡橙	90	
3	坏B V	H	11.8	4.2		6.3	B, E, H	良好		淡橙	70	
4	坏B V	H	12.6	4.0		5.5	B, D, E	普通		橙	80	
5	坏B V	H	11.7	3.7		5.9	B, E, H	良好		暗赤橙	100	
6	坏B I	H	11.3	3.6		5.1	B, E			淡黄褐		
7	坏B II	H	11.9	3.8		5.8	B, E, F	良好		茶	70	
8	坏B V	H	12.6	3.8		5.8	B, D, E	普通		黄橙	40	
9	坏B V	H	12.0	3.9		5.2	B, E, H	普通		淡黄褐	90	
10	坏B V	H	11.6	4.0		5.7	B, E, H	不良		淡橙	30	
11	坏B V	H	11.0	4.1		4.2	B, E, H	普通		淡黄橙	100	
12	坏B V	H	11.0	3.7		5.0	B, E, H	普通		淡橙	90	
13	坏B V	H	11.8	4.5		4.6	B, E, H	普通		淡黄橙	90	
14	坏B II	H	10.8	3.9		4.8	B, E, H	普通		暗黄褐	20	
15	坏B V	H	11.2	3.8		4.2	B, E, F	良好		淡橙	70	
16	坏B V	H	11.8	4.5		3.1	B, E	普通		淡橙	90	
17	坏B V	H	10.8	4.0		4.0	B, E, F	普通		淡橙	40	
18	高台付坏A	H	13.7				B, E	普通		茶褐	20	
19	高脚高台付坏B	H	12.8				B, C, E	不良		橙	30	
20	高台付坏B	H				6.5	B, E, H	普通		暗橙	40	
21	坏B V	H	11.2	3.8		5.7	B, E, H	普通		淡橙	60	
22	坏B V	H	11.1	3.6		6.1	B, E,	普通		淡橙	70	
23	坏B V	H	11.4	4.0		4.9	B, E	普通		淡橙	40	
24	坏B V	H	11.9	3.6		5.3	B, C, E	普通		淡橙	60	
25	坏B V	H	11.7	3.7		5.0	B, E	普通		淡橙	40	
26	坏B V	H	11.9	3.3		4.6	B, C, E	普通		淡橙	50	
27	坏B V	H	11.8	3.5		6.2	B, E	普通		淡橙	60	
28	坏B V	H	11.8	3.9		6.1	B, E, H	普通		淡橙	70	
29	坏B V	H	11.2	4.1		4.3	B, E	普通		淡橙	50	
30	坏B V	H	11.3	4.2		5.4	B, E	普通		淡橙	60	
31	坏B V	H	11.9	3.8		5.9	B, E, H	普通		淡橙	50	
32	坏B V	H	11.8	3.8		4.9	B, E	普通		淡橙	40	
33	坏B V	H	11.4	4.1		4.8	B, E	普通		淡橙	30	
34	高台付坏A	H	12.0	5.0		4.8	C, D, E	普通		淡黄橙	20	
35	椀	N S	11.9	3.9		6.3	B, I	普通	L	灰白	80	
36	椀	N S	12.3	3.8		5.3	B, C, H	良好	R	灰白色	60	
37	椀	H S	11.1	3.4		5.4	B, E, I	普通	R	灰白	70	
38	椀	N S	10.5	4.0		4.5	B, E	良好		灰	75	
39	高台付椀	H S	12.3	4.7		5.8	B, E, I	良好	R	にぶい橙	100	
40	高台付椀	H S	12.4	4.7		5.3	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	60	
41	高台付椀	N S	12.4				A, B, C, E	良好	R	灰	80	
42	高台付椀	H S	12.7	4.6		5.6	B, E, I	良好	R	灰黄褐	50	
43	高台付椀	H S	12.9	5.1		5.7	B, E, I	普通	R	にぶい橙	80	
44	高台付椀	H S				4.8	B, E, I	普通	L	灰黄	20	
45	高脚高台付椀	H S				10.9	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	20	
46	高脚高台付椀	H S	13.3	6.6		8.1	B, E, I	普通		灰黄	50	
47	高台付大椀	H S	14.9	6.8		7	B, E, I	普通		外－灰白。内－にぶい褐	60	
48	高台付椀	H S				6.3	B, E, I	普通	L	にぶい黄橙	20	
49	高台付椀	K				9.9	B	良好		灰	20	
50	高台付椀	K				7.3	D	不良		淡黄灰	20	
51	高台付椀	K				6.2	B, D	良好		灰	20	

第67表　第37号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
52	高台付皿	K	11.5	2.2		6.2	B, D	良　好		淡　灰	60	
53	高台付椀	K				6.5	B, D	良　好		淡灰色	20	
54	壷	H				8.0	A, B, E	普　通		暗褐色	20	
55	羽ⅡBb	HS	23.1		2.7		B, C, D, E	良　好		暗褐色	25	
56	把　手	H					B	良　好		浅黄橙	5	
57	大　甕	S					B	良　好		灰	5	
58	大　甕	S					B, I	良　好		灰	5	

第38号住居跡（第98図・第99図）

F－5・6グリッドで確認した。周辺は、住居や土壙が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、やや不整な長方形である。規模は、長辺4.27m・短辺3.71m・深さ0.39mであった。北壁のやや東寄りに、径0.95m・深さ0.2mの不整円形の土壙を検出した。

主軸方位は、N－98°－Eであった。

カマドは、東壁やや南寄りに検出した。袖は、地山を掘り残して構築し、住居跡内へと長く伸びていた。焚き口部から燃焼部かけては、不整円形の浅い掘り込みがみられた。この掘り込みは、燃焼部の奥に向かって、深くなっていた。燃焼部から煙道部へは、急激に立ち上がり、段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第63号土壙より古かった。

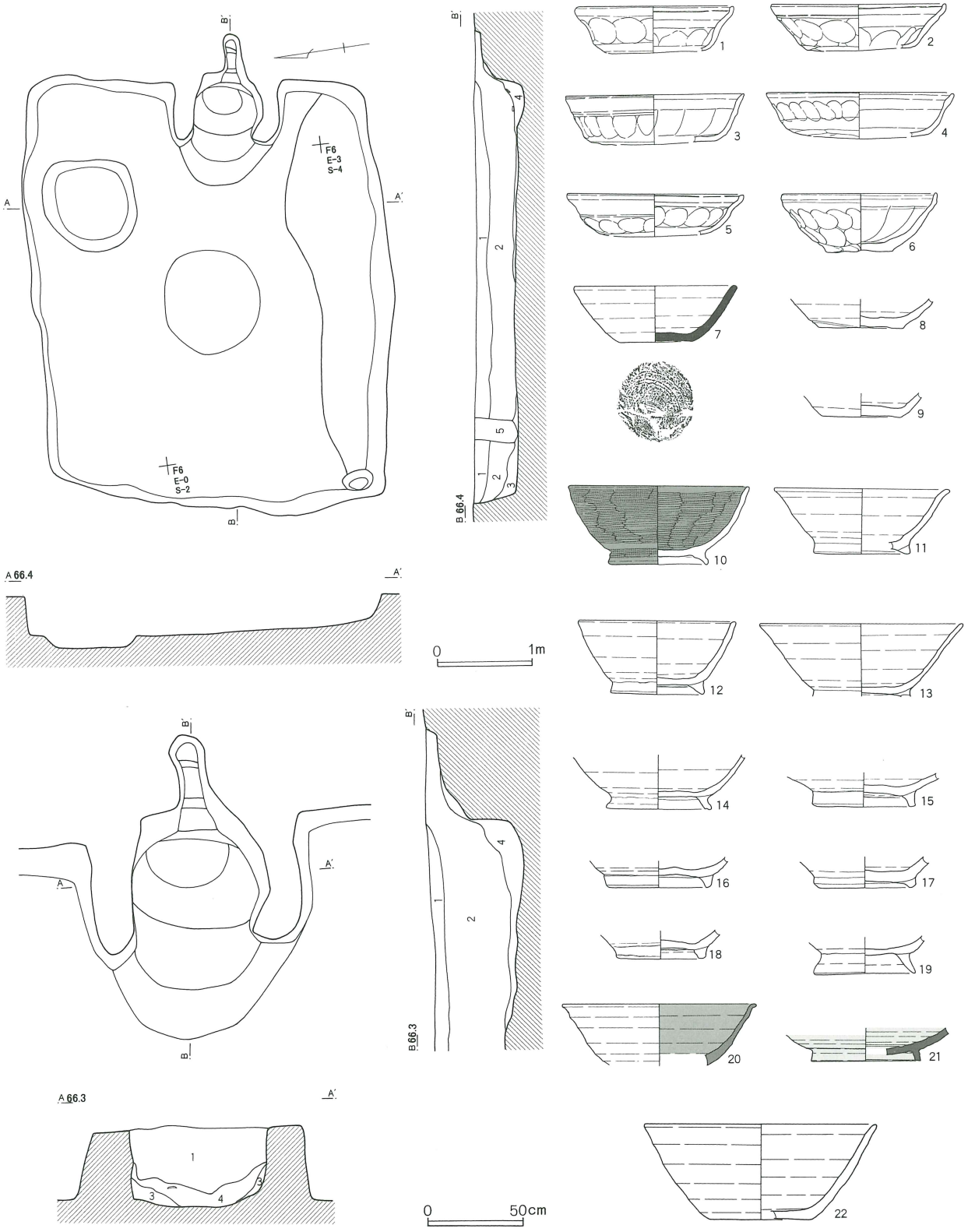
1から5は、土師器の坏Aである。6は、土師器の坏BⅤである。1から5は底部が欠損している。

7から9は、椀である。7は須恵器（S）、8は須

第68表　第38号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　A	H	10.6	3.2		6.7	B, E, H	不　良		暗黄褐	20	
2	坏　A	H	11.8	3.2		7.0	B, E	良　好		淡　橙	30	
3	坏　A	H	12.1	3.4		7.4	B, E	普　通		黄　褐	20	
4	坏　A	H	12.7			9.1	B, E	普　通		暗赤褐	40	
5	坏　A	H	11.9	2.8		7.0	B, D, E	普　通		黄　褐	10	
6	坏　BⅤ	H	10.4	4.9		4.4	B, E, F, H	良　好		淡　橙	40	
7	椀	S	11.0	3.8		5.0	B, E, I	良　好	R	灰　白	80	
8	椀	NS				5.8	B, I	良　好	R	灰　白	20	
9	椀	HS				5.4	E, I	普　通	R	にぶい黄橙	20	
10	高台付椀	黒色	12.3	5.3		6.5	B, G, I	良　好		オリーブ黒	40	
11	高台付椀	NS	13.8				B, E, I	普　通	R	褐　灰	40	
12	高台付椀	NS	11.8	4.4		6.3	B, E	良　好	R	褐　灰	20	
13	高台付椀	HS	10.5	5.0		6.1	B, E, I	普　通	R	にぶい黄橙	60	
14	高台付椀	NS				7.0	B, E, I	普　通	R	灰　白	30	
15	高台付椀	NS				6.5	B, E, I	良　好	R	灰　白	20	
16	高台付椀	HS				6.7	B, E, I	普　通	L	にぶい橙	10	
17	高台付椀	HS				6.1	E, G, I	良　好	R	灰　白	20	
18	高台付椀	NS				5.7	B, E	良　好	R	灰　白	20	
19	高台付椀	NS				6.8	B, E, I	良　好	R	にぶい橙	20	
20	高台付椀	K	13.0				B	良　好		淡　灰	10	
21	高台付椀	M				7.1	A	良　好		淡　緑	10	
22	椀	NS	15.7	6.5		7.0	B, E, I	普　通	R	灰黄褐	20	
23	鉢	H	19.9				B, E, K	良　好		淡　橙	20	
24	甕BⅢa	H	20.4				B, E	良　好		オレンジ	10	口縁部のみ
25	甕	S				14.0	B	良　好		灰	5	底部のみ

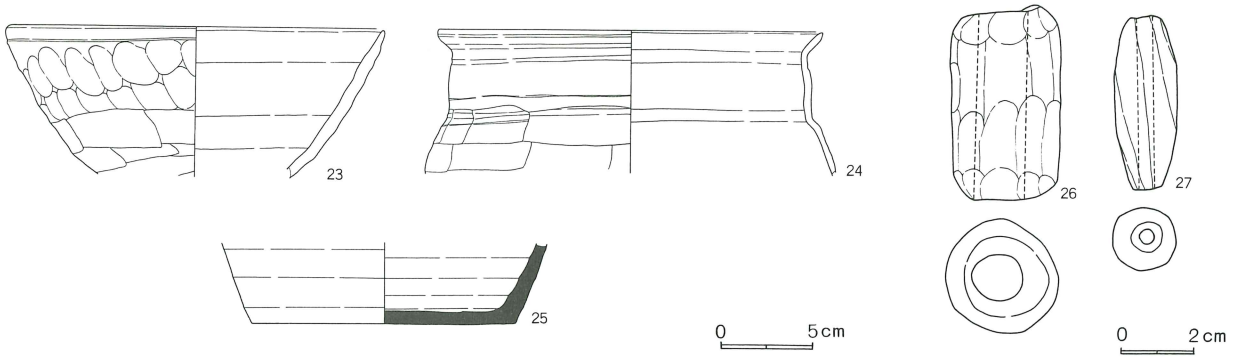
第98図　第38号住居跡・出土遺物（１）



第３８号住居跡

1　淡褐色土　焼土、炭化物を微量含む 粘性あり
2　褐色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
3　黒色土　焼土を微量含み、炭化物を多量に含む 粘性あり（炭化物層）
4　赤褐色土　土器片含む（天井部崩落土）
5　暗黒色土　Ｂ軽石含む（ピット覆土）

第99図　第38号住居跡出土遺物（２）



恵器（ＮＳ）、９は須恵器（ＨＳ）である。10は、黒色土器の高台付椀である。11から19は、高台付椀である。13・16・17は須恵器（ＨＳ）、ほかは須恵器（ＮＳ）である。22は、大形の須恵器（ＮＳ）の椀である。８・９・14から19は口縁部、11・22は底部、10は高台が欠損している。13は、内外面に黒色処理が施されている。

20は、灰釉陶器の高台付椀である。21は、緑釉陶器の高台付椀である。20は底部と高台、22は口縁部と底部が欠損している。

23は、土師器の鉢である。24は、土師器の甕である。23は底部、24は胴部上位以下が欠損している。

25は、須恵器（Ｓ）の甕の底部である。

26・27は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第38号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第39号住居跡（第100図）

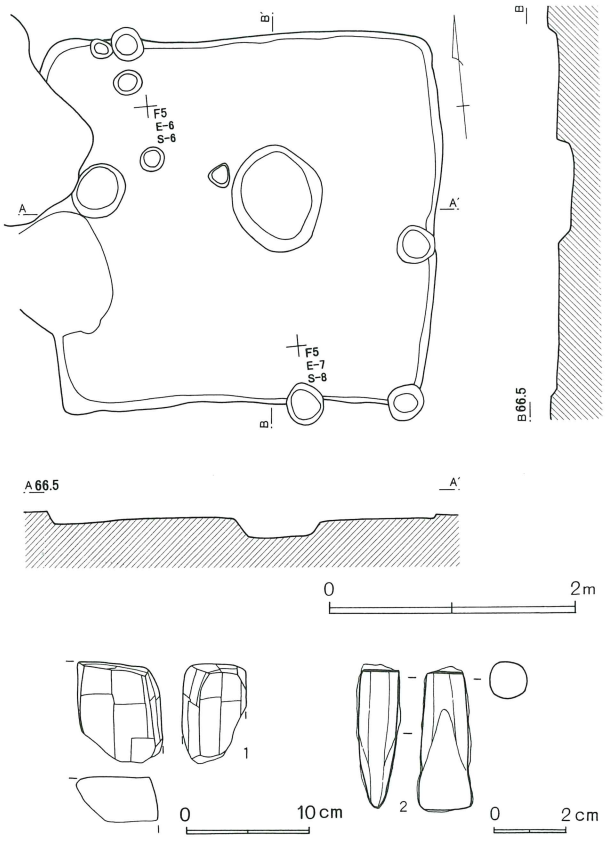
Ｆ－５グリッドで確認した。周辺は、小穴や土壙が多く、確認に手間取った。

住居跡の形状は、方形であった。規模は、長辺3.08ｍ・短辺2.93ｍ・深さ0.08ｍであった。住居跡のほぼ中央に径0.8ｍ・深さ0.2ｍの不整円形の土壙を検出した。また、北西隅で４基、南東隅で３基の小穴を検出した。

主軸方位は、Ｎ－６°－Ｅであった。

カマドは、検出されなかった。

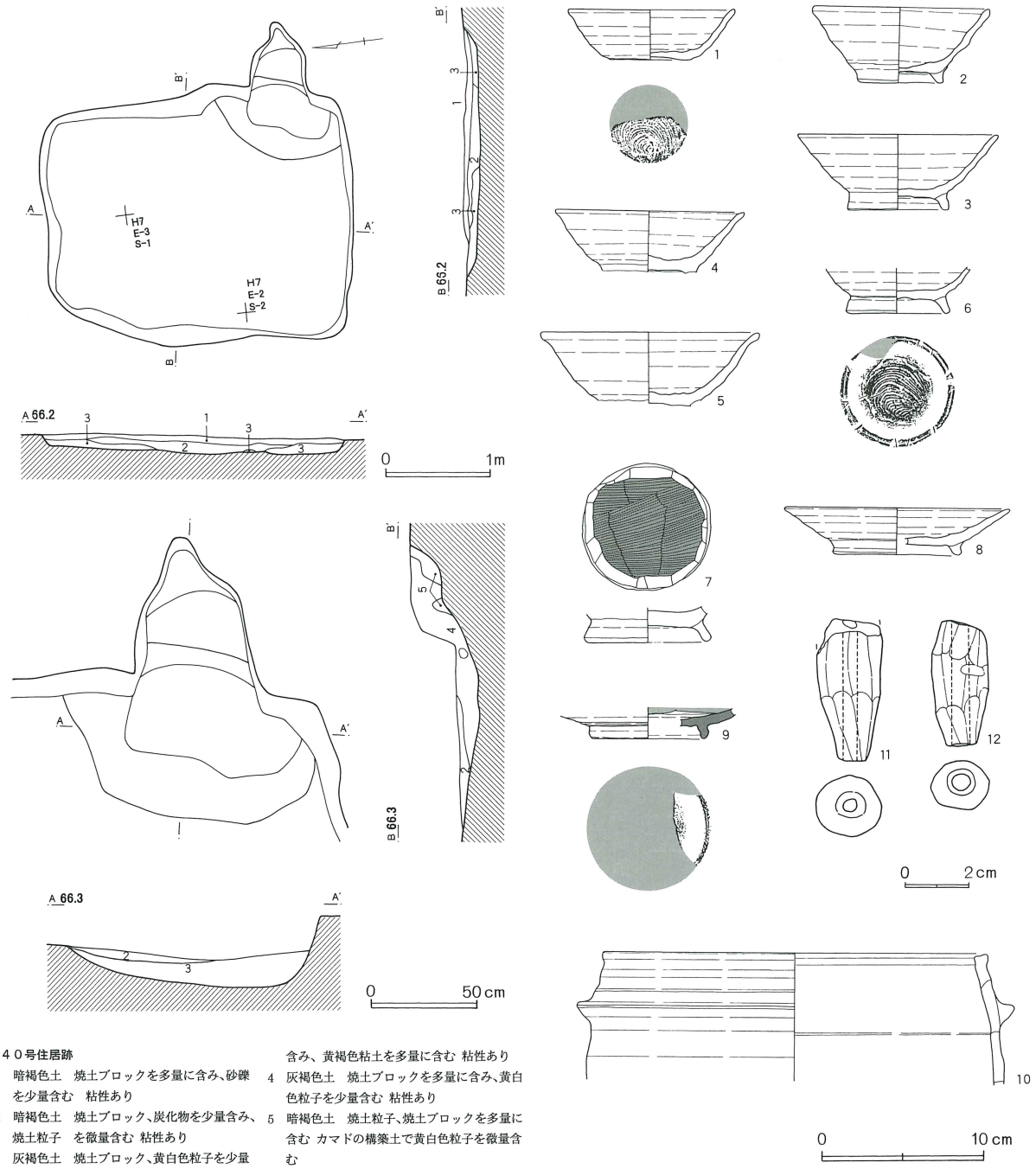
第100図　第39号住居跡・出土遺物



第69表　第38号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
26	にぶい橙	100	5.2	3.0	1.3	51.8	Ａ１	Ｉａ	5	
27	にぶい黄橙	100	4.6	1.7	0.4	12.2	Ｃ１	Ｉａ	137	

第101図　第40号住居跡・出土遺物



第４０号住居跡
1　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含み、砂礫を少量含む　粘性あり
2　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物を少量含み、焼土粒子　を微量含む 粘性あり
3　灰褐色土　焼土ブロック、黄白色粒子を少量含み、黄褐色粘土を多量に含む 粘性あり
4　灰褐色土　焼土ブロックを多量に含み、黄白色粒子を少量含む 粘性あり
5　暗褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む カマドの構築土で黄白色粒子を微量含む

遺構の切り合い関係は、第66・69土壙より古く、第19・22土壙より新しかった。

1は、凝灰岩の切石である。2は、鉄製品の楔である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第39号竪穴式住居跡の時期を決定することは不可能であった。

第40号住居跡（第101図）

H－7グリッドで確認した。周辺は、溝や小穴・土壙などの遺構が密集していた。

住居跡の形状は、やや不整な長方形であった。規模は、長辺2.86ｍ・短辺2.39ｍ・深さ0.15ｍであった。

主軸方位は、N－98°－Eであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。袖は、検出

第70表　第40号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	椀	HS	10.1	3.1		4.9	B, E	良　好		浅黄橙	40	
2	高台付椀	HS	10.8	4.6		4.9	B, C, E	普　通		灰	90	
3	高台付椀	NS	12.1	4.6		6.0	B, E, I	普　通		灰	25	
4	高台付椀	NS	11.5				B, E	良　好		灰白	60	
5	高台付椀	HS	13.2				B, E	良　好		灰黄	30	
6	高台付椀	HS				5.9	B, E	良　好		灰黄褐	30	
7	高台付椀	黒色				7.2	B, E	良　好		橙	100	
8	高台付皿	HS	13.6	2.9		7.5	B, E	良　好		黄灰	50	
9	高台付皿	K				6.8	B, D	良　好		暗灰	10	
10	羽BⅡb	HS	23.2		3.2		B, E	良　好		橙	10	

第71表　第40号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
8	褐灰	50		2.0	0.4	13.2	B1	Ⅱa	48	
9	褐灰	60		1.8	0.6	9.8	B1	Ⅱa	49	

できなかった。燃焼部は、不整形な掘り込みがみられ、奥に向かって緩やかに傾斜していた。燃焼部から煙道部へは、緩い段をもって移行していた。

遺構の切り合い関係は、第41号住居跡よりも新しかった。

1から4は、高台付椀である。2は、須恵器（NS）である。他は、須恵器（HS）である。3は高台、4は口縁部が欠損している。

5は、黒色土器の高台付椀である。6は、灰釉陶器の高台付皿である。5は、底部のみである。6は、口縁部と底部が欠損している。

7は、須恵器（HS）の羽釜である。7は、胴部上位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第40号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第41号住居跡（第102図）

H－6・7グリッドで確認した。周辺は、溝・掘立柱建物跡などの遺構が密集し、確認に手間取った。覆土上層の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状はは長方形で、規模は長辺4.20m・短辺3.15m・深さ0.29mであった。幅30cmの壁溝を、西壁の一部で検出した。そのほか北東隅で径1mの円形の土壙を検出し、北西隅付近で小穴1基を検出した。

主軸方位は、N－95°－Eであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。左袖は、地山を掘り残して造られ、右袖は、住居跡の壁をそのまま利用していた。「片袖型」である。燃焼部は、不整円形に浅く窪み、段をもって煙道部に移行していた。

遺構の切り合い関係は、第40号住居跡より古く、第161号土壙より新しかった。

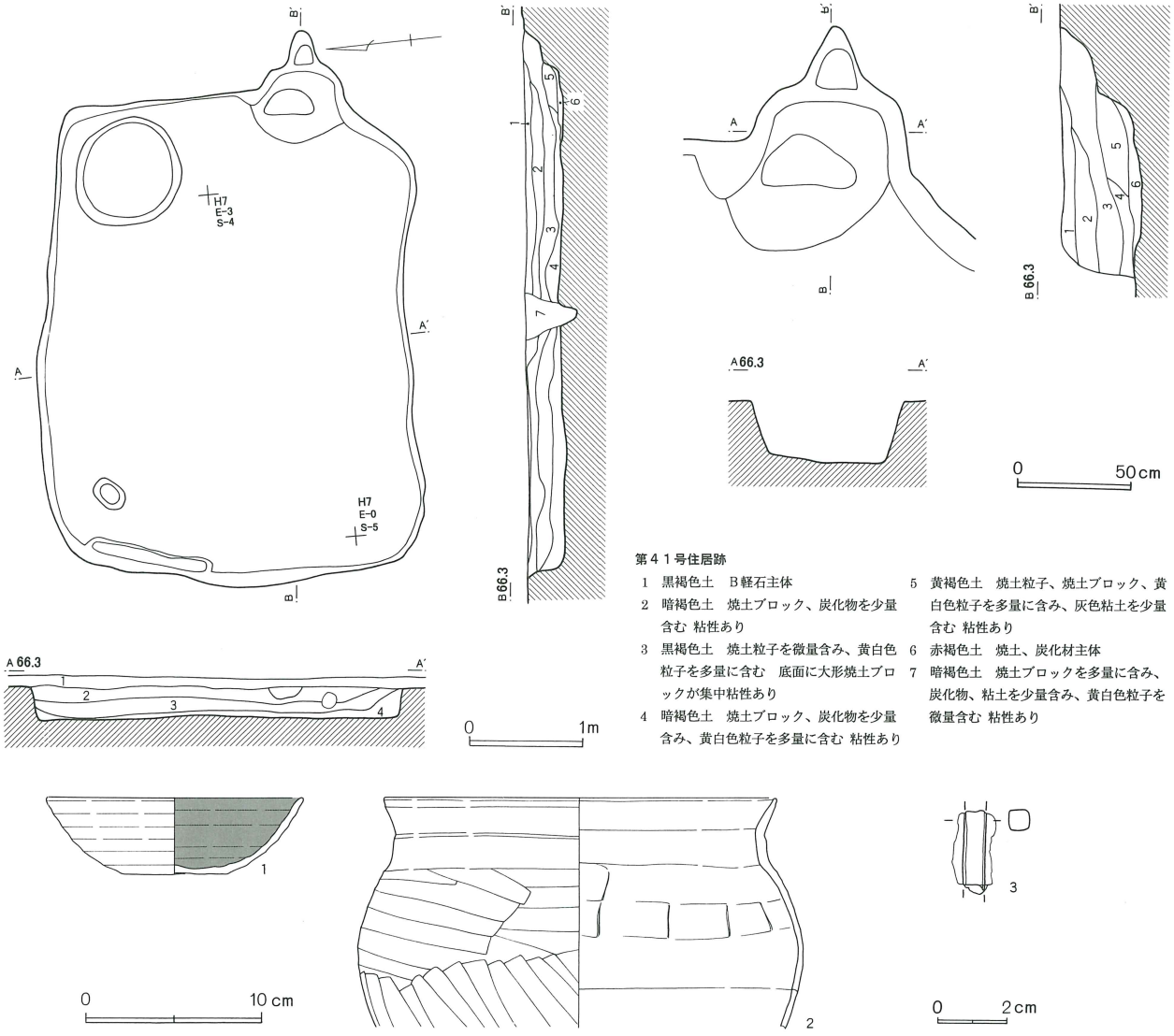
1は、須恵器（HS）の椀である。2は、須恵器（NS）の高台付椀である。3は、須恵器（HS）の高台付皿である。4は、黒色土器の椀である。2は高台、3は底部が欠損している。

5は、土師器の甕である。5は胴部中位以下が欠損している。

6は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第41号竪穴式住居跡を中堀Ⅴ期に位置付けたい。

第102図　第41号住居跡・出土遺物



第４１号住居跡
1　黒褐色土　B軽石主体
2　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物を少量含む 粘性あり
3　黒褐色土　焼土粒子を微量含み、黄白色粒子を多量に含む　底面に大形焼土ブロックが集中粘性あり
4　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物を少量含み、黄白色粒子を多量に含む 粘性あり
5　黄褐色土　焼土粒子、焼土ブロック、黄白色粒子を多量に含み、灰色粘土を少量含む 粘性あり
6　赤褐色土　焼土、炭化材主体
7　暗褐色土　焼土ブロックを多量に含み、炭化物、粘土を少量含み、黄白色粒子を微量含む 粘性あり

第 72 表　第 41 号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	椀	黒色	14.5	4.3		6	B, C, E	良　好		内－灰。 外－橙	70	
2	甕 B Ⅱ a	H	21.8				B, C, E, H	良　好		橙	15	

第42号住居跡（第103図・第104図）

Ｈ・Ｉ－６グリッドで確認した。周辺は、溝・土壙・小穴などが密集し、確認に手間取ったが、覆土上層の火山灰をもとに確認した。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺3.75ｍ・短辺2.97ｍ・深さ0.19ｍであった。カマド左脇に半円形の張り出し部を検出した。

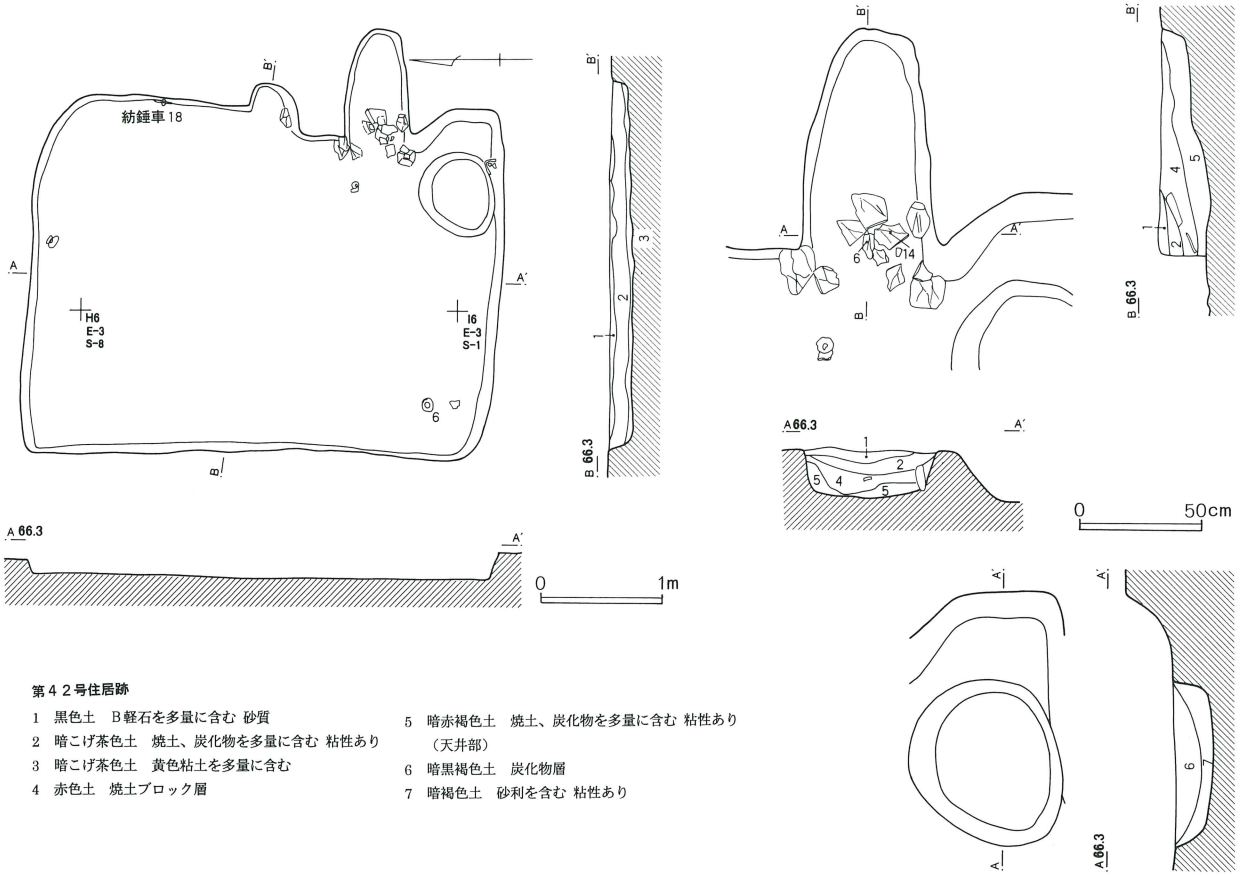
主軸方位は、Ｎ－90°－Ｅであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。焚き口部の両脇から、補強材の川原石が出土した。袖は造らなかったと考えられる。燃焼部はやや細長く、底面の掘り込みはみられなかった。カマドの構築材である拳大の川原石が、燃焼部内から出土した。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。形状は、円形で径0.59ｍ・深さ0.18ｍであった。

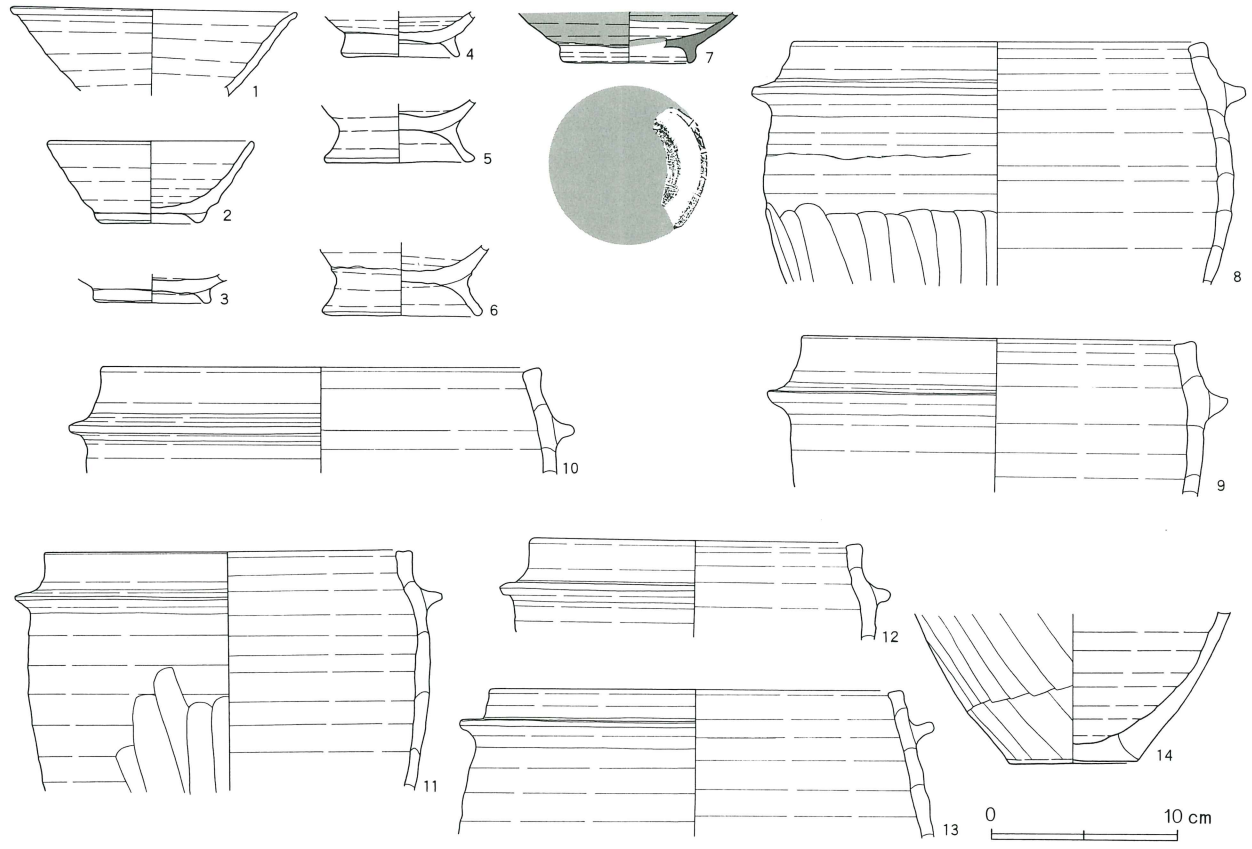
遺構の切り合い関係は、第164・166・167・168・169

第103図　第42号住居跡・出土遺物（1）

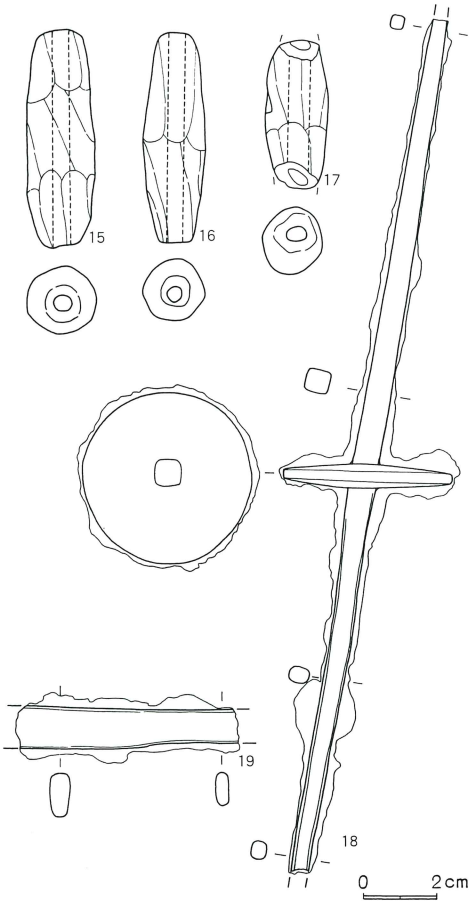


第４２号住居跡

1　黒色土　B軽石を多量に含む 砂質
2　暗こげ茶色土　焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり
3　暗こげ茶色土　黄色粘土を多量に含む
4　赤色土　焼土ブロック層
5　暗赤褐色土　焼土、炭化物を多量に含む 粘性あり（天井部）
6　暗黒褐色土　炭化物層
7　暗褐色土　砂利を含む 粘性あり



第104図　第42号住居跡・出土遺物（２）



号土壙より古く、第177号土壙より新しかった。

カマド内から高脚高台付き椀（６）・羽釜の底部（14）が出土した。また、東壁のやや北寄りの壁際から鉄製の紡錘車（18）が出土した。

１から４は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。５・６は、須恵器（ＨＳ）の高脚高台付椀である。７は、灰釉陶器の高台付椀である。１は底部と高台、３から６は口縁部、７は口縁部と底部が欠損している。

８から14は、羽釜である。10・13は、須恵器（ＮＳ）、他は須恵器（ＨＳ）である。８・11・13は胴部中位以下、９・10・12は胴部上位以下、14は胴部中位以上が欠損している。

15から17は、土錘である。

18・19は、鉄製品である。18は紡錘車、19は延板状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第42号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

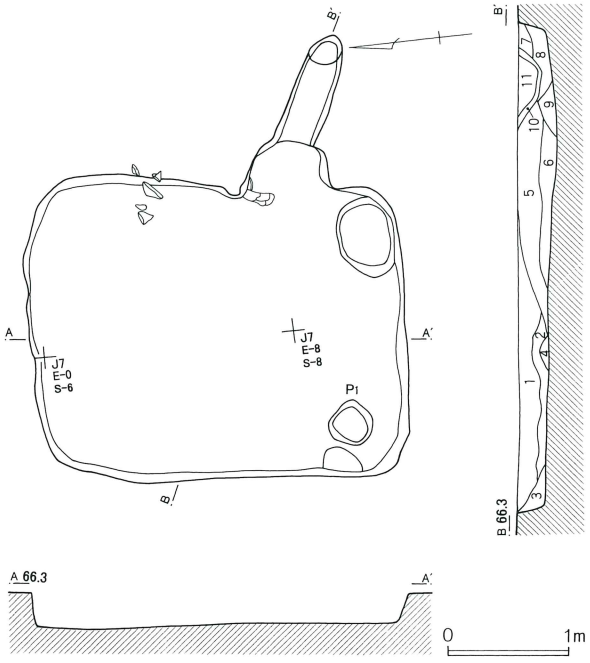
第73表　第42号住居跡出土遺物観察表

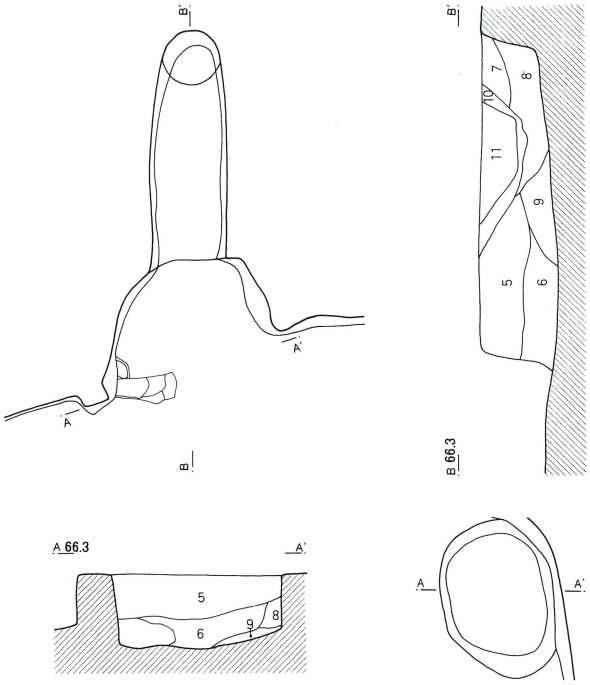
番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	ＨＳ	15.1				B, E, H, K	普　通	R	外－淡黄褐。内－明褐	50	
2	高台付椀	ＨＳ	10.7	4.3		5.1	B, E, H, K	良　好	R	灰　白	60	
3	高台付椀	ＨＳ				5.7	B, C, E	良　好	R	淡　橙	100	底部のみ
4	高台付椀	ＨＳ				5.8	B, C, I	良　好	R	明赤褐	70	
5	高脚高台付椀	ＨＳ				7.8		良　好	R	淡　橙	100	底部
6	高脚高台付椀	ＨＳ				8.1	B, E, G	普　通	R	にぶい黄橙	20	
7	高台付椀	K				6.4	B, D	良　好		暗　灰	20	
8	羽ＢⅡａ	ＨＳ	21.7		2.8		A, B, E, H	良　好		明　褐	50	
9	羽ＡⅡｂロ	ＨＳ	20.7		3.0		B, C, E	良　好		淡　橙	15	
10	羽ＡⅡａ	ＮＳ	23.1		3.3		B, C, E	良　好		黒	10	
11	羽ＡＩｂロ	ＨＳ	19.3		2.4		B, C, E, H	良　好		淡　橙	15	
12	羽ＡⅡｂロ	ＨＳ	17.2		2.6		B, C, E, G, H	良　好		淡　橙	20	
13	羽ＢⅡａ	ＮＳ	21.7		2.0		B, E, H	良　好		灰　白	15	
14	羽底部	ＨＳ				6.7	B, D, E, H	良　好		外－淡橙。内－淡黄褐	50	

第74表　第42号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
15	にぶい橙	100	5.8	1.9	0.5	19.5	Ｂ１	Ｉａ	50	
16	にぶい黄橙	100	5.6	1.7	0.4	15.1	Ｂ１	Ｉａ	51	
17	灰黄褐	70		1.8	0.5	11.0	Ｂ１	Ｉａ	52	

第105図　第43号住居跡





第号４３住居跡

1　暗褐色土　焼土粒子を微量含み、白色粒子を多量に含む
2　黒褐色土　炭化粒子、白色粒子を微量含む
3　黒褐色土　焼土粒子、白色粒子を微量含む
4　暗褐色土　焼土粒子を少量含む
5　黒褐色土　焼土粒子を微量含み、炭化粒子を少量含む
6　暗灰褐色土　焼土、炭化物を含む 粘性あり
7　黒褐色土　焼土粒子を微量含む
8　黒褐色土　焼土粒子、炭化粒子を微量含む
10　赤褐色土　焼土を多量に含む（天井部）
11　褐色土　焼土粒子、白色粒子を少量含む

第43号住居跡（第105図・第106図）

Ｊ－６・７グリッドで確認した。周辺は、区画溝・掘立柱建物跡などがあった。遺構は、比較的疎らで、確認は容易であった。

住居跡の形状は方形で、規模は長辺3.00ｍ・短辺2.30ｍ・深さ0.23ｍであった。南西隅に小穴１基を検出した。

主軸方位は、Ｎ－97°－Ｅであった。

カマドは、東壁南東隅寄りに検出した。左袖は、非常に短く地山を掘り残すが、袖を造らないと考えられる。焚き口部の左側から補強材の川原石が出土した。燃焼部は、掘り込みがみられず、煙道部へは、ほとんど段差なく移行する。煙道部は、やや南東方向に長く伸び、煙り出し部で立ち上がっていた。

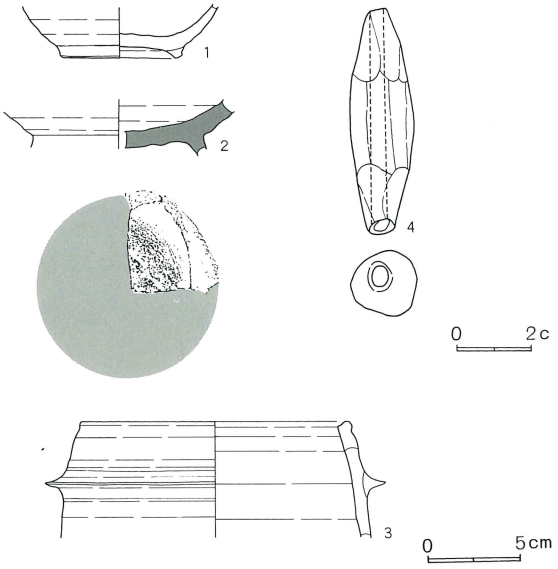
遺構の切り合い関係は、第２号掘立柱建物跡より新しかった。

１は、須恵器（ＮＳ）の高台付椀である。２は、灰釉陶器の長頸壷である。３は、須恵器（ＨＳ）の羽釜である。１は口縁部、２は口縁部・底部・高台、３は胴部上位以下が欠損している。

４は、土錘である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第43号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第106図　第43号住居跡出土遺物



第75表　第43号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	NS				6.0	A, B, E, H	良　好	R	黒	50	
2	長頸壺	K					D	良　好		暗黄灰	10	破片
3	羽ⅠBa	HS	14.1		3.2		B, E, H	良　好		明　褐	15	P1

第76表　第43号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
4	にぶい橙	100	6.0	1.8	0.5	14.4	C1	Ib	138	

第44号住居跡（第107図・第108図）

K－3・4、L－4グリッドで確認した。周辺の遺構は疎らであった。

住居跡の形状は長方形で、規模は長辺5.80m・短辺2.97m・深さ0.13mであった。長径方向に非常に細長い住居跡であった。

主軸方位は、N－10°－Eであった。

カマドは、東壁の南東隅寄りに検出した。袖は検出していない。燃焼部内の左右の壁の4ヶ所に、補強材として川原石が使用されていた。燃焼部は、不整円形の浅い掘り込みがみられ、煙道部に向かって緩らかに立ち上がっていた。

貯蔵穴は、カマド右脇の南東隅で検出した。形状は、不整円形で、長径0.51m・短径0.48m・深さ0.15mであった。

遺構の切り合い関係は、第2号区画溝より古かった。

羽釜（8）は、カマド内と貯蔵穴内の破片が接合した。またカマド内から土師器の高脚高台付坏（2）・羽釜（9）が出土した。また貯蔵穴の脇からは、羽釜（7）が出土した。

1は、土師器の坏AVである。2は、土師器の坏Bに高脚高台の付いた坏である。3から6は、高台付椀である。5が須恵器（NS）の他は、須恵器（HS）である。3・5は底部と高台、6は口縁部と底部が欠損している。

7から10は、羽釜である。10が須恵器（NS）の他は、須恵器（HS）である。11は、須恵器（NS）の甑である。7・8は底部、9は胴部中位以下、10・11は胴部上位以下が欠損している。

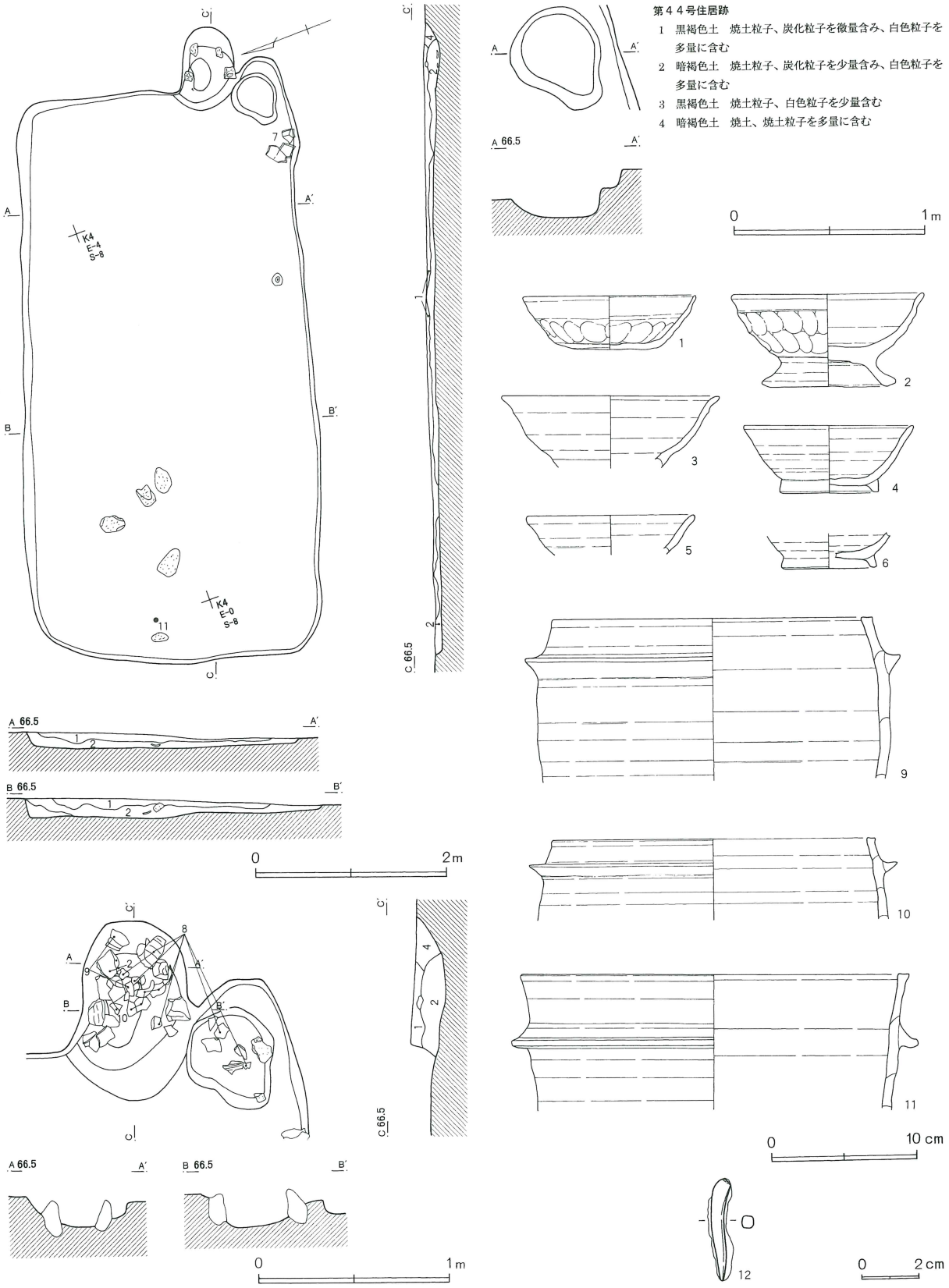
12は、釘と考えられる鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第44号竪穴式住居跡を中堀Ⅶ期に位置付けたい。

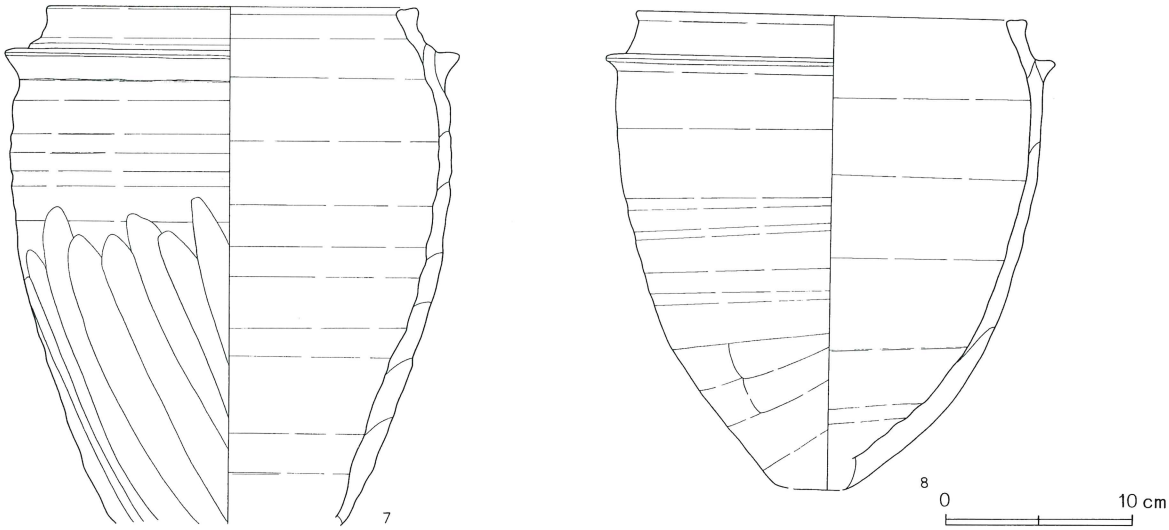
第77表　第44号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏AV	H	11.7	3.6		5.6	B, D, E	良　好		淡　橙	20	
2	高脚高台付坏B	H	13.0	6.3		8.0	E, F, K	不　良		黄　橙	70	カマド
3	高台付椀	HS	14.8				B, E, I	普　通	L	外－にぶい赤橙。内－褐灰	30	貯蔵穴
4	高台付椀	HS	11.5	4.6		6.5	B, E, I	普　通	R	明　褐	40	床面
5	高台付椀	NS	11.4				B, E, I	良　好	R	灰　黄	30	
6	高台付椀	HS				6.3	C, E, I	良　好	R	灰　白	40	
7	羽AⅠaイ	HS	19.6		2.5		B, E, G, I	良　好		暗　褐	40	
8	羽AⅠaイ	HS	20.5	25.1	2.3	3.2	A, B, D, G			明赤褐	50	
9	羽ⅠAa	HS	22.0		2.7		A,B,D,E,G,I	良　好		明　褐	20	カマド
10	羽AⅡbロ	NS	22.0		1.7		A, B, C, D, I	良　好		灰　褐	15	
11	甑BⅡ	NS	26.5		4.6		A, B, E, I	良　好		灰　褐	15	

第107図　第44号住居跡・出土遺物（1）



第108図　第44号住居跡出土遺物（２）



第45号住居跡（第109図・第110図）

Ｋ・Ｌ－５グリッドで確認した。周辺は、遺構が疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は長辺4.15ｍ・短辺2.80ｍ・深さ0.28ｍであった。

主軸方位は、Ｎ－107°－Ｅであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに３基検出した。１号カマドは、覆土の堆積状況から、住居跡の埋没以前に埋められていたと判断した。左袖は、検出できず、燃焼部の掘り込みもみられなかった。燃焼部から煙道部に向かっては、緩やかに傾斜していた。

第２号カマドは、両袖の先端部から補強材の川原石が出土し、造り付けの袖が住居跡内に伸びていたと推定した。焚き口部の前面には、径0.21ｍ・深さ0.12ｍの掘り込みを検出した。燃焼部から煙道部へは、段をもって移行していた。燃焼部内から、天井部の補強材である大形の川原石が出土した。

第３号カマドは、左袖は第２号カマドと共有し、右袖は地山を掘り残して短く造られていた。焚き口部と燃焼部の境には、小さな段がみられた。燃焼部は、ほぼ水平で、段をもって煙道部に移行していた。第２・３号カマドは住居跡の埋没まで併用していたと考えられる。

遺構の切り合い関係は、第２号区画溝より古かった。

遺物は、１号カマド内から土師器の甕（14）、灰釉陶器高台付椀（12）、鉄製品（19・20）が出土した。２号カマドからは、土師器の甕（15）と須恵器の高台付皿（３）が、３号カマドからは、土師器の甕（16）と須恵器の高台付椀（11）が出土した。

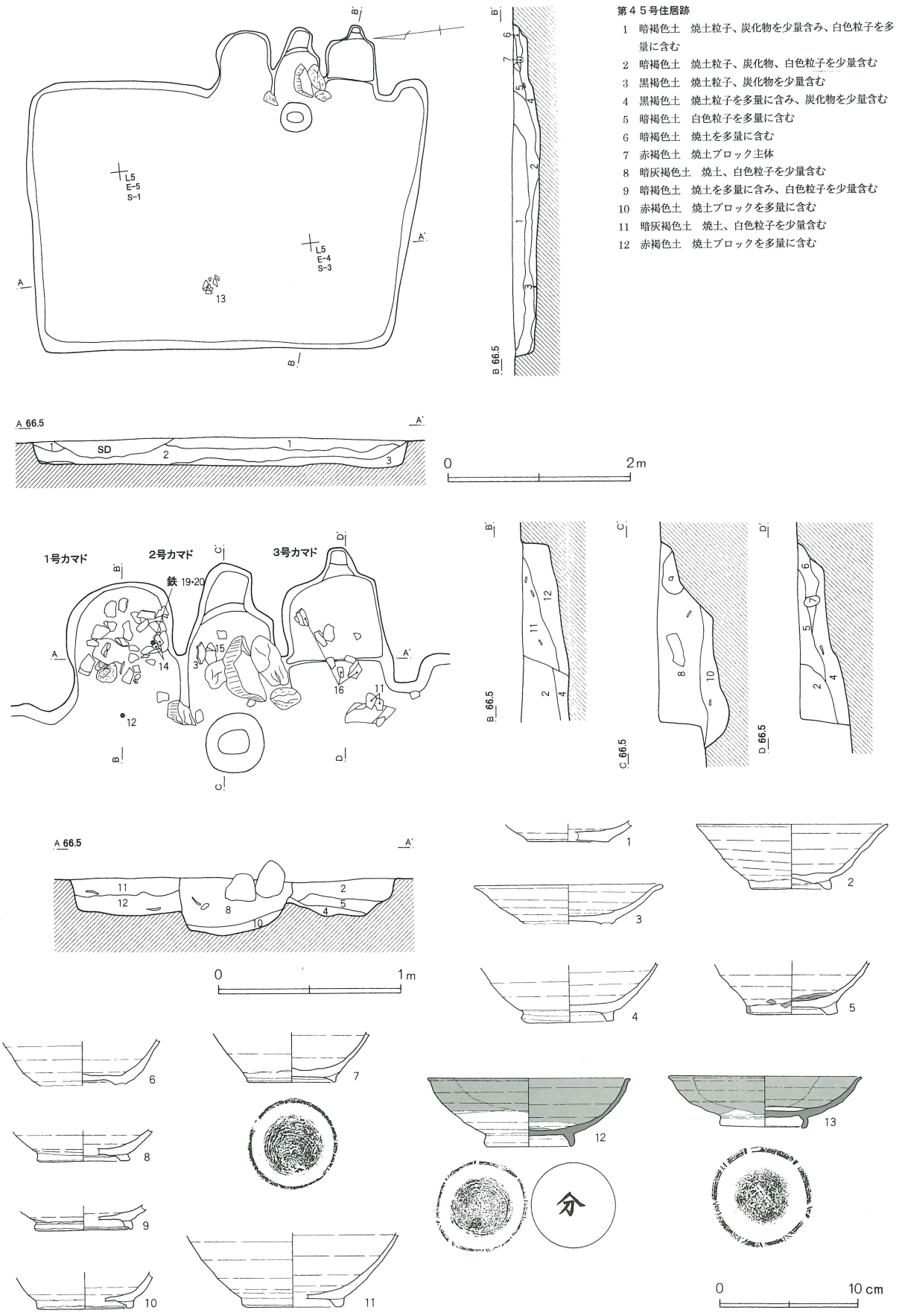
１は、須恵器（ＮＳ）の椀である。２から11は、高台付椀である。６・７は、須恵器（ＨＳ）であり、ほかは須恵器（ＮＳ）である。12・13は、灰釉陶器の高台付椀である。12の底部外面には、墨書「分」がみられる。１・８から11は口縁部と底部、３は高台、４・５・７は口縁部、６は口縁部と高台が欠損している。５は、底部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

14から16は、土師器の甕である。17は、須恵器（Ｓ）の口縁部である。18は、灰釉陶器の長頸壺である。鉄製品（不明）14は底部、15は胴部下位以下、16は胴部中位以下が欠損している。18は、頸部のみである。

19から21は、鉄製品である。19はコの字状の不明鉄製品、20は板状鉄製品、21は棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第45号竪穴式住居跡を中堀Ⅵ期に位置付けたい。

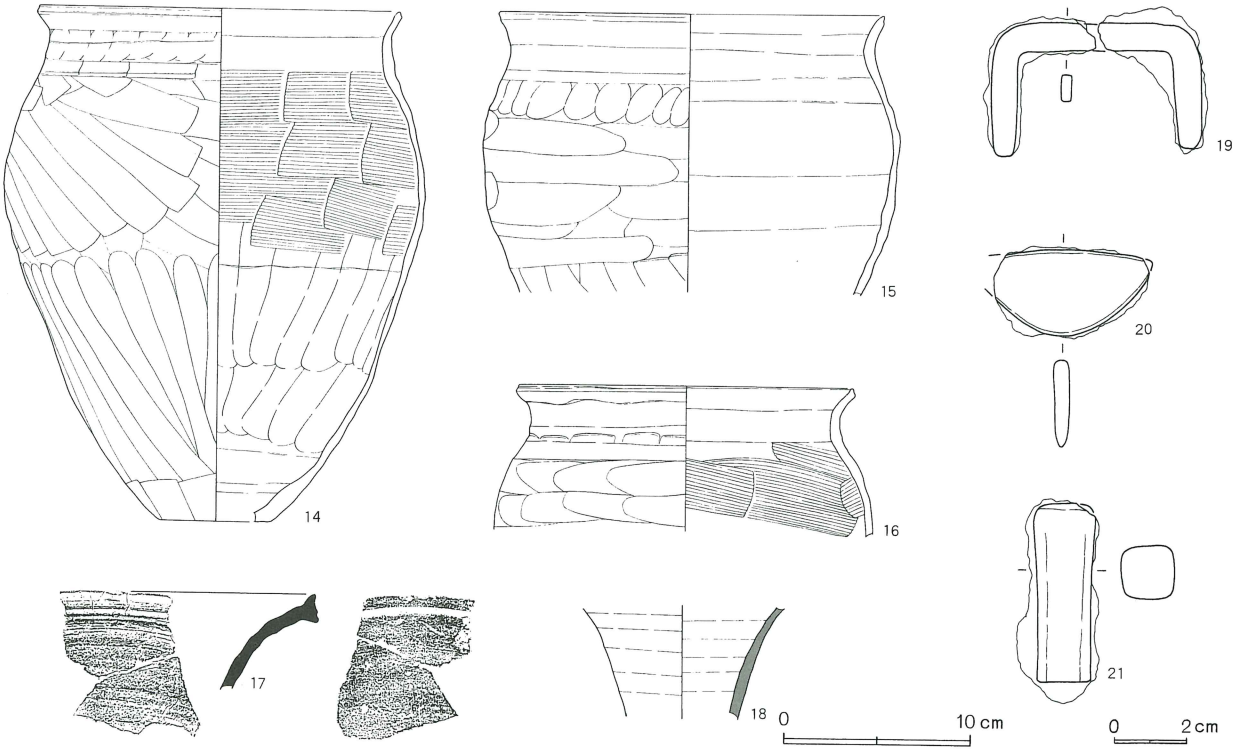
第109図　第45号住居跡・出土遺物（１）



第４５号住居跡

1　暗褐色土　焼土粒子、炭化物を少量含み、白色粒子を多量に含む
2　暗褐色土　焼土粒子、炭化物、白色粒子を少量含む
3　黒褐色土　焼土粒子、炭化物を少量含む
4　黒褐色土　焼土粒子を多量に含み、炭化物を少量含む
5　暗褐色土　白色粒子を多量に含む
6　暗褐色土　焼土を多量に含む
7　赤褐色土　焼土ブロック主体
8　暗灰褐色土　焼土、白色粒子を少量含む
9　暗褐色土　焼土を多量に含み、白色粒子を少量含む
10　赤褐色土　焼土ブロックを多量に含む
11　暗灰褐色土　焼土、白色粒子を少量含む
12　赤褐色土　焼土ブロックを多量に含む

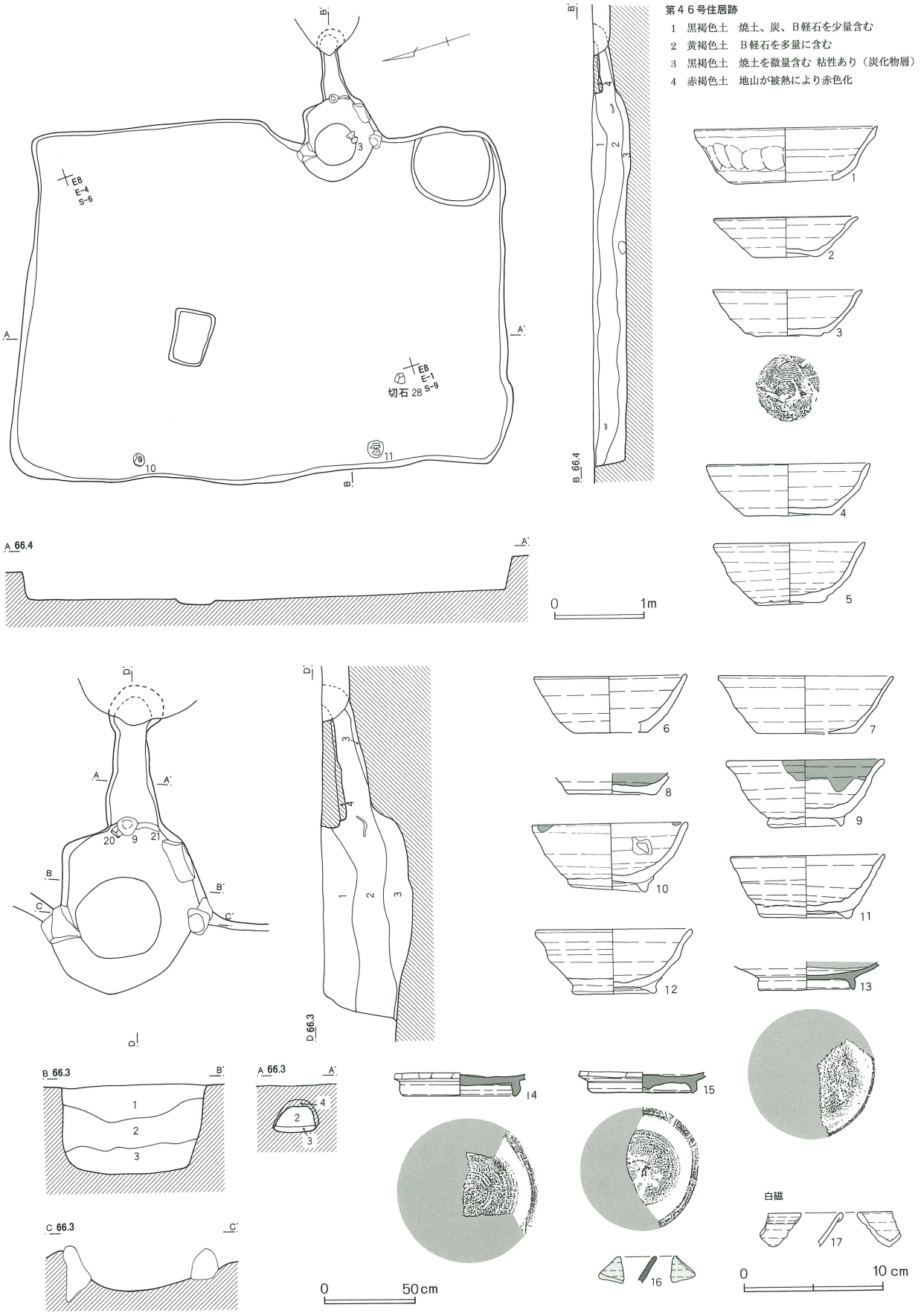
第110図　第45号住居跡出土遺物（2）



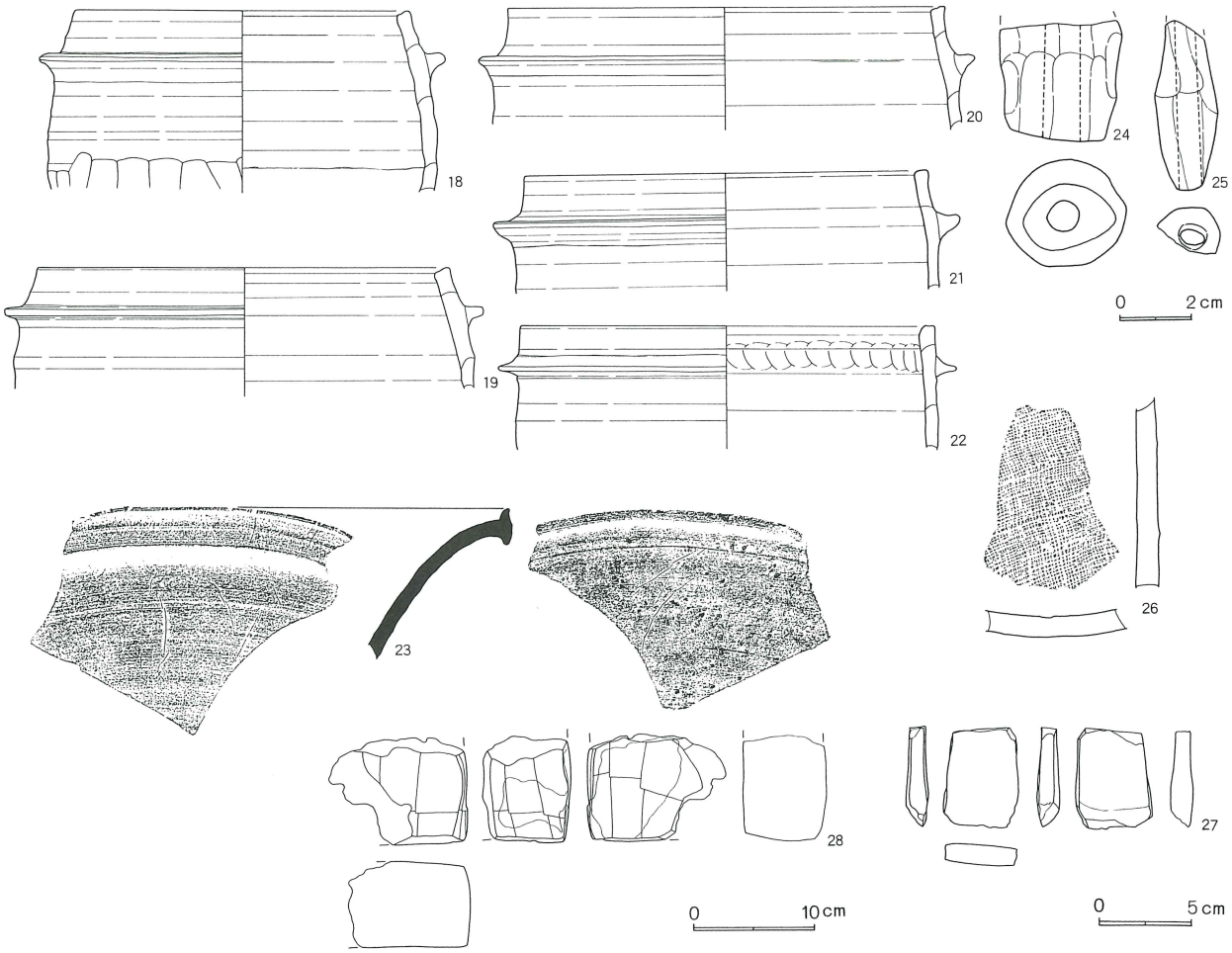
第78表　第45号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	椀	NS				5.8	B, E	良　好	L	灰　白	10	
2	高台付椀	NS	13.7	4.6		5.5	B, E, I	普　通	L	灰　白	60	
3	高台付椀	NS	13.2				B, E, I	普　通	L	灰　白	60	カマド2
4	高台付椀	NS				5.7	B, E, I	普　通	L	灰　白	30	
5	高台付椀	NS				4.9	B, E, I	普　通	R	灰　白	30	
6	高台付椀	HS					B, E, I	普　通	L	にぶい黄橙	10	
7	高台付椀	HS				6.1	B, C	普　通	R	灰　白	30	
8	高台付椀	NS				6.4	B, E, I	普　通	L	灰　白	20	カマド2
9	高台付椀	NS				6.7	B, E, I	普　通	L	灰　黄	10	カマド3
10	高台付椀	NS				6.1	B, I	良　好	L	灰　白	5	
11	高台付大椀	NS				6.5	E, I	普　通	R	浅　黄	40	カマド3
12	高台付椀	K	14.3	4.9		6.1	B	良　好		淡　灰　緑	80	北カマド前床直
13	高台付椀	K	13.7	3.6		5.8		良　好		淡　灰	80	
14	甕 B Ⅲ a	H	19.2			6.0	B, E	良　好		暗　橙	20	カマド1
15	甕 A Ⅲ c	H	20.4				B, E, F	普　通		淡　橙	30	カマド2
16	甕 B Ⅲ a	H	17.7				B, E, G	普　通		暗　茶　褐	10	カマド3
17	甕	S					B, I	良　好		灰	5	
18	長　頸　壺	K					D	良　好		灰　褐		頸部のみ

第111図　第46号住居跡・出土遺物（１）



第112図　第46号住居跡出土遺物（２）



第46号住居跡（第111図・第112図）

Ｅ－７・８、Ｆ－８グリッドで確認した。周辺は、掘立柱建物跡・土壙・小穴などの遺構が密集し、確認に手間取った。

住居の形状は長方形であった。規模は、長辺5.03ｍ・短辺3.85ｍ・深さ0.35ｍであった。住居跡の中央やや北寄りから長径0.6ｍ・短径0.45ｍ・深さ0.14ｍの土壙を検出した。

主軸方位は、Ｎ－102°－Ｅであった。

カマドは、東壁南寄りに検出した。左袖は、やや幅広く地山を掘り残して造られ、右袖は、住居跡の壁をそのまま利用していた。「片袖型」であった。左袖の先端と焚き口部の右側には、補強材としての川原石が使用されていた。焚き口部から燃焼部にかけては、円形の浅い掘り込みがみられた。燃焼部から段をもって、煙道部へと移行していた。煙道部は細長く地山を掘り抜いていた。煙り出し部は、小穴により切られていた。

貯蔵穴は、カマド右側の南東隅で検出した。形状は、円形で径0.87ｍで、深さは0.03ｍと非常に浅かった。

遺構の切り合い関係は、第201号土壙よりも古く、第４号掘立柱建物跡よりも新しかった。

遺物は、カマド内から羽釜（20・21）、須恵器の高台付椀（９）、須恵器の坏（３）が出土した。また、西壁の際から須恵器の高台付椀（10・11）が出土した。

１は、土師器の坏Ａである。２から８は、椀である。６は須恵器（ＮＳ）、８は黒色土器であり、他は、須恵器（ＨＳ）である。９から12は、高台付椀である。11・12は須恵器（ＮＳ）、他は、須恵器（ＨＳ）である。１・６・７は底部、８は口縁部が欠損している。９・10は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。９は、

油煙の痕跡と考えられる。

13は、灰釉陶器の高台付皿である。14・15は、灰釉陶器の高台付椀である。16は、緑釉陶器の椀である。17は、中国産（定州窯）の白磁の椀である。13から15は底部のみ、16・17は口縁部破片である。

18から22は、羽釜である。20は須恵器（ＨＳ）、他は、須恵器（ＮＳ）である。23は、須恵器（Ｓ）の大甕の口縁部である。18は胴部中位以下、19から22は胴部上位以下が欠損している。

24・25は、土錘である。

26は、平瓦である。

27は、砥石である。28は、凝灰岩の切石である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第46号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

第81表　第46号住居跡出土瓦観察表

番号	種類	焼成	凸面	凹面	側面
26	平瓦	酸化炎	刷り消し	布	－

第47号住居跡（第113図・第114図）

Ｅ－８グリッドで確認した。カマドのみを当初確認し、住居跡の存在を推定していたが、第４号掘立柱建物跡の遺物が遺構確認面を覆っていたため、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.78ｍ・短辺3.00ｍ・深さ0.50ｍであった。カマド前面には、長径0.65ｍ・深さ0.15ｍの浅い掘り込みを検出した。また南東隅から南壁にかけて、最大幅0.5ｍの平坦面を検出した。

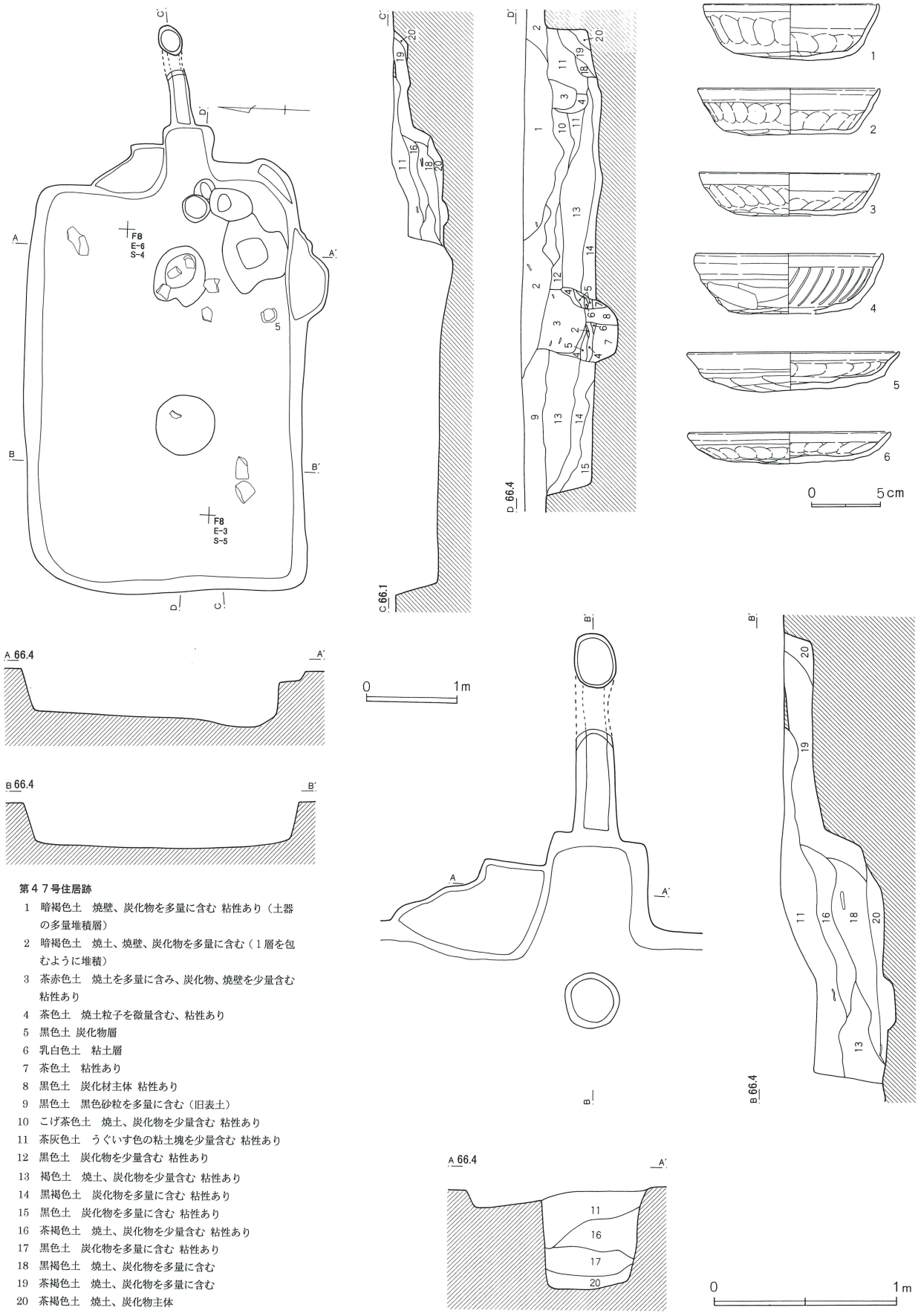
第79表　第46号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏A	H	13.0				D, E	普通		淡黄橙	30	貯蔵穴
2	椀	ＨＳ	10.2	2.8		4.3	B, E	良好	R	橙	30	
3	椀	ＨＳ	10.5	3.3		4.7	B, E	良好	L	橙	100	
4	椀	ＨＳ	11.7	3.7		6.2	B, E, G	普通	L	灰	30	
5	椀	ＨＳ	10.8	4.4		5.0	B, E, I	普通	R	にぶい黄橙	80	
6	椀	ＮＳ	10.9	4.0		5.2	B, H	良好	R	灰白	25	
7	椀	ＨＳ	12.5	4.1		7.0	B, E, I	良好	R	褐灰	20	
8	椀	黒色				6.2	E, H	良好	R	外－白。内－黒	30	
9	高台付椀	ＨＳ	11.0	4.8		4.9	B, E, I	良好	R	にぶい橙	80	
10	高台付椀	ＨＳ	11.0	4.9		5.1	B, E, H	良好	L	黒	100	穿孔
11	高台付椀	ＮＳ	11.0	4.5		5.9	B, E, I	良好	R	灰	80	
12	高台付椀	ＮＳ	11.0	4.6		5.5	B, D, E	良好	R	灰白	60	
13	高台付皿	K				6.7	F	良好		淡灰	20	貯蔵穴
14	高台付椀	K				7.9	B, D	良好		淡灰	10	
15	高台付椀	K				7.2	B, D	良好		暗灰	10	転用硯
16	緑釉椀	M					B	良好		淡緑	5	
17	白磁椀	白磁						良好		白	5	
18	羽ＢⅡａ	ＮＳ	17.9		2.6		B, E, H	良好		灰褐	20	
19	羽ＡⅡａ	ＮＳ	22.1		2.3		B, E	良好		灰褐	15	
20	羽ＡＩａロ	ＨＳ	23.4		2.7		B, C, E	良好		明褐	25	カマド
21	羽ＢⅡａ	ＮＳ	21.6		2.6		B, D, E	良好		灰	20	カマド
22	羽ＢⅡｂ	ＮＳ	22.2		2.3		B, E, H, I	良好		灰白	15	
23	大甕						B					

第80表　第46号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
24	橙	40	3.3	3.2	0.8	33.7	Ａ１	Ⅱａ	6	
25	浅黄橙	40			0.6	6.7	Ｃ１	Ⅴｂ	139	

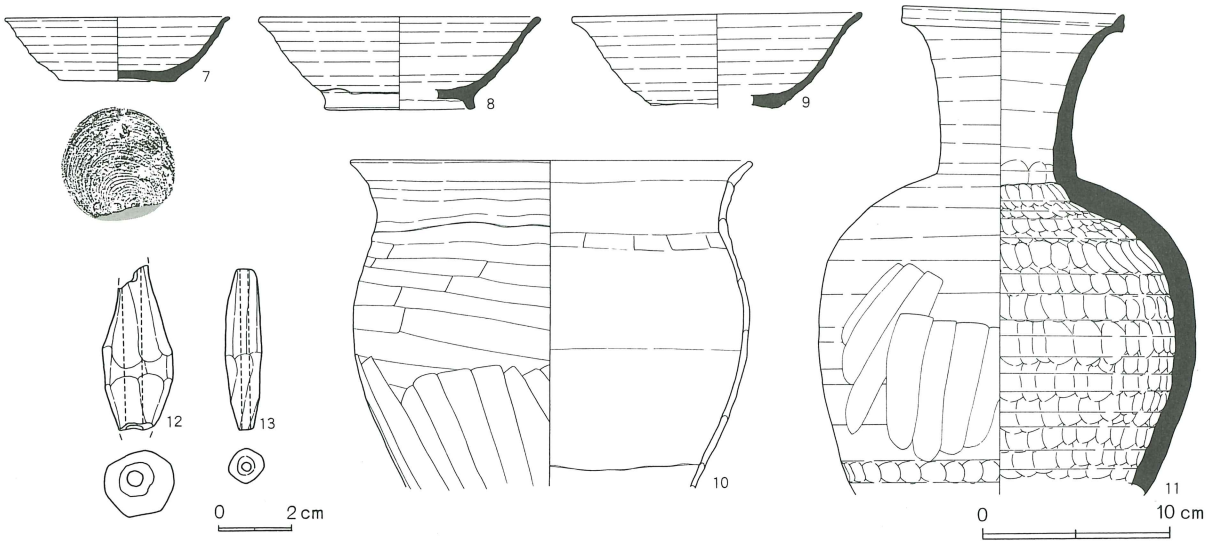
第113図　第47号住居跡・出土遺物（１）



第４７号住居跡

1　暗褐色土　焼壁、炭化物を多量に含む 粘性あり（土器の多量堆積層）
2　暗褐色土　焼土、焼壁、炭化物を多量に含む（１層を包むように堆積）
3　茶赤色土　焼土を多量に含み、炭化物、焼壁を少量含む 粘性あり
4　茶色土　焼土粒子を微量含む、粘性あり
5　黒色土 炭化物層
6　乳白色土　粘土層
7　茶色土　粘性あり
8　黒色土　炭化材主体 粘性あり
9　黒色土　黒色砂粒を多量に含む（旧表土）
10　こげ茶色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
11　茶灰色土　うぐいす色の粘土塊を少量含む 粘性あり
12　黒色土　炭化物を少量含む 粘性あり
13　褐色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
14　黒褐色土　炭化物を多量に含む 粘性あり
15　黒色土　炭化物を多量に含む 粘性あり
16　茶褐色土　焼土、炭化物を少量含む 粘性あり
17　黒色土　炭化物を多量に含む 粘性あり
18　黒褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
19　茶褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
20　茶褐色土　焼土、炭化物主体

第114図　第47号住居跡出土遺物（２）



主軸方位は、N－82°－Eであった。

カマドは、東壁のほぼ中央で検出した。袖・補強材ともに検出できなかった。カマドの左壁は、段をもち、幅約0.8ｍにわたって平坦面が造られていた。焚き口部の前面には、径0.29ｍ・深さ0.12ｍの円形の浅い掘り込みを検出した。燃焼部の形状は長方形で、底面の掘り込みはみられなかった。煙道部へ向かって緩やかな傾斜がみられ、細長い煙道部へは、段をもって移行していた。煙道部は、1.5ｍのところで急に立ち上がり煙り出し部となっていたため、地山を掘り抜いたと考えられる。

不整形の掘り込みを、カマドの右側、南東隅付近で検出した。貯蔵穴であろう。長径0.75ｍで、深さ0.15ｍと浅かった。

遺構の切り合い関係は、第４号掘立柱建物跡、第198号土壙より古かった。

１から６は、土師器である。１は、坏AⅣである。２・３は、坏Aである。４は、暗文土器である。５・６は、皿である。４は、底部が欠損している。

７は、須恵器（S）の椀である。８・９は、須恵器（S）の高台付椀である。８は底部、９は底部と高台が欠損している。

10は、土師器の甕である。11は、須恵器（S）の長頸壺である。12・13は、土錘である。10・11は、胴部下位以下が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第47号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第48号住居跡（第115図・第116図・第117図・第118図）

F・G－８・９グリッドで確認した。周辺は、小穴などの遺構がやや密集していた。覆土上面の火山灰をもとに、比較的容易に確認できた。

住居跡の形状は方形であった。規模は、長辺5.30ｍ・短辺4.48ｍ・深さ0.46ｍであった。

主軸方位は、N－101°－Eであった。

北壁に幅0.4ｍ、南壁の一部に幅0.55ｍの階段状の平坦面を検出した。また床面に４基の土壙を検出した。１号土壙は、長径2.09ｍ・短径1.3ｍ・深さ0.15ｍで形状は、不整楕円形であった。２号土壙は、楕円形で長径1.47ｍ・短径1.13ｍ・深さ0.14ｍであった。３号土壙は、長径2.03ｍ・短径1.55ｍ・深さ0.15ｍの不整形な形状で、上面に炭化物層を検出した。４号土壙は、円形で径1.0ｍ・深さ0.36ｍであった。

カマドは、東壁のやや南寄りに検出した。左袖は、地山を掘り残したままで、短く住居跡内に伸びていた。右袖は、住居跡の壁をそのまま利用していた。「片袖型」のため、カマドを境に壁の形状が大きく崩れてい

第82表　第47号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　A　Ⅳ	H	12.4	4.1		8.2	B, D, E	普　通		淡　黄　白	70	
2	坏　　A	H	12.8	3.3		7.3	B, D, E	不　良		暗　　栗	80	
3	坏　　A	H	12.8	3.1		7.0	B, D, E	良　好		淡　黄　橙	60	
4	坏（暗文）	H	13.2	4.3		8.5	B, D, E, H	普　通		暗　　橙	50	カマド
5	皿	H	15.0	2.9		12.8	B, D, E	普　通		暗　黄　橙	90	
6	皿	H	14.2	2.3		9.0	B, D, E, H	良　好		淡　黄　橙	60	
7	椀	S	11.7	3.4		6.1	B	良　好		灰	50	
8	高台付椀	S	14.5	4.9		7.6	B, G	良　好		黄　　灰	25	
9	高台付椀	S	15.1				B	良　好		灰	30	
10	甕　B　Ⅲ　c	H	21.0				B, E	良　好		橙	40	カマド
11	長　頸　壺	S	11.6				B, G	良　好		青　　灰	70	カマド

第83表　第47号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
12	にぶい黄橙	75		1.9	0.4	11.9	C 1	Ⅱ b	140	
13	にぶい橙	100	4.3	1.0	0.2	3.5	C 2	Ⅰ a	392	

た。左袖の先端、それに対応する焚き口部の右側は、補強材として川原石を使用していた。焚き口部の前面には、径0.47m・深さ0.38mの円形の掘り込みがあった。焼土ブロックや焼土が多量にみられた。燃焼部は、奥に向かってやや低くなり、段をもって幅の広い煙道部へ移行していた。カマドの周辺からは、構築材の川原石がまとまって出土した。

貯蔵穴は、カマドの右側の南東隅で検出した。形状は、隅丸方形で径0.79m・深さ0.21mであった。

遺構の切り合い関係は、古墳時代前期の第1号溝より新しく、第239号土壙より古かった。

遺物は、カマド内から土師器の坏（3・5）・須恵器の坏（21）・須恵器の高台付椀（33・39）・須恵器の高脚高台付椀（48）が出土し、貯蔵穴から須恵器の坏（23・26）・須恵器の高台付椀（41）・羽釜（69）が出土した。そのほか住居跡の北東部から須恵器の坏（15・22）・須恵器の高台付椀（31・36）・灰釉陶器の椀（58）・羽釜（68）が出土し、南壁の西寄りの壁際から、須恵器の坏（17）・須恵器の高台付椀（32・45）・凝灰岩の切石（90）が出土した。

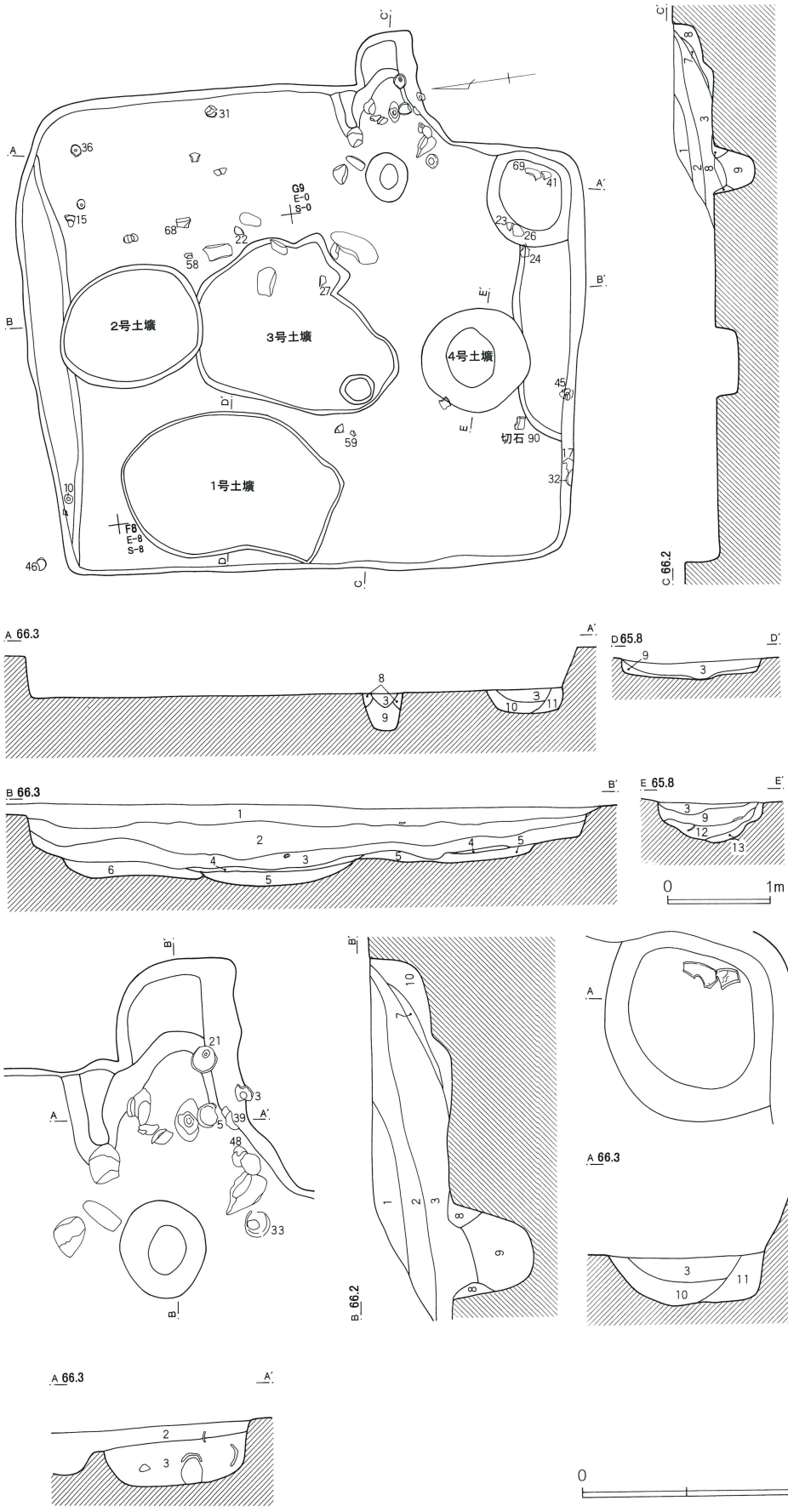
1から14は、土師器である。1から11は、坏Bである。12から14は、高台付坏Bである。12は高台、13・14は底部と高台が欠損している。10は、口縁部に黒色の付着物が確認できる。煤の痕跡と考えられる。

15から31は、椀である。15・18・23・24・28・30・31は、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）である。32から46までは、高台付椀である。34・36・37・42・43・44・46は、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）である。47から49は、高脚高台付椀である。47は、須恵器（NS）である。ほかは、須恵器（HS）である。25・29・40・42・44は底部、33は高台、48・49は口縁部が欠損している。25は口縁部に、29・31は内面口縁部に、45は内面体部に黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

50は、黒色土器の高台付椀である。51から55は、灰釉陶器の高台付椀である。56から60は、緑釉陶器の高台付椀である。50・51は底部、52・53・55・57・58は口縁部と底部、54は口縁部、56は底部と高台が欠損している。59・60は、体部破片である。

61は、土師器の小形の甕である。62から66は、土師器の甕である。67から69は、須恵器（HS）の羽釜である。70は、須恵器（HS）の甑である。71・72須恵器（HS）の甕である。73は、須恵器（NS）の甕である。74は、広口長頸壺である。62は胴部下位以下、

第115図　第48号住居跡

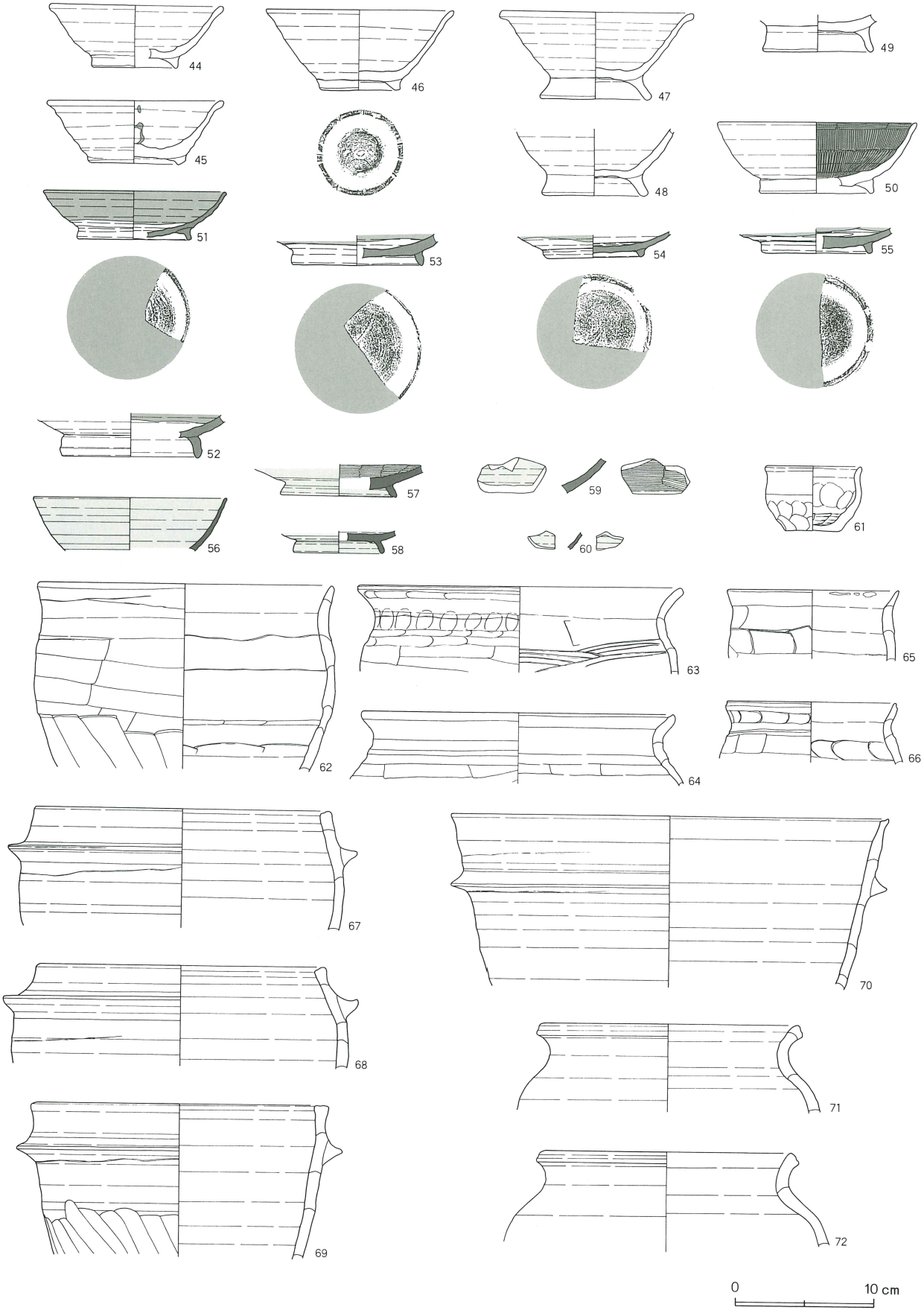


第４８号住居跡

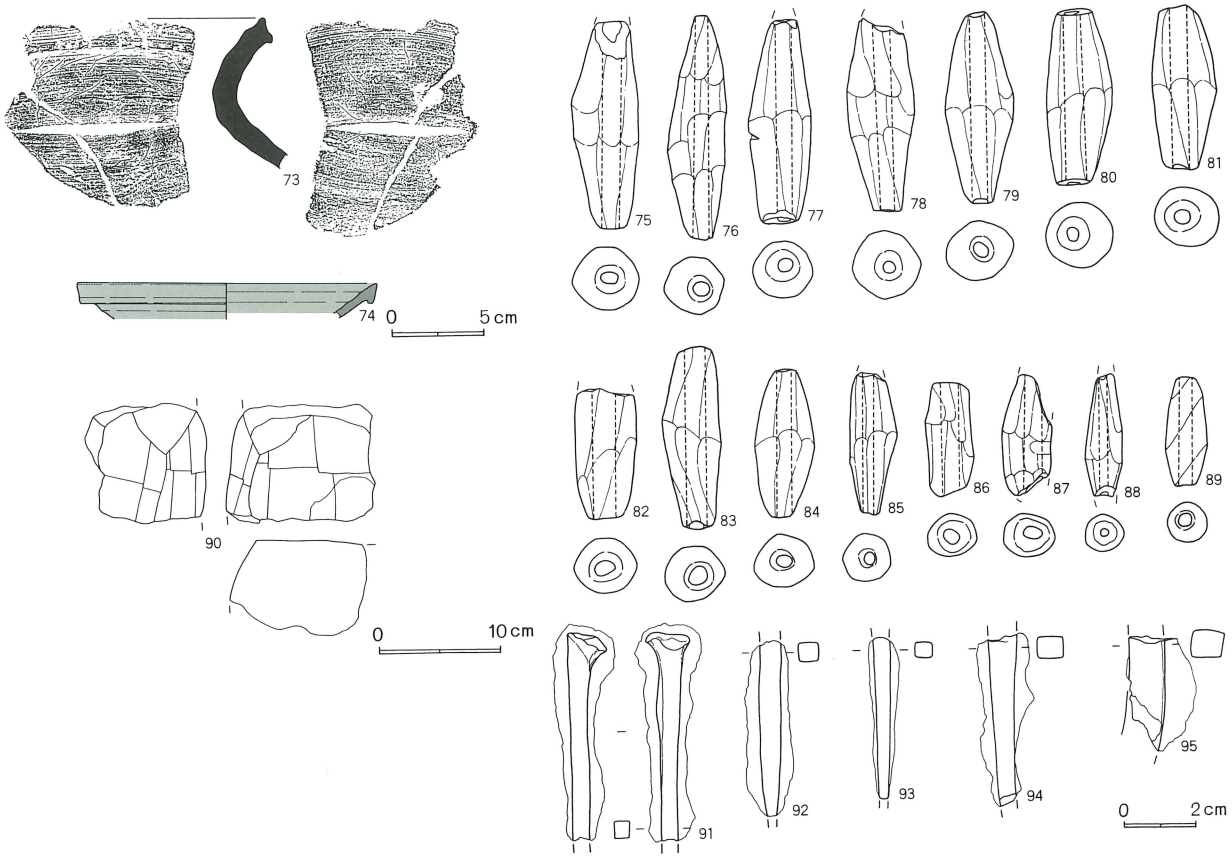
1　黒褐色土　B軽石を多量に含む
2　黒色土　焼土粒子を多量に含み、炭化物を少量含む 土器片多量
3　こげ茶色土　炭化物を多量に含む 粘性あり
4　黒色土　炭化物層
5　暗褐色土　焼土を多量に含む（炭化物層）
6　赤褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
7　赤褐色土　焼土ブロック主体（天井部崩落土）
8　暗褐色土　焼土、炭化物を多量に含む
9　暗赤褐色土　焼土粒子、焼土ブロックを多量に含む 粘性あり
10　黒色土　炭化物を少量含む
11　褐色土　白色粒子を少量含む
12　黄褐色土　白色粒子を少量含む 粘土層
13　赤褐色土　焼土、炭化物を多量に含む

第116図　第48号住居跡出土遺物（１）

第117図　第48号住居跡出土遺物（２）



第118図　第48号住居跡出土遺物（３）



第 84 表　第 48 号住居跡出土遺物観察表（1）

番号	器　種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎　土	焼　成	轆轤	色　調	残存	出土位置その他
1	坏　B	H	10.0	3.7		5.0	B, E, H	普　通		淡　橙	80	カマド
2	坏　B	H	10.0	3.7		3.8	B, E, H	普　通		黄　橙	50	
3	坏　B	H	11.4	3.9		3.8	B, E, H	不　良		暗　橙	50	カマド　砂
4	坏　B	H	11.6	4.3		4.2	B, E, H	普　通		淡　黄　橙	50	砂
5	坏　B	H	11.5	4.6		3.9	B, D, E, H	普　通		橙	90	カマド　砂
6	坏　B	H	12.2	4.4		3.7	B, D, E	普　通		淡　黄　橙	30	
7	坏　B	H	11.5	4.2		4.2	A, B, E	普　通		暗　黄　褐	50	ＳＫ２
8	坏　B	H	11.3	4.0		4.1	B, D, E	普　通		にぶい褐	70	上層黒色土層
9	坏　B	H	11.1	4.2		4.0	B, D, E	普　通		淡　黄　土	40	ＳＫ３
10	坏　B	H	11.5	4.1		4.3	B, E, I	普　通		淡　黄　橙	100	
11	坏　B	H	10.8	4.1		5.0	B, D, E	良　好		橙	40	上層黒色土層砂
12	高台付坏 B	H	12.7				B, E	普　通		淡　橙	30	砂
13	高台付坏 B	H	13.9				B, D, E	不　良		淡　黄　褐	20	ＳＫ１
14	坏　B	H	13.7				B, D, E, H	不　良		橙	30	ＳＫ３
15	椀	ＮＳ	9.9	3.1		5.6	E, G	普　通		灰白（内外一部－灰）	80	
16	椀	ＨＳ	10.7	3.6		5.1	E	普　通		にぶい橙	60	ＳＫ
17	椀	ＨＳ	11.1	3.4		5.4	B, I	良　好		黄　灰	75	
18	椀	ＮＳ	10.9	3.3		5.5	B, E, I	普　通		灰　黄	40	
19	椀	ＨＳ	10.9	3.8		4.5	B, E, I	普　通		にぶい黄橙	30	
20	椀	ＨＳ	10.7	3.6		5.0	E, I	普　通		にぶい橙	50	
21	椀	ＨＳ	11.3	3.7		4.2	B, E, I	普　通		橙	100	カマド
22	椀	ＨＳ	11.8	3.6		5.4	B, E	良　好		にぶい黄橙	60	
23	椀	ＮＳ	11.6	3.9		5.8	B, E	普　通		黄　灰	80	

第85表　第48号住居跡出土遺物観察表（2）

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
24	椀	NS	11.0	4.1		6.2	B, E	良好		灰黄	70	
25	椀	HS	10.7	4.1		5.1	B, E, I	良好		にぶい黄橙	20	
26	椀	HS	11.4	4.3		5.1	B, E, I	良好		にぶい黄橙	100	
27	椀	HS	11.8	4.1		5.3	B, E, I	良好		にぶい黄橙	50	
28	椀	NS	11.4	4.1		5.4	B, E	良好		灰白	70	貯穴
29	椀	HS	11.5	3.9		5.2	B, E	良好		黄灰	30	
30	椀	NS	11.5	4.0		4.7	B, E	良好		灰白	50	
31	椀	NS	12.0	5.0		5.0	B, E	普通		灰黄	90	
32	高台付椀	HS	10.9	4.5		5.6	B, E, I	普通		褐灰	100	
33	高台付椀	HS	11.3				B, E, I	良好		にぶい橙	95	カマド
34	高台付椀	NS	11.4	4.9		6.0	B, E	普通		灰黄	80	
35	高台付椀	HS	11.3	4.6		6.0	B, C, E, H, K	良好		淡橙	40	カマド
36	高台付椀	NS	11.6	5.0		5.3	B, E, H	良好		灰白	80	
37	高台付椀	NS	11.5	4.7		5.9	B, E	良好		黄灰	80	上層黒土
38	高台付椀	HS	10.8	4.7		4.8	B, E	普通		にぶい橙	80	上層黒土
39	高台付椀	HS	11.8	4.5		5.4	B, E, I	普通		にぶい橙	70	カマド
40	高台付椀	NS	12.3	4.7		6.3	B, E	良好		黄灰	30	上層黒土
41	高台付椀	HS	13.7	5.3		6.5	B	普通		灰白	60	
42	高台付椀	NS	13.6	4.7		6.8	B, I	普通		灰白	30	
43	高台付椀	NS	13.5				B, E	普通		灰白	25	上層
44	高台付椀	NS	12.3	4.4		5.9	B, E	良好		灰	20	カマド
45	高台付椀	HS	12.4	4.5		6.2	E	普通		灰黄褐	80	
46	高台付椀	NS	13.3	5.7		5.2	B, E, I	良好		灰	50	
47	高脚高台付椀	NS	13.5	6.2		7.5	B, E, H	良好		黒	70	
48	高脚高台付椀	HS				6.9	B, I	普通		にぶい橙	30	カマド
49	高脚高台付椀	HS				7.5	B, D, E, H	良好		浅黄橙	60	
50	高台付椀	黒色	14.1	5.0		7.8	B, G	良好		にぶい橙	40	
51	高台付椀	K	12.8	3.4		7.8	B	良好		淡灰	20	カマド
52	高台付椀	K				9.7	D	良好		灰	10	
53	高台付椀	K				9.2	B, D	良好		灰	20	
54	高台付椀	K				6.7	B	良好		くすんだ	20	
55	高台付椀	K				7.3	B, D	良好		暗灰	20	上層黒土
56	高台付椀	M	12.6				B					
57	高台付椀	M				7.9	B					
58	高台付椀	M				6.3	B					
59	高台付椀	M					B					
60	高台付椀	M					B					
61	小形甕		6.8	4.6		4.0	B, E	不良		暗栗	30	上層黒色土層
62	甕AⅣc		21.0				B, E	良好		橙	15	SK1
63	甕AⅣb		22.8				B, E, H	良好		橙	10	上層黒土
64	甕AⅢc	H	22.0				B, C, E	良好		浅黄橙	15	上層黒土
65	台付甕		12.1				B, E, H	良好		にぶい橙	15	上層黒土
66	台付甕		11.9				B, E	良好		橙	15	
67	羽AⅡaロ	HS	21.0		2.9		B, C, E	良好		淡橙	20	SK1
68	羽AⅡbロ	HS	20.2		2.3		B, E, G	良好		浅黄橙	20	
69	甑BⅡ	HS	20.4		3.2		B, E, H, K	良好		橙	20	
70	甑BⅡ	HS	31.1		4.9		B, E, G, H	良好		淡赤褐	15	貯蔵穴
71	ロクロ甕	HS	18.1				B, C, E	良好		浅黄橙	15	
72	ロクロ甕	HS	17.5				B, D, H	良好		淡橙	15	上層黒土
73	甕	NS					B	良好		灰	5	上層黒土
74	広口長頸壷	K	15.8				B	良好		灰白	10	

第86表　第48号住居跡出土土錘観察表

番号	色調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
75	浅黄橙	80		1.9	0.5	13.3	C 1	Ⅰb	141	
76	にぶい黄橙	70	6.0	1.7	0.5	11.6	C 1	Ⅰb	142	
77	浅黄橙	90		1.6	0.4	13.7	C 1	Ⅰa	143	
78	褐灰	90		1.8	0.4	14.0	C 1	Ⅱa	144	
79	浅黄橙	100	5.1	1.8	0.4	11.7	C 1	Ⅰa	145	
80	浅黄橙	100	4.5	1.8	0.4	13.6	C 1	Ⅰa	146	
81	にぶい黄橙	100	4.5	1.8	0.5	10.7	C 1	Ⅰa	147	
82	浅黄橙	60		1.7	0.6	8.3	C 1	Ⅳa	148	
83	浅黄橙	100	4.8	1.7	0.6	9.3	C 1	Ⅰc	149	
84	橙	100	3.9	1.6	0.4	7.7	C 1	Ⅰa	150	
85	褐灰	70		1.4	0.3	5.5	C 2	Ⅱa	393	
86	にぶい灰黄	90	3.0	3.0	0.4	4.1	C 2	Ⅱb	394	
87	浅黄橙	30		1.3	0.5	3.7	C 2	Ⅷ	395	
88	にぶい橙	80		1.1	0.2	2.5	C 2	Ⅱb	396	
89	褐灰	100	2.9	1.1	0.4	2.8	C 2	Ⅰa	397	

63から68・71・72は胴部上位以下、69・70は胴部中位以下が欠損している。73・74は、口縁部のみである。

75から89は、土錘である。

90は、凝灰岩である。

91から95は、鉄製品である。91・92・93は釘、94・95は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第48号竪穴式住居跡を中堀Ⅷ期に位置付けたい。

49号住居跡（第119図）

F・G－9グリッドで確認した。周辺は、土壙や小穴など遺構が密集し、確認に手間取った。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺4.36m・短辺3.63m・深さ0.14mであった。

主軸方位は、N－84°－Eであった。

カマドは、南壁で検出した。南壁にカマドを構築したのは、本住居跡と第225号住居跡の二軒のみであった。両袖は、検出されず、わずかに浅く楕円形に掘り込んだ燃焼部を検出した。燃焼部の位置から袖は、造り付けで、住居跡内に伸び、燃焼部全体が住居跡内に造られていたと推定した。

遺構の切り合い関係は、第236・237より古かった。

遺物は、カマド内から土師器の甕（11・12）、カマド脇から須恵器の高台付皿（5）、南西隅から土師器の坏（1・2）が出土した。

1から4は、土師器である。1・2は、坏AⅣである。3は、坏AⅡである。4は、皿である。2・3は、底部が欠損している。

5は、須恵器（HS）の高台付皿である。6は、黒色土器の椀である。

7から9は、灰釉陶器陶器である。7は高台付椀、8・9は、段皿である。10は、緑釉陶器の高台付椀である。7から10は、口縁部と底部が欠損している。

11・12は、土師器の甕である。13は、須恵器（S）の甕である。11・13は胴部上位以下、12は胴部中位以上が欠損している。

14は、土錘である。15は、棒状鉄製品である。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第49号竪穴式住居跡を中堀Ⅳ期に位置付けたい。

第50号住居跡（第120図）

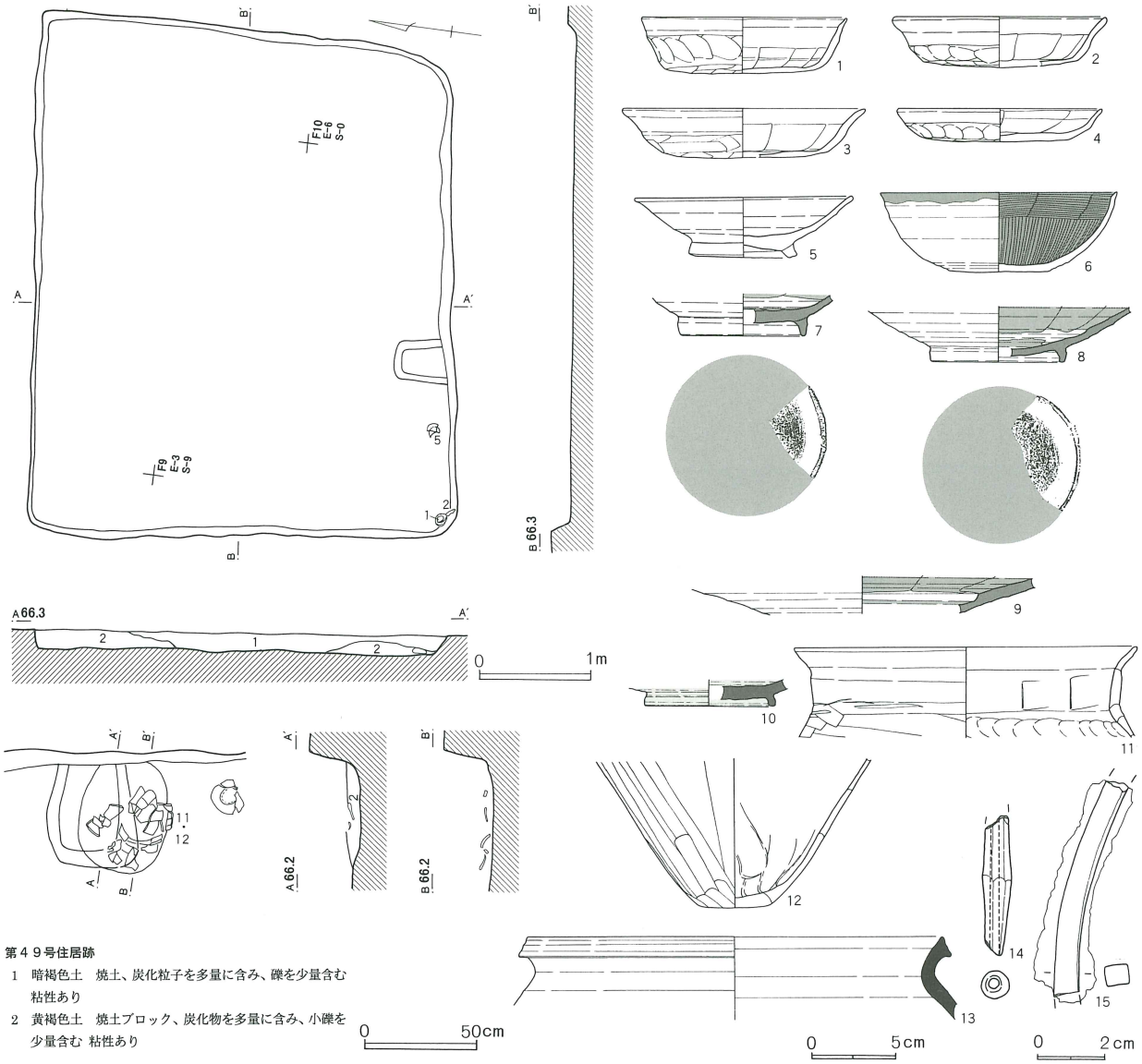
G－9グリッドで確認した。周辺は、土壙や小穴があったが、比較的疎らであった。

住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.94m・短辺2.74m・深さ0.08mであった。

主軸方位は、N－83°－Eであった。

カマドは、第51号住居跡が破壊した可能性もあったが、元来、カマドを付設しなかった住居跡と推定した。

第119図　第49号住居跡・出土遺物



第４９号住居跡

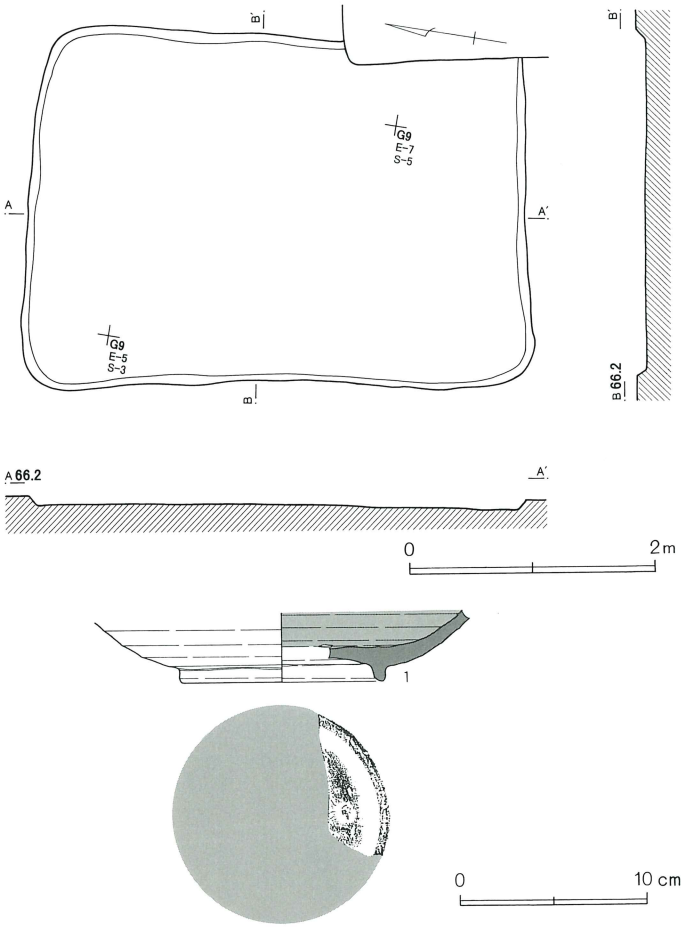
1　暗褐色土　焼土、炭化粒子を多量に含み、礫を少量含む　粘性あり

2　黄褐色土　焼土ブロック、炭化物を多量に含み、小礫を少量含む　粘性あり

第87表　第49号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	坏 A Ⅳ	H	11.8	3.2		8.6	B, D, E	普通		淡橙	100	
2	坏 A Ⅳ	H	12.2	2.9		8.9	B, D, E	良好		淡橙	30	
3	坏 A Ⅱ	H	14.0	2.9		9.5	B, D, E	不良		淡橙	80	
4	皿	H	11.7	1.9		8.2	B, E	普通		淡橙	20	
5	高台付皿	HS	12.5	3.5		5.9	B, E, H	良好		外－赤褐。内－黒褐	60	
6	椀	黒色	13.6	4.5		5.8	B, C	良好		浅黄橙	25	
7	高台付椀	K				7.0	B, D	良好		暗灰	20	
8	段皿	K				7.4	B	良好		灰	20	
9	段皿	K					B	良好		灰	15	
10	高台付椀	M				7.2	B, H	良好		淡緑	10	
11	甕 B Ⅱ イ	H	19.8				B, C, E	良好		浅黄橙	40	
12	甕底部	H				3.9	B, C, E, H	良好		橙	80	
13	甕	S	24.0				B, G	良好		暗青灰	15	

第120図　第50号住居跡・出土遺物



住居跡の形状は、長方形であった。規模は、長辺3.48ｍ・短辺2.63ｍ・深さ0.19ｍであった。

主軸方位は、N－81°－Eであった。

カマドは、東壁の南寄りに検出した。左右の袖は、住居跡内に張り出すように地山を掘り残して造られていた。両袖の先端には、補強材の川原石が使用されていた。幅の狭い燃焼部は、楕円形に浅く掘り込まれ、小穴が、燃焼部奥から煙道部を破壊していて不明であった。燃焼部の中央から川原石を使用した支脚を検出した。この支脚の上からは、須恵器の高台付椀（４）が、伏せられた状態で出土した。

カマド右脇の南東隅に径0.3ｍの小穴状の掘り込みを検出した。貯蔵穴としては、規模が小さい。

遺構の切り合い関係は、第50号住居跡より新しかった。

遺物は、カマド内からは、須恵器の坏（１）・須恵器の高台付椀（５）、カマド前面からは、灰釉陶器の高台付皿（８）が出土した。

１・２は、須恵器（ＨＳ）の椀である。３から７は、須恵器（ＨＳ）の高台付椀である。１・２は、底部が欠損している。５は、内面体部から底部にかけて黒色の付着物が確認できる。油煙の痕跡と考えられる。

８は、灰釉陶器の高台付皿である。９は、緑釉陶器の高台付椀である。９は、体部破片である。

10は、須恵器（ＮＳ）の羽釜である。11は、須恵器（ＨＳ）の高脚高台付大形鉢である。10は、胴部下位

遺構の切り合い関係は、第51号住居跡より古かった。

１は、灰釉陶器の高台付椀である。１は、口縁部と底部が欠損している。

以上、出土遺物・遺構の重複関係等から第50号竪穴式住居跡を中堀Ⅲ期に位置付けたい。

第51号住居跡（第121図）

Ｇ－９・10グリッドで確認した。周辺は、土壙や小穴がみられるが、比較的疎らであった。

第88表　第49号住居跡出土土錘観察表

番号	色　調	残存率	長さ	径	穴径	重さ(g)	型式	欠損分類	写真番号	出土位置その他
14	褐　灰	80		0.9	0.3	2.2	C 2	Ⅰa	398	

第89表　第50号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	種別	口径	器高	鍔	底径	胎土	焼成	轆轤	色調	残存	出土位置その他
1	高台付椀	K				10.7	D	良好		黄灰白	30	